
東方虹炎

虹色北斗七星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方虹炎

【Nコード】

N5379X

【作者名】

虹色北斗七星

【あらすじ】

その日、一人の少年が風邪ひき、眠りに就いた・・・
目覚めるとそこは見知らぬ世界
・・・いざ、原作キャラ探しの旅へ！！
え？内容が飛びすぎだって？そんなの知るかよ

雑な文ですが読んでもらえるとありがたいです・・・。

第1話 風邪の恐ろしさ（前書き）

この小説は、東方projectの2次創作になります

駄作ワロスワロスやこんなもの読めない、読みたくもない、という人はback

しょうがないから読んでやるよ、という人は、下にお進みください

それでは、始まります〜

第1話 風邪の恐ろしさ

その日は、何処までも続く青い空、そして、雨の降った後でもないのに綺麗な虹がかかっていた・・・

「ハア・・・なんでこんなむだに天気がいい日に風邪なんて引くんだろぅな、俺の体は馬鹿なのか？」

通常時の俺、まあ風邪をひいてない時の俺はもっぱら、喧嘩ばかりしていた、だから、こうして部屋の中で、ずっと寝ているなんて真似はできないのだ、小学生でもできるのに・・・あ、ちなみに俺は高校生だ

「腹減ったな・・・飯はどうすつか、コンビニにでも行っておでんを・・・あゝでもな、悪化したらあばれなくなるしな・・・」

しばらく悩んだ結果、お粥を、作ってもらうことにした友達に

ベットから、必死に降り、机の上から形態をとり、友達に電話をかける

「よお、今俺風邪ひいてんだけどさあ」

《知ってるよ、だから学校休んだんだろう？》

「ああ、知ってるのか、つーことは、おまえ学校行ったのか」

《まあね》

「もう義務教育じゃないんだぞ？」

《それでも、必死に受験を受けてやっとの思いで入れたんだから、一応出ないとね》

「でも、1時限目で帰ると言う・・・」

《悪いか？》

「いやあゝ別に」

ちなみ言つと、今は午前10時14分、一時限目はまだやってんのかな？俺も友達も最初はじりの5分で帰るからよくわかんない・・・

「じゃ、つーわけで、お粥作りに来て」

《おい、話の内容がつかめないぞ？》

「うるさい、いいからこいつ！！」

《えゝ俺今『超改造！ ビフォーア。ター』見てるんだよ》

「お前、建築家目指してんのか？俺らの通ってる学校は食品系の学校だぞ？」

《え？一寸、それよりも『超改造』については触れないのか？！》

「いや、劇的やないかい、ハイ、これでよし」

《棒読みにもほどがある！てか、十分元気じゃねーか！！》

「うるさいうるさいうるさ《よしわかった、今すぐ行くから、その続きはいうなよ？いろいろと面倒だから》O～K、んじゃ、待ってるぞ」

ピッ！

妙に心地のいい通話を終える音が鳴り

「めっさ、寝むたい、あいつが来るまで寝てるかあ……」

眠りに就いた

で、目が覚めたら、謎の森の中、素敵な夢だね、うん神秘的

「よし、もう終わっていいぞ夢、これ以上は迷惑だ、神秘的もあまり見ると夢がなくなるから」

俺には夢も何もないんだけど……

「……」

覚めない、終わらない、まだ森の中

「やべ、体調が……」

夢の中でも風邪を持ってくつて、どんだけ最悪な夢なんだよ

「あつ!！」

そういえば、頬を抓れば目が覚めるんじゃない・・・

とりゃーっ!!!

心の中で叫ぶ、そして思いっきり抓る

「痛つてえええええええっ?!」

・・・夢じゃなかった

落ち込んでいると何処からともなく大きな音が

「なにこれ? 獣? 妖怪?」

見上げるほどの、じゃ済まない、とにかくでかい、でかい獣がいた・

「やばいな・・・何でこんなでかいのに今まで気付かなかったんだ俺?」

夢の中で死ぬとか冗談じゃない、とりあえず

「夢でもパワーは変わらないよなッ!！」

獣の足に思いっきり蹴りを入れてやる

「ッ~~~~~!!!!」

こちらに鉄板を殴ったような衝撃が来ただけで獣のほうはびくともしない

「もういいよ、この夢、覚めろよ・・・」

泣きごとを言うと、目の前から、左右の端にリボンがついた穴、スキマが現れた

そして、ニユッ』という心地のいい音とともに

「はい、紫ちゃん登場です」

紫ちゃんが出た・・・

第1話 風邪の恐ろしさ（後書き）

さて、1話を改めてみると、大変なことになっていたのだから、と、いじらせてもらいました

ちなみに、パシリは『TOTO』ですw

第2話 彩音の初戦1 (前書き)

くあらすじい

前回俺は風邪をひいてしまった、健康管理を怠るところなるんだ！

第2話 彩音の初戦1

「・・・どうしたのかしら？そんなに驚いたかしら？」

「・・・当り前だろう？！目の前であんなもの見せられて」

「あんなものって、ただスキマ見せただけじゃない」

「いや、それ以前に何で上半身だけだしてるんだよ？！」

「ああ、何だそっちのことなのね・・・」

身軽な動きでスキマから飛び出した紫、自称だと紫ちゃんか？

「・・・ああ東方にいたなあ～そんなキャラ

東方の紫と言えば、変な帽子かぶって、変な衣装来て、式神を使つて、B B Aで

「今何か変なこと考えなかったかしら？」

「滅相もない」

「・・・やばいよ、全部当てはまってる、これはヤバイ、大変な夢だ、早く起きろ、俺無理だよ、こんな世界わかんないよ、どうすればいいんだよ、さっさと覚める夢EEEEEEEE」

「あ～一寸いいかしら？」

「ッ〜なんですか？」

「あなたはどうしてここにいるのかしら？あなたはここで何を
しているのかしら？」

「え〜と、答えきやだめですかね？」

「答えなくていいことなら聞いてないわよ、おかしな人ね、でも、
そういうところが楽しいわ」

「・・・って、っ〜かどうやって答えればいいんだよ

「え〜と、最初の質問、『あなたはどうしてここにいるのかしら？』
についていきますよ」

「お願いするわ」

「寝て起きたらここにいました、以上」

「・・・」

なんか、明らかに嘘ついているでしょ、見たいな眼で見てくる、照
れる・・・

「次の質問の答えをお願いしますわ」

「え〜と『あなたはここで何をしているのかしら？』は焦ってまし
た、獣蹴り飛ばしたらすごい衝撃が来て、泣きかけてました、以上」

「泣きかけるなんて情けない・・・まあ、わかったわ、あなたは怪

しい人では、無いのね？」

「俺が怪しいって言ったら、たぶん、俺の担任、もう、逮捕されますよ」

俺の担任とは！常に、マスク＋サングラス＋紺色のジャンパー＋半ズボン、という、教師らしくない、つーかもう、授業してないので教師じゃない、教師のことなのだ、ちなみに頭の上に常に猫が乗っかっているのだ、名前は、『ドラエモノ』なのだ

「そう、貴重なのはわからないけどまあ、一応貴重な時間をありがとう、じゃ、この獣との勝負頑張ってね」

そう言い残し、スキマに入っていく

俺はその光景を手を降りながら眺める

「本物めちゃくちゃ胡散臭い」

その声に反応したのか獣がいきなり吠え始めた

「どうした急に！！」

「あゝおまけでその獣威嚇しておいたから、まあ、頑張るなさい」

そしてスキマに入って行った

と思ったらまた出てきて

「そうよ、名前を覚えてちょうだいな、私は八雲紫^{やくもゆかり}あなたは？」

「あ、俺は彩る音と書いて彩音^{さいね}だ」

「そう、なら今度こそ、頑張つて」

「さていつちよド派手にいきますかあ!!」

あ、東方つてたしか能力があつたよな俺の能力は・・・

色・・・色が

「よっし、行くぜ!!」

2回目でもテンションが高ければそれでよし!

「うおおおおおつ」

その前に

どうやって使うんだコレ?!

第2話 彩音の初戦1 (後書き)

ついでに第2話も

おそらくですが、3話とつながってます不自然だと感じた場合は編集するので、堪忍を・・・

第3話 彩音の初戦2

色、いろ、イロ．．色を使つて戦う

色、赤、白、黄色どの花みてもおきれいだなああああつ

やばい、とてもやばい、俺ピンチ！大変

えーと黒ね、黒いいえ、イメージは闇、闇かあ、闇は真っ暗で何も見えない、目、視界を潰す？

あの獣に目はある！ってことは

黒で目潰して．．これいけるんじゃない？

「うおい?!」

「グルルルルッ」

獣さんは爪で俺を突き刺すつもりらしい、怖いよ？刑務所だよ？ブタバコ入りだよ？

「ねえ、一寸いいかな？獣さん、俺が能力使えるようになるまで待とうよ？そうしたいいい戦いができるよ」

「グラアアア」

「ちよつ、吠えんなよ耳痛いから」

どうするよ?!マジで、死ぬ？

いや、それは頑固拒否だな拒否権は俺にある!!

．．念じてみるか

あの獣の目を黒く塗りつぶす!、視界を奪え!

「ヴォアアアアッ」

「つできたあ!よっしゃあつ、なんか、塗りつぶすだけじゃなくて目の中に絵の具入ったとき並にくるしんでらあ、ざまあねえ」

まあ目の中に絵の具は入った事なんてねえけどな、絶対痛いよなやりたくない

どんぐらいの痛みなんだろうな?目見えなくなんのかな?

まあそんなことより

俺の勝ちだ！やったぜ

ってアレ？フラフラすんぞ？

ここで気絶って洒落にならねえな

「せめ、て喜びに、浸る時間を、く、れよ・・・」

そこで、俺は意識を手放した。

第3話 彩音の初戦2 (後書き)

彩音初戦勝利！

そして次回から修行になる・・・かな？

第4話 自分なりの戦い方 (前書き)

修行に入ります！

第4話 自分なりの戦い方

意識を取り戻した俺は、当然森の中にいた。

「あー腹減った」

俺は人間だ当たり前のように腹が減る、更に、ゆかりんとかみ合わない話、ログアウトした獣との戦いとなればもう、減らない方がオカシイ

「まあとは言っても、飯なんて」

俺の視界にログアウトしてる獣が写った

「いただきます」

獣を喰らう、まあこつちが喰われそうになったんだから逆にコツチが喰っても問題ない！！

ちなみに火は木と木を擦り合わせて起こしたライター欲しいって思っただけ、これはこれで達成感が半端ないのでよかったZE
そっぴいや此処は幻想郷か？

それともできる前？どっちでもいいや

そっぴいやあ俺の、もう一つの能力（音を奏でる？音を操る？）

なんなんだ気になるなーまあいいさ、そのうちわかるWWW
よし、寝よう・・・おやすみ

修行しようなぜかそう思った

まあなぜかって言っても飯なきや生きていけネエもんなWW
さてと、どんな修行をしようか？

- ・ 周り一面を黒く染める
- ・ 獣で練習する

．．．迷わず2こ目だな

周りを黒く染めるってなに考えてんだよ、俺w こゝよ
でもそんな都合良く修行相手なんて．．．
獣さんがログインしたお

彩音はどうする？

- 1、周りを黒く染める
- 2、相手に回し蹴りを入れてやる
- 3、頭突き！「慧音並みの威力のやつ」
- 4、前の戦いで使った眼潰し！

よし、あれだな1、2、3全部無理だw

よっしゃこれに決めた！

彩音の攻撃「不意打ち 目潰し！！」

第4話 自分なりの戦い方 (後書き)

なんか続きがかけない・・・

さすがpspですねwwwさて次は

「不意打ち目潰し!!」の続きですお楽しみに

第5話 二つ目の能力、開花の気配？

「よしっこれで飯が．．．」

ん〜おつかしいなあ後ろに気配を感じるお、やばいお
どうするよ．．．

- ・周り一面真っ黒に（ry
- ・二つ目の能力で倒す

あれえ？オカシイな〜二つ目とか、まだ、能力もあやふやなのにと
うしろってさ

まあ、目潰しするか、二回目は上手く逝くもんだろ？

あれ？字、俺が死ぬみたいにな、ああ死ねってことか神様ひどいね

え？ああ、あれか？俺は選択肢は下のものじゃないと死ぬってか本
当に神様ひどいね

もうヤケクソだあー！

「音を奏でてみる！！！」

ドゴオオオオオオン．．．

え？なんか途轍もない轟音鳴りましたが？

獣さん飛んで逝きましたが？どうするんですか？

「俺の能力ってなんなんだ？」

色を操る程度の能力

音、さっきのは轟音だったよな．．．威力半端ないの、どこから出
たのかは知らんけど

音．．．音楽聞いて寝たい、現代が恋しい
なんて思ってたなら眠くなってきた

「フアアアアアアア〜ッ」

欠伸でるほどつ、てか欠伸長えよ、ここにも馴染んできたのかな？
まあいいや、めんどくさいことは・・・
明日考えようつと。

「眠れない！」

なれない場所ですぐ眠れるやつ、感心した、すごいんだなほんと
「まあ飯食ってねえし、眠れなくて当たり前？だよな・・・」

飯ねえ、獣って食えるのかな？

昔の人はイノシシとか、クマとか、オオカミとか、魚とか食ってた
もんな

食えるか、いや、でも魚関係ない・・・

いやね、でも、ここだけの話俺、前、獣食ってるんだよね
実にうまかった

でもそのあと・・・腹壊して大変なことに・・・

あ、腹筋崩壊とかじゃないぞ？

でも、火はとうして食べたんだよね

生焼けだったからか？

まあ俺の頭は

考えるだけむだっていう構造でできてるんだよね、考えるだけむだ
っていう・・・

「食おう！」

えーと何処に吹っ飛んだんだ？あいつ？

人に迷惑かけるなって教わんなかったのか？

「おっ、いたいた」

見事に焼けてるよ、轟音つてすげえな

まあとりあえず

「いただきます」

そのままかぶりつく、毛がうざい

「うん、まあまあだな」

それから約30分ほどで全部食べきった、3日分くらいはあったなアレ

「僕、満足!」

どこぞかのCMだコレ

「さてと、寝ますか」

うん今度はちゃんと眠れそうだ

「おやすみっと」

眠りにつきました

第5話 二つ目の能力、開花の気配？ (後書き)

彩音は、後先考えずに行動します

「眠れない！」から追加しました、多少は長くなった・・・

第6話 旅に出る決意

「いい朝だ・・・2度寝したい・・・」

思わず呟いた、呟いてしまった、え？理由？それわね、俺の音に関する能力がわかったからさ

え？聞いてない？聞きたくもない？いいじゃんか、いい朝なんだぜ
言わせろよ

で俺の音に関する能力は、
音を集める程度の能力

すごいぜこれ、下手すりゃ、蝙蝠の超音波とか聞けるかもしれない
ちなみに、昨日の戦闘の轟音は、周りから音を集めて放射した結果だ
え？聞いてないだど？いいから言わせろよもう・・・t e n s i o
n下がるぜ、本当・・・

で、関係ないのだが、俺は幻想入りしたのにも関わらず、原作キャラに殆どあつてない気がする、これじゃあ、もったいない
だから旅に出る、俺旅に出るんだ！

唐突すぎるが出るもう決めたんだ・・・誰も俺を引き留めることは
できない

引き留めるやついないが。

で何処に行くかというと、何処行こうか…？

んゝ神様とか、かぐや姫とか

かぐや姫か！かぐや姫だったら

輝夜と妹紅と永琳に会えるってん？人これはでかいな。

なんてどうでもいいことを脳みそフル回転で考えてた俺、地味に恥ずかしい・・・

で俺は今何処にいるんだ？魔法の森からどうやって出るんだ？

「不安だなこれから先・・・」

やっていけるのか？俺・・・

第6話 旅に出る決意（後書き）

こんな駄作をお気に入り＆評価していただきありがとうございます
！！

これからも書き続けようと思いますので、見ていてください。

第7話 旅、出会い

そうして俺は旅に出た、原作キャラに会いに

「で、ほんとに何処にいるんだよ」

都に行こうと思ってたんだが・・・都ってどうやっていくの？って
ことになり

正直に言うとか泣きかけた、ってか涙出た、情けねえ

でもここできじけたら男じゃない！って言い聞かせてがんばった

「あ！俺の能力で声を集めてその声の方向に行けばいいじゃねーか」
俺の能力やたら便利だな

「集中して・・・ん、こっちのほうから声が…」

「助けてえーー」

「え？」

何これ？悲鳴？迷子？妖怪さんに襲われてんの？
とりあえずその声の方へ

「ハアハア… ったくどんだけ遠い所から音集めてんだよ」

若干イラつきながらも走る、能力にいらついても意味ないが

「あれは、ハア人影か？ハアッハア」

「今行くからっ、待ってるよ」

「助けてえ」

やつとたどり着いた先に待っていたのは
泣きながら助けを求める黒髪の少女と、涎を垂らしながらどこを食
べようかと少女を見ている妖怪だった
え？獣さん？あれは俺を襲って晩飯になる妖怪のことだよ、これは
違うんだ

「はぁ大丈夫か？」

「え、あ、ううつ」

恐怖でうまく言葉が話せないか、俺が初めて喧嘩した時もそうだったなあゝあ、これ関係ないや

「おい、俺がこの妖怪を退治してやるから、泣きやんどけよ、なっ
？」

「うつ、グスツ、はい」

さてと、どうすっかな

やっぱり眼潰し行きますか？効果なさそうだけど・・・

「先手必勝！秘儀！眼潰し」

実際は秘儀じゃない！

黒い絵具をイメージしながら
相手の目に攻撃

「・・・うまくいったか？」

もがいてる、よし、うまくいったな

次は音を集めてレーザーをイメージして、発射！

「轟音レーザー！」

厨につぼくなったな、まあ倒すことができたならそれでよし
うわぁこんがりだよ・・・音ってすげえな、感心・・・

「ふうこれで大丈夫だな」

「あ、ありがとうございます」

「いやいや、お礼なんていいよ、目の前で人が食われんのは見たくないからな、ところで君、名前は？」

やさしい感じでね

「妹紅、藤原妹紅」です

え？今なんて？妹紅？この黒髪少女が？

「えとお、も、妹紅でいいのかな？」

「はい、そうですがどうかしましたか？」

「い、いやなんでも、ないよ」

ああ、思いだした妹紅って蓬萊の薬使用前は黒髪だったんだっけ

「ところでさ、ここには1人できたの？」

「はい、そうですが」

「ならさ、また妖怪に襲われるかもしれないから家まで送るよ」

「す、すみません、ご迷惑をおかけします」

「いや、いいよ」

とりあえず家に向かいながら、どうしてあんなところにいたのか聞いてみた
すると、

「食べ物を取りに来ていた」

だそうだ、都に食べ物くらい売ってるだろ？って聞いたら

たまには生きのいいものを食べたいんだそうだ

生きのいいって魚か？w

しばらく歩くと妹紅の家についた、ついたので、かぐや姫を見に行こうと思ったら妹紅に

「ご迷惑をおかけしたので、お茶くらいお持ちしますよ？」

と言われたのでお言葉に甘えることにした。

ズズズズツと音を立てながら、お茶を啜る

「あゝ体にしみるわあゝ」

「道中はとても寒かったですからね」

妹紅が答える

「そうだなあゝ」と答えながらまた、お茶を啜る

あれ？　そういえば、まだ子の家で妹紅以外の人を見ていないぞ？　失礼かもしれないが、ちょっと聞いてみよう

「なあ、妹紅、まだこの家に入ってから妹紅以外の人を見ていないんだが」

「ええ、それは1人暮らしなので当り前ですよ」

ハイ？　1人暮らしって、妹紅って貴族のお生まれですよ？

「妹紅ってさ、藤原ってついてるけど、貴族の藤原氏とは関係あるの？」

「ええ、まあ一応」

「なら何で貴族の子が1人暮らしなんてしてるの？」

「それは・・・」

「ああ、ごめん答えたくないなら答えなくてもいいよ」

「・・・すみません」

なんか悪いことしちゃったな・・・。と思いながら反省する

「あの、すみません、もしよかったら、よかったらでいいんです、

私の依頼を聞いてくれませんか？」

「依頼？」

「はい、私の父が今、都で噂になっている、かぐや姫に夢中なんです。それで、明日かぐや姫が月に帰るそうなんです、それで父が帝と一緒に戦うって言うんです、私が辞めろって言うっても聞いてくれなくて」

「その父親を説得しろと？」

「いえ、どうせ言っても無駄ですなので、あなたに明日、月の使者と父が戦う時に守ってくれませんか？」

「守る？」

「はい、彩音さんの強さならそれも可能だと思ひまして…」
「守るねえ」

「あの、彩音さんがいやっていうのならいいんです、すみません…」
「いや、別にいいよ」

「ほ、本当ですか?!」

「ああ」

「ありがとうございます」

「いいよいいよ、お茶ごちそうになったお礼さ」

「ありがとうございます」

「いやもういいよww」

「で、では今日は家に泊まっていつてください」

「ああ、そうさせてもらうよ」

「それでは、布団を敷いてきますので待つていてください」

「了解!」

…守るか、軽く受け入れてしまったが今の俺にそんなことが可能な
のだろうか?

自分を守ることと精いっぱいなのではないだろうか?

…やるってきめたんなら、やるしかないか

「彩音さん、布団が敷けましたよ」

「ああ、わかった今行くよ」

俺は布団に入つて寝ることにした、考えたつて無駄だしねww
頭疲れるだけだし…そう付け加えてから、寝た

第7話 旅、出会い（後書き）

長くなりました、普通の人ならこれくらいの長さが普通なんですよが、僕にとってはとてつもなく長いですw w
今日の更新はこれでおしまいです。
またいつか逢いましょう。

第8話 月人VS彩音（前）

起きた、

よく寝た、十分すぎるくらいに寝た

「おはようございます」

妹紅が来た、挨拶をしにわざわざ来た

「おはよう」

言われたからには、返す！これテストに出るよ

「いい朝ですね」

妹紅、悪いがその件は1度やっているんだ、かぶっているんだ
そんなことを思いつつも

「ああ」と、返事を返す

「・・・彩音さん今日の父のことなんですけど・・・」

「ああ、それについてなんだけど、妹紅の父親の顔がわかるものってないかな？」

思っていたことを話す、頭疲れるって言ったけどそこまでつかれなかった、俺は？じゃないことが証明されたw

「え？ああ、そうですね顔がわからなかったら守も何もないですもんね」

「うむ」

一応同意しておく

「一寸、待っててください、今とってきます」

「了解した」

・・・20分くら待っても来ない

なにかあったのか？

なんか埋まってるのかありそうなんだが・・・

「見に行こう」

見に行くと、予想どおり埋まっていた
流石妹紅！期待を裏切らないぜ！！

「大丈夫か？」

声をかけてみる

・・・返事がない、本当に大丈夫か？

「ふぁいほうふれす」

ん？なんか聞こえたぞ？

「妹紅、どこにいるんだ？」

「ふぉふぉれふ」

「いやどこだよw」

見つけるのに10分くらいかったw

「いやゝ見事に埋まってたな」

「もういじらないでください！」

顔を真っ赤にして答える

萌え要素たっぷりだな

「で、どんな顔なんだ？」

「これです」

うゝむ、何と表したらいいんだ？

「か、かつこいいな」

とりあえず言っておく

「そ、そんなことないですよ」

照れながら返事を返す

やっぱり親が褒められるとうれしいもんなのか

さてとそろそろ行くかな

「じゃあそろそろ行くな」

「ハイ！父を宜しくお願いします」

「オウ！」

そう言つて妹紅の家を後にした

しばらくして輝夜の屋敷につ着いた
帝のものであふれかえっていた

「妹紅の父親はどこだあ？」

こんなに帝のものが多くては探すのに骨が折れる

「ム・・・？あれか？」

それたしき人を見つけた、見つけた途端だった。
何者かが声を上げた

「月の使者が来たぞ！」

「まじ・・・かよ」

「急げ！急げ！俺！！」

手を伸ばせば届く距離

そうして俺は手を・・・伸ばせなかった

俺が手を伸ばそうとした相手は

蜂の巣になっていた

「うあああああああつ」

目の前で人が蜂の巣にされた
吐き気がした、それと同時に

「次は自分かもしれない」

という感情が俺を襲った

死にたくない死にたくない死にたくないねえよお

次々と蜂の巣にされてゆく人々

「あつ、ああ」

【ソレ】をみて俺の中の【ナニカ】が壊れた

「フフフッフハハハッ」

俺は奇妙な笑い声をあげていた・・・。

第8話 月人VS彩音（前） （後書き）

彩音が壊れました。

更新遅くなってしまいました

これからちゃんと1日1本は書こうと思っています

第9話 月人VS彩音（後）

「フハハハハッ」

ドオオオオオン

その場には彩音の奇妙な笑い声が響いた

それ以外の音は時折鳴り響く轟音だけであつた

この轟音は、彩音の能力 音を集める程度の能力で放っているものであつた

彩音は笑い続けた、涙を流しながら

「フヒヒヒヒヒッ」

泣きながら笑う何と可笑しな光景であろう

ドオオオオオオオン

轟音は次第に威力を弱めていた。

轟音がやんだとき、そこには血の海が広がっていた

「あれ？、俺はなに、を？」

正常になつた彩音はこう呟いた

「あなたがやったのよ」

後ろから声がした

彩音が振り向くと

そこには

不老不死の2人

蓬萊山輝夜と八意永琳がいた

「おれが？やった、だと？」

彩音は疑問をぶつけた

「そう、あなたがやったのよ」

輝夜が答える

「あなたは、あなたの周りで人が死んでゆくのが耐えられなかったのでしょうね、次々と音集めていたわ、そして、音を放ち、身にとっていたわ」

「おれがやった、おれが・・・」

ああそうか、俺は妹紅の父親が目の前で殺されて、それで

狂った

ああ、もうだめだ、おれは、おれはあ

「うつつ ああああああああつ」

泣いた、その場に崩れ落ちるようにして泣いたノドが潰れるまで泣いた。

彩音が泣きやんだときは、もう日が沈み、輝夜たちはいなかった

妹紅に報告しなくては

顔を真っ赤にして彩音は妹紅の家へと歩み始めていた

第9話 月人VS彩音（後） （後書き）

V S月人とかタイトルで書いておきながら、実際は彩音が一方的に月人を殺つていくだけでした

とりあえず輝夜と永琳はここでもいなくなります、また話が進めば出てくるかもしれません。

第10話 妹紅と彩音は何を思っ (前書き)

記念すべき?10話め!

だからと言ってSPをやったりはしませぬ

第10話 妹紅と彩音は何を思う

彩音はフラフラと歩いていた。

時折人にぶつかりながらも歩いていた

・・・すべてありのまま伝えなくては、たとえ妹紅に嫌われようと、ありのままのことを・・・

彩音はたどり着いた妹紅の家へ

そして

「お、じゃま・・・する」

そう言つて家の中に入った

「あ、おかえりなさい！彩音さん、晩御飯はできてますよ・・・？
どうしたんですか？」

「・・・ゴメン」

「どうしたんですか？彩音さん」

「妹紅の父親守れなかった、見つけたけど、触ることもできずに、
蜂の巣にされちまったあ」

「え・・・？」

妹紅は驚きを隠せないでいた

「守るって約束したのに、守り抜いてやるって決めたのに」

彩音は再び泣き始めた

「うつうつ、ゴメン、ゴメン！俺がもっと早く家を出ていれば、
こんなことにはならなかったのに・・・」

妹紅は何もしゃべらず

嘘だ、信じられないという風に首を横に振っていた

それはそうだろう、いきなり父親が蜂の巣なんて言われて平常心が
保てるものなど、いないだろう

そして彩音は泣きやんだ、
そして、重く閉ざされた口を開いた

「俺はここを出ていく、旅をする、本来はもつと早くここを出るべきなんだけど、できないでいた、今までここにおいてくれてありがとう」

「ッ！」

妹紅が何かを言おうとしている、ただ、それを聞いてしまったのは決心が鈍るような気がしたので、気にしなかった

「いやだ！もう、いやだあ、失いたくない！！大切な人と別れるのはいやだあ！」

妹紅がそう叫んだ

・・・大切な人？父親のことか？

「もう誰も失いたくない！彩音さんとも離れたくない！」

「な、何を言っているんだ？妹紅？俺は依頼も達成できずに、何もできずに妹紅の父親が死んでゆくを見ていることしかできなかった」
「それでも！それでも、彩音さんは父を守るうとしてくれた、もうそれだけで十分です」ツツ妹紅・・・」

「私も、私も連れて行ってください！彩音さんの旅に、連れて行ってください」

「でも・・・」

「無茶を言っているのは分かっています！でも、彩音さんと一緒に居られるならどんな、どんなところでもついていきます」

「妹紅・・・、わかったついてこい」

「どこに行くんですか？」

妹紅が尋ねる

「かぐや姫の屋敷だ」

「ッ！な、何ですか？」

「妹紅の父親の埋葬、そして、おそらく有るであろう物を取りに行く」

「な、なんですか？有るであろうものって」

「『蓬莱の薬』だ」

「なんですか？それは」

「不老不死になれる薬だ」

「そんなものどうするんですか？」

「飲むんだよ」

「そんな」

「・・・時間が惜しい、行こう」

「やっぱりあった」

かぐや姫の屋敷そこにはやはり『蓬莱の薬』があった

「これがあれば、月人に」

バシッ

「やっぱりか・・・」

妹紅が蓬莱の薬を飲んでいた

「ウガアアアアアアアアアアアアアアアアッ」

髪の色が黒から白へ、目の色も赤に

「これでいいんだよ・・・」

「あああああっ」

「大丈夫か？」

「あああああっ、はあはあ」

「大丈夫そうだな・・・あとは俺も不老不死に・・・」

「彩音さんも、はあ、飲むんですか？」

「いや、俺は自分の能力で『死』を塗りつぶす」

「! ! ! ! ! ! ! !」

「いくぜ」

その日、かぐや姫がいた屋敷には一人分の悲鳴が上がった

第10話 妹紅と彩音は何を思っ (後書き)

彩音&妹紅不老不死化です

むりくりですがこれで行きます

これで虹炎の

虹Ⅱ彩音

炎Ⅱ妹紅

が完成です！

むちゃくちゃなのは気にしないでください！

第11話 妹紅家にて

・・・あ？何があった？俺？

『死』を塗りつぶしただけだったよな？

・・・ああそうか、守れなかったのか、嫌なこと思い出したな
起きてんの目開けないのって、なんかもどかしいな

「ふああゝあつ」

おめでとうございます、元気な欠伸ですよ^^

「あつ、おはようございます」

「あ、おはよう・・・ここ何処？」

眠い目をこすりながら尋ねる

「何処つて、決まってるじゃないですか」

「決まってる？」

「はい、ここは・・・夢の中ですよ？」

「?!」

ガバッ

俺は勢いよく布団から起き上がった

「夢、か」

変な夢見たな・・・

「あつ、おはようございます」

・・・デジャヴユ？

「んゝここ何処？」

「ここは私の家ですが？」

よかった違った

「俺は不老不死になってからどうなったの？」

「気絶しました、それはもう、死んだかのように、失敗して死んだのかと思いましたよ」

「ってことは妹紅がここまで運んでくれたのか？」

「まあ一応・・・」

「重くなかったか？」

「苛立つほど軽かったです」

「え？」

俺は結構重いはずだが

「え？軽くなってる」

「『死』を塗りつぶすとか言って本当は体重塗りつぶしたんじゃないんですか？」

「かもしれない」

「え？」

間抜けな返事を妹紅が返す

だがそうかもしれないのだからしょうがない

「『死』を塗りつぶすついでに色々ち塗りつぶしてしまったかもしれない」

「・・・私にもやってくださいよ・・・」

小声で妹紅がないか呟いている

いいじゃないか、もう成長しないんだから

「ん、そうだ妹紅、炎はもう使えるのか？」

「炎ですか？」

「YES！YES！YES！！」

前に見たようなCMをぱくって言ってみる

「そんなもの使えませんか？」

「そんなものって」

・・・まあ使えないならやることは一つ

「修行しますか！」

第11話 妹紅家にて（後書き）

修行です

前に獣さんを狩っただけなので次こそは・・・

第12話 修行、旅立ち

「修行ですか？」

妹紅が首をかしげる

「ああ」

「どんな修行ですか？」

「それは未定だけど、たぶん全力の俺と戦ったりしたりするだけ」

「え？ええっ！そ、そんな、そんなの無理ですよ勝てるわけないです」

「やらなきゃ分からないだろ？」

今のセリフは俺が親にさんざん言われたセリフだ

父親に「次の喧嘩は勝てるかどうか分からない、助ける」と言ったときにはじめてつかわれた

その後気に入ったのか、わけもなく使うようになったうぜえ

「やらなきゃ、わからない」

「まあやるかやらないかは、妹紅の自由だけだな

「や、やります！やらせてください！」

「おkじゃあ表出ようか？」

「え？」

軽く喧嘩を売ってみた

「まだまだだな」

「そん、な、結構がんばったのに」

俺の言葉に妹紅の顔が若干暗くなった

「まあ、初心者ならこれくらいだろ」

一応喧嘩で鍛えているので初心者に負けることはない

「どうすれば強くなりますか？」

「とりあえず俺の晩飯なつてた獣さんがいるところに行こうか」

そうして俺らは妹紅家を後にした

第12話 修行、旅立ち（後書き）

最初の場所に戻ります

そろそろSPをやってもいいんじゃないかと勝手に思っていますw

第13話 再開！

いやゝ懐かしい実に懐かしい、そんなに長い間離れてたわけでもないのに・・・

「ここが修行場ですか？」

「当たり前だろ？」

「あ、当たり前なんですか」

「え？違うのか？」

「もう！話がかみ合っていないですよぉ」

「いいじゃないか別に」

「どこがですか！」

雑談？を10分くらいしていると

獣さんがログインしたお！

「おおっ！久しぶりい」

「ひいつ」

妹紅が怯えてる、これはかつこいい所を見せるチャンスか？

「おれに任せろ！」

コレ言ってみたかったんだよ・・・ww

俺は獣と面と正面から向き合った

「あれえ？でかくなつてね？」

「当たり前だよ」

「誰だ？」

後ろを振り返ると倒れている妹紅と、角の生えた女の子？が目に入
った

いつの間に倒したんだよ、俺の活躍が見せられないじゃねーか

「角・・・鬼？ですか？」

「ああ、この角を見ればわかるだろう？」

「ええ、そりゃあ、いやというほどにねww」

「笑ってられるのも今のうちだよッ」

やたら早い拳を俺の鳩尾に向かって放ってくる

ああっ！ちくしょお！先手必勝ってやつですねわかりますよおッ

「回避するのかい？でもそっちには」

「そっちにはなんだよ？」

「お前の云う『獣さん』がいるよ」

「なっ」

ゴンッ！

鈍い音が鳴り俺の後頭部に獣の手が・・・激突した

「ガアアアアッ！痛ってえいてええええええ」

「こんなもんで終わるのかい？粹がつてたくせに弱いんだね」

「アアアアッアアアアアッ」

「うるさいねえゝもういい、死んで呉れよ」

鬼が俺に拳を・・・あ、そういえば俺不老不死・・・なってるのか、な？

あゝなんかこういう時に限って思考回路がクリアになる・・・

「なんだい？これは」

は？イキナリ何言ってるんだこの鬼は？

頭おかしくなってるのか？

目、開けれねえや、ああくそ馬鹿面してる鬼見てえなゝ

「うわあこっちに来るんじゃないよ！」

ああ、獣に襲われてんのか？それならただ一つ云わしてもらうか

「ザマア・・・みやがれ」

「くっ、おまえまだ話せたのか・・・くそ、来るな！化け物め」

「化け物はデメエだろうが・・・」

バキィ！！

・・・何かが何かに当たる音がした・・・

音がした直後、俺の体は先ほど変わらず自由に動くようになっていた

獣にやられた傷も見当たらない

それに、鬼も獣もいなくなっている

「どういうことだ？」

誰もが疑問に思うだろうであろうことを口にしてみる

「妹紅は？何処だ？」

変わらない、まだ倒れている、どういうことだ？

疑問が消えないまま妹紅を起こそうと思い、足を出したするとスキマが現れた

「スキマ・・・八雲さんですか・・・」

「そう、正解、大正解よ」

「大、つけてもらってもうれしくないんですが」

「あら？なら超とかのほうがよかったかしら？」

「どっちでもいいですよ、で？どうしたんですか？」

「ああ、1つ報告、大事なことよ」

「大事なこと？」

なんかしたっけか？俺？

「あなたの体、あなたが幻想郷に来る前の体のことよ」

「幻想郷に来る前って、この体じゃないんですか？」

「ええ、違うわ、あなたの体はまだ外にある」

「どういうことですか？」

「今のあなたは、外の世界のあなたの精神がここに迷い込んで形を
なしたもの」

「ハイ？な、え？どういうこと？」

「そういうこと」

意味深すぎるww意味ww

「ええ？ちよ、一寸待って下さい！頭の中を整理する時間を」あげ
ないわ「ええっ？」

「さつさと要件を終わらせて寝たいのよ」

時間くらい・・・うー、うー

「この無責任！」

「（スキマに）落とすわよ？」

「ごめんなさい」

「で、用件まだあるんですか？」

「あるわ大事なこと」

「さつきも大事な事と・・・」

「落とすわよ？」

「ごめんなさい」

「さて、それでは、一言、『あなたが死ねばあなたも死ぬ』以上」

「え？どういう意味ですか？」

「ただの風邪でもなにもしなければ悪化する、悪化すればどうなる
か・・・わかるわね？」

「どうすれば・・・いいんですか？」

「ここで生きていなさい、朽ち果てるまで・・・」

「ちよ、まっ！」

紫はスキマの中に消えていった。

第13話 再開！（後書き）

遅くなりました、見てる人ほとんどいないでしょうが13話です
ゆかりんとの再開です次の話も再開です、修行が・・・w

第14話 再開(2)!!

「う、んっ」

「お早う！いい朝だね妹紅！！」

「え？ああ、おはようございます」

「どんな夢見た？」

「えっと、たしか、鬼に襲われて気絶して、あれ？これ夢？」

「いや、それたぶん現実」

「ええっ！どういうことですか？」

「あつ、焦ってる可愛い・・・萌え・・・」

「いやなんか鬼に襲われて、俺も目開けられなくなって、なんか物音したら目開けられるようになって、八雲紫が現れて、妹紅が起きて、ってカンジ？」

「長い！長いです！！そして何で最後疑問形なんですか？私に聞いても分かりませんよ？こっちが状況説明をしてもらってるんですから」

「まあそうなりますねえ」

「ふざけてますか？」

「いや、まあ多少、ていうか妹紅、口調荒い」

「知りませんよ！！」

「ん？なんか原作にちがづいてきたなあ」

「よし修行すつか！」

「ふえ？」

「あ、寝てた？」

「いや、寝てないでふ」

「いや、うそつくなよ、目こすってんだろもろに」

「そこは見なかったことに」

「この目に焼きついたZE」

「殴っていいですか？」

「なぜに？まあ、殴ったら紐なしバンジーさせるけど？」

「なにそれこわい」

「いやwキャラww崩壊乙」

俺も妹紅もなんかネット用語が・・・

「で、どんな修行ですか？」

「妹紅、それ毎回言ってる」

「ええ、このセリフ言ってるときって大体ちゃんとした修行にならないんですね」

「え？パターン理解しちゃった？」

「ハイ、いやでも覚えます」

覚えんなよと頭でツッコミしときつつ修行内容を発表する

「俺と殺しあいます」

「それ前もやりました」

「・・・怒ったけど？今でもう怒ったけど？フラワーマスターのところにも行ってやろうか？」

「それは遠慮しますよ」

「じゃあ文句言わずに」

「行くぜ？後悔すんなよ？」

「彩音さんこそ」

「後悔しました、調子に乗ってすみませんでした」

「ワカレヴァいいのさ」

「ヴァってww」

「あ？」

「すみません」

「まあ修行とか言ってもさ、スペルカードがない状態だからって肉弾戦ばっかやってても意味ないよね」

「そうですね」スペルカードってなくても普通に私たち不老不死だから、普通に技使ってもいいんじゃない」

「その技を持っていないと」

「あっ・・・」

顔を赤らめる妹紅、え？何？可愛いかって？当たり前だろ？

「どうする？技作る？」

「例えばどんなのですか？」

「おれの場合はあたり一面を真っ赤に染めるとか」

あれ？自分で言ってるんだが、なんか前は黒だったキオクが・・・まあ気にしちゃ負けですなww

「なんか、気持ち悪い」

「なんて言いやがったこの野郎？」

さっきの可愛いのところ前言撤回こいつ憎たらしい

「なんか、府の感情が渦巻いてますが？」

「誰のせいだと思ってる？」

「さあ、誰でしょうね」

「目を合わせろ！！！！！！」

「頑固拒否で」

「お前に拒否権は無い」

「私の意志を尊重してください！」

「そんなねえ、俺のことを『師匠』と呼ばない奴にねえ」

「死傷！」

「字が違う！」

「アラアラずいぶんと楽しそうな雑談をしているのね」
後ろから声がする

「誰だ！！！！」

ハモった初めてハモったよ、やったよ・・・泣きそうだ・・・

「初めまして、じゃないわね、お久しぶりね、え」と、あなた名乗ってたかしら・・・？」

聞き覚えのある声、それに反応し、振り返ると

かぐや姫こと、蓬萊山輝夜がいた。

第14話 再開(2)!! (後書き)

でないかもとか言っておきつつの輝夜再登場！
妹紅書くには輝夜が必要だと思う。

第15話 不老不死3人（前書き）

みやああああ！

エラーガエラーガ！書いたものが消えたあ！

・ 初めの体験です、サブタイトル書き忘れたのがいけないのだけでも・

第15話 不老不死3人

「つつお前は」

「輝夜よ、蓬萊山輝夜」

「知ってるわよ」

あれ？若干無視されているのだが？

「？なぜ知っているのかしら？」

「私の父がお前に結婚を申し込んだんだ！それをお前は無理難題を与え父に恥をかかせた、その挙句月の使者からお前を守るために戦って死んだ」

・・・あの時のことか・・・今思い出すだけでも、蜂の巣にされた妹紅の父親が・・・考えるのはやめよう、また狂るってしまいそうだし
「そう、あの時の・・・それは申し訳ないことをしたわ、そのお詫びと言っては何だけれど、私を殺してもいいわ」

！！今の言葉で俺の中の感情を抑えていたものが壊れた

「オイ！一寸待てよ、お前今、なんて言った？殺してもいい？ふざけているのか？妹紅の父親はお前を守るために戦ったんだぞ？それを、その行為を無駄にする気か？お前が死んだら妹紅の父親は何のために戦ったんだよ？守った人が死ぬって、そんなのって、妹紅の父親が馬鹿見てえじゃねか！！！！今の発言を撤回しろ！！殺してもいい何て二度と言うな！お前を守った人たちに感謝をこめて、今を、死んでいった人たちが感じることでできなかった今を！生き続けろよ！」

「彩音さん」

「そうね、今の言葉は撤回する、今はもういらないけれど礼を言うことができないから、代わりにあなたに言うわ 私を守ろうとしてくれてありがとう・・・」

その時微かに、微かにだが妹紅が落ち着いた気がした・・・。

第15話 不老不死3人（後書き）

短いです

本当はもっと長かったんですが消えたんでショートヴァージョンにしました

これで勘弁して下さい・・・

第16話 2対1

「さて、とそれでは、名乗っていただけるかしら？」

「あ、名乗ってなかったっけ？ 彩る音と書いて彩音と読むよろしく蓬萊山かg「輝夜でいいわ」輝夜」

「藤原妹紅」

妹紅はまだ不機嫌だ、どうにかできんかなあ

「で、さっきは何を楽しそうに雑談してたのかしら？」

輝夜が目を輝かせながら聞いてくる、別に輝夜だから輝かせるとかそんなダジャレは一切、入っていない、断じて入っていない、俺は親父ギャグは言わない！

「ああ、修行についてだよ」

「修行？」

「そう」

「手伝ってあげましょうか？」

「よろしく頼む」

「即答ね」

「時間かけるよりはいいだろう？」

「じゃあ、弾幕ごっこでもしますか」

「「え？」」

あ、またハモった

「え？つてなによ？」

「肉弾戦じゃないの？」

「肉弾戦？！なんで私が！」

「いや手伝ってくれるって」

「言ってないわ」

「言っただじゃん、ごまかせないぜ？」

「・・・ハア、わかったわよ」

よしそれじゃあ、行けと妹紅にアイコンタクトで伝える

「ルールはどうするのわあい！」

「・・・え？お姫様声ww」

声が完璧に裏返ったすげえ、人が出せる領域じゃなねえww

「ちょ、不意打ちはなしでしょ？」

「生憎俺は、不意打ちで飯にありついていたもんでねえ」

「不意打ちなしとか言ってる暇があったら反撃しろよ」

妹紅さん？口調が完璧に男に・・・女口調終了か・・・orz

「わかったわよ反撃するわよ」

「回し蹴りかあ、ぱんっ「死ね」ぐはあっ！」

妹紅に蹴られた、男つてのはエロイ生物なんだよ！！！！

「最悪ね、あなたには失望したわ」

「彩音さん、私もうあなたとはやっていけない」

アレレ？俺が標的に変更されたっぽいぞ？

「「死ね、糞野郎！！」」

二人同時に技を、かかと落としを俺の顔面に、ひざ蹴りを俺の鳩尾に

「グホオッ！」

「まだまだこんなもんじゃ終わらないわよ」

「何くたっているんですか？彩音さん？起きてください」

二人とも満面の笑みで俺に話しかける

「フラグか・・・俺今まで生きてきて本当に楽しかったな・・・」

その日俺は3回ほど殺された・・・気がする
もしかしたらもっと殺されているかもしれない、恐ろしい・・・。

第16話 2対1 (後書き)

フルボッコにされました彩音さん

まあん・・・見ようとしたら逆鱗に触れますよねww
それでは、失礼いたします

第17話　さらば友？よ

夢を見た、俺がベットに横になりねていた、寝返りも打たずにただただ、寝ていた

空には虹がかかっていた、そして部屋の中に、ダレカガイタ・・・？

「さっさと起きてください！もう1戦行きますよ！」

「いやいや、死ぬ、死ぬから、不老不死だけど死ぬから」

「いいじゃない不老不死なら」

「おれが命を無駄にするなって言ったの聞いてたか？」

「覚えてない」

「ふざけんな！オイ！！」

結構頑張ったのに、いいこと言ったのに・・・
泣きそうになる・・・

「さあ殺りましょうか？」

「話を聞けよ・・・」

「つと、もうこんな時間なの？帰らなくちゃ」

「何処にだよ？」

「永琳のところ」

「だから何処だよ」

「教えないわよ、不法侵入されちゃたまないしね」

「お前、俺を何だと思ってる」

「変態」

ここでまさかの妹紅参戦！！俺のハートに100位のダメージ！

「痛いッ！」

「うわっ気持ち悪」

「死んでくださいよ」

「さらに痛いッ！」

「じゃあ帰るわ、楽しかったわ、色々と」

「こちらこそ楽しかったぜ、なっ妹紅？」

「・・・」

あ、不機嫌だ、なぜに？女心はよくわからん

「またいつか会いましょうか、その時まで生きているのよ？」

「俺も妹紅も不老不死だよ」

「・・・」

ちよ、妹紅いつまで無言だよ

「そうね、それじゃあ」

「ああ」

輝夜はどこかに行ってしまった。

「なあ妹紅、俺のこと恨んでるか？」

「なんでですか？」

「輝夜と普通に接して、妹紅の父親は輝夜のせいで死んだのに・・・」

「何をいまさら、そんなこともう気にしていませんよ」

妹紅は明るくふるまったが、その瞳には涙がたまっていた

「本当にごめんな」

「あ、謝らないでくださいよ、どう対処したらいいか、わからないじゃないですか・・・」

妹紅の瞳から涙が零れた

「なあ、もう寝ないか？俺色々とリンチされたせいで疲れたぜ」
明るくふるまってみる

「そう、ですね」

妹紅の小さな、かすれた声が返ってくる

「じゃあ俺落ち葉でも拾い集めて、布団作るよ、ここで待っていてくれ」

俺はその場から逃げだした、最悪だな

ただ、その罰を受けることになるとは思いつきもなかった・・・

第17話 さらば友？よ（後書き）

罰は受けるのです！逃げだしたから当然です！僕自身もそういって
とがたくさんあったのですww

第18話 恐怖

「はあゝ何やってんだか、落ち葉なんてどうやって集めるんだよ・
・」

ため息なんてつくときれが逃げろぞ？

なんて聞こえた気がした・・・いや聞こえた

「幻聴か？」

「何がだい？」

角・・・また鬼か

「鬼さんですか？」

「初めましてだな、こちら辺に住んでいるのか？見ない顔だが？」

「住んでたんですけど、家出して・・・また戻ってきました！」

「家出して戻ってくるって、家出したなら、戻ってくるなよッ！」

この鬼ひどい！悪魔みたいなこと言うよ

「まあ戻ってきたものはしょうがないでしょ？」

「いや、そんなことない、来いよ！その腐った根性を叩きなおしてやる！」

「遠慮します！」

「やっぱり腐っているな！！来いよ！」

「いやですよ、何で戦わなきゃいけないんですか！！もう良い子は寝る時間ですよッ！！！」

「家出したんだ良い子じゃないだろう？！」

「いいんだよ！別に！！戻ってきたんだから」

「もう、早くかかってこいよ！眠いんだよ」

「やっぱり良い子なんじゃねえか！！！！悪い子は鬼に食われるぞ？」

「私が鬼なんだよ！！！」

「知ってるよ！」

「知ってて変なこと言うなよ」

「共食いとかするだろうが！」

「そんなことするもん、ほとんどいないわ!」

「多少はいるんじゃないか!」

「黙れ黙れ黙れえ!」

「テメエが黙れ! 糞野郎」

「そうそう、君たちが黙ればいいんだ」

「違えよ! 俺はこの糞鬼に行つてんだよ」

「誰が糞鬼だ? オイツ!」

「うるさいなあ、君たちのせいで起こされたんだぞ? 責任は取つて
もらうからな?」

「は? 責任?」

今思つたが、この声誰だ? 俺はこの糞鬼と口喧嘩してたはずなのに・

・

「誰だお前!」

「君から名乗れよ、無礼者が」

「誰が無礼者だつて? 貧弱そうな言葉遣いしやがつて」

「君に言つていない、関係ないから黙つててくれないか?」

「関係ないのはおまえだろ? 勝手に私たちの口喧嘩に入つてきて」

「君たちのせいで起こされたんだ、それくらいしても問題ないだろ
う?」

「問題あるから言つてんだよツ!」

「オイ不意打ちはツ!」

糞鬼が弾幕をはなちやがつた最悪だよ、不意打ちばっかやってた俺
が言えることじゃないが・・・

「なんだい? これは? 泡かい?」

「「なっ!」」

受け止めやがつたよこいつ

「お前マジで何もんだよ」

「だから君から名乗れよ」

「おれは彩音、彩る音と書いて彩音だ」

「そうか、僕は 闇夜^{あんや}だ」

「よ、よろしくな」

「ああ、さてこの名前を名乗らなかった鬼にはご退場願おうか・・・」

「そついいながら闇夜は右手の人差指に弾幕を作っていく」

「な、待った！待ってくれ、いや待って下さい！！名乗りますから！名乗りますからッ！！」

「遅い、遅すぎる、まあ名乗るというならいいだろう、その代り、左手をいただこう」

「なっ！」

闇夜は弾幕を放った、そして、糞鬼の左腕に掠った、掠ただけで左腕が、吹き飛んだ

「うあっ」

糞鬼は瞳に涙を溜めながら痛みに耐えていた、叫んだら何をされるかわからないからだろう

「さあ、名乗れ」

「うっ、うっつ、私は綾見あやみだあつ」

「泣きながら名乗るとは、右手もいただこうかな？」

「ご、ごめんなさい！そ、それだけはやめてください」

「ふっ、まあいいよ、で君たちはどうしてあんなところでばかり声で喧嘩なんてしていたのかな？」

「それは、この鬼がいきなり『その腐った根性を叩きなおしてやる！』とか言ってきた」

「なっ、私が全部、悪い、ひっく、見たいなと言っなよ」

「いや、そんなことはどうでもいい」

「どうでもいいのかよ・・・」

「なぜすぐにやめなかった？」

「・・・この言葉明らかに殺意がこもってる、いつでも君たちなんて殺せるんだよ？みたいな脅しだよ」

「誰もいないと思ったんだよ、こんなところには」

「こんなところだと？なめているのかい？」

「は？」

右手にまた弾幕が・・・

「ごめんなさい」

「・・・謝れよ」

「え？」

「こんなことろって言っただろう？謝れよ」

「ごめんなさい」

「・・・無償に機嫌が悪くなった、さっさとここから立ち去ってくれ」

「・・・すみませんでした」

俺たちは立ち去った。

第18話 恐怖（後書き）

柔らかな感じにしたかったのに・・・怖くなったよ！
闇夜はまたでてくると思います
綾見はわかりません、出るとしても、そんなにね・・・。

第19話 鬼と俺と

足取り重く進んでいく

ただひたすらと前に

向かう場所に光は差すのか？

んなもんするか、どうにでもなれ

さあ、今日はどんな安眠が待っているのかな？

「・・・布団がねえッ」

何やってんだ？俺は？落ち葉集めてくるって言っただろうが

なにをもちかえってきた？気まずい空気だけだよッ

どうすんだよ

「あの、彩音さん？何かあつたんですか？」

「・・・へんややつに会って、ごめん今のいいわけだわ、普通に落ち葉拾ってくんの忘れた」

「え？ど、どうするんですか？落ち葉なかったら背中が大変な・・・

ガチガチになりますよ?!」

「いや、だからごめん」

「もう、なにやってるんですかほんと、回し蹴り喰らわせますよ?」

「いや、だから、本当にごめん」

「もう私が集めてきますから何処かに行っててください」

「そこまで言うんだね妹紅、俺のハートはもうボロボロだよ・・・」

「・・・」

「変なスイッチ入ってるか？」

「おうさっきの鬼か、どうしてここに？」

「いや酒が飲みたくなってね、一人で飲んでも味気ないだろ？」

「そうだな」

「どうだい？一杯だけでも」

「いただくよ」

「綾音、であつてるか？」

「いや、綾見だ、さりげなく間違えるな」

「一字違い・・・」

「それでも違う」

「ああ、いいじゃん別に一字くらい」

「なら、おまえは色彩でいいのか？」

「原形とどめてねえよ」

「『彩る』って字が入ってるだろう？」

「ハイハイ、そうですね」

「ながすなよ」

「・・・楽しいな、こんな時間がいつまでも続けばいいのに・・・」

「なあ」

「なんだい？」

「お前は死ぬのは怖いか？」

「ああ、でも勝てない相手にも突っ込んで行くよ、鬼としてのプライドがあるからね」

「プライド・・・誇りか」

「そうだね」

「俺はさ、不老不死なんだ」

「不老不死ね、老いることもなく死ぬこともない存在だね」

「そうだ、ただ、俺はさ知人に、『あなたが死ねばあなたも死ぬ』って言われたんだよ」

「どういう意味だい？」

「さあ、ねだた俺はさ、この言葉を聞いてから、死ぬのが怖くなった、不老不死でも、俺が死んだら俺が死ぬ、これじゃあ余命みたなもんだろ？あと3回死ねば本当に死ぬ、みたいな」

「怖いか、不老不死でもそんなこと思うんだね」

「まあな、俺はもともと、死ぬことに恐怖は感じていたし」

「うん、まあどうでもいいよ、ただ酔うの早すぎないかい？まだ一杯しか飲んでないだろう？」

「鬼と違って酔いやすいんだよお」

「いやふつうの人間でも2　3杯はもつよ？」

「うるせい」

「うわっ、抱きついてくるな、気持ち悪い」

「彩音さん、このくらいで足りますかね？」

「うえ、妹紅、モコモコ」

「うわっ何ですか？離れてください、変態！！」

「オイ、居るんだろぉ？闇夜ぁでてこいよ」

「まだ会うのは2回目だよ？ずいぶんと馴れ馴れしいな君は」

「うおっけっこう集めって来たね！それじゃあ宴会でも使用かぁッ」

「うえい」

「え？宴会？！」

「しょうがないね、きつと断っても飲まされるんだろうし」

・・・宴会は朝まで続いた、らしい・・・

第19話 鬼と俺と (後書き)

鬼と言えば宴会ですね、宴会の様子は彩音がもう少し酒に強くな
ってから・・・
さてオリキャラ3人になりましたので近いうち紹介したいと思いま
す。

第20話 闇夜VS彩音

また夢を見た、

また同じ場所で俺がベットに横になってた

何かが変わっているのか？

あたりを見回した

すると後ろに

（誰だ？）

声が出なかった

そして、俺の後ろにいるやつはしゃべった

「如何シテ君八二人モ居ルノ？」

恐ろしい、殺される？恐怖、何をされる？俺はどうなるんだ？

「いつまで寝ているんだい？君は」

「ん、お早う」

「もう昼過ぎだが・・・」

「眠れる時は時間を忘れて寝るのが1番いいんだよ」

「呑気すぎるよ、君は」

「なあ、闇夜、妹紅と綾見は？」

「向こうで戦っているよ、身に行くかい？」

「ぜひ行かせてもらいたい」

「わかったよ、なら、ついておいで」

「此処だよ」

・・・正直に言おうグロイ

妹紅が肉片にならないで原形をとどめているのがグロイ

「鬼つてのは右手なしでここまでの実力なのか？」

「ん、そうだね、ただ彼女は鬼の実力的には下のほうにいるはずだよ」

「それで、妹紅をあそこまでできるのか」

「さて、僕も戦ってこようかな」

「一寸待った」

「なんだい？」

「俺と勝負しようぜ」

「ふっ、いいだろう、後悔なんてするなよ？」

「彩音さん頑張ってくださいね！」

妹紅復活早ッ！

「負けんなよー闇夜」

「闇夜が負けるわけねえだろうが、俺の応援をしろよッ！」

「おーがんばれー」

「棒読みかよ！」

「時間がもつたいない、早く殺ろうじゃないか」

「さて、ルールを確認させてくれないか？」

「いや、ルールなんて決めてないだろう」

「なら、技の使用は3回まで、あとは肉弾戦で、ギブアップしたほうが負け、これでいいね？」

「ああ」

「なら始めようか」

「さて先行は譲るよ」

「じゃあ、ありがたくもらおうかつ」

鳩尾めがけて蹴りを

「甘いね」

ガンッ

反撃された

「てめ、いきなり顔面はないだろ！」

「先制攻撃で鳩尾よりはいいだろう？」

「うるせえ、っーか反撃すんなよ」

「先行を譲ると言っただけで、反撃しないとは言ってないよ？」

「ムグググウ」

言い返せないのが悔しい

「さて次は僕から行かせてもらっよ」

「おうよ」

さて、何が来るのかな？

目で終える早さならいいんだけどな・・・

「消えた、か」

こういう場合はだいたい後ろなんだよな

「そこだ！」

「残念、気配を感じ取りなよ、そんなのじゃ、かすり傷一つ与えることはできないよ？」

「なっ」

真っ正面にいた、俺が後ろを振り返ることを予想してたのか？

「くっ、こうなったら」

「轟音の鎧！！」

・・・月の使者と俺が戦ったとき、俺が使ったらしい技、輝夜が言っただけだから曖昧だが、おそらくこんなもんだろう、というイメージで作り上げる

バキィッ！

「つく、やるね、そのタイプだと君の力が尽きるまで使いことができる」

「え？あ、ああ、そうだぜ」

「まあ君の力が尽きればその時点で、もう技は使えなくなるけどね・

・

そうなんだよ、それが欠点、どれだけの力をどう注げばいいのか分からないんだよな

「まあ、殴っていれば消えるだろうね」

「なっ」

俺に向かってひたすら蹴りを入れてくる、何気なくこの鎧すげえ！

「俺さあ今思い出したことがあった、おまえの能力って何？」

「今行ったら僕が不利になるじゃないか、そうだね、この勝負で僕に勝てたら教えてあげよう」

「よし絶対勝つ！」

ピシィ

・・・縁起でもない、何だよ今の音

「さて、君の鎧も壊れたし、そろそろlast spurtだよ」

「は？何言ってるんだ？っーかなぜに英語？」

鎧が壊れたって、俺の力が尽きるまで使用できるんだろ？

「ふむ、なぜって顔をしているね、それは純粋に耐久力がないんだよ、この程度で壊れるのなら実戦向きではないね、すごい技なのに・

・

「は？まじかよ・・・」

「じゃあ、降参させてあげるよ、フッフ・・・」

「ちょ、待ってタイム、タイムッ！！」

「問答無用」

「絶対零度！！」

「そんな技持っていないだろう？」

「なら、轟音の剣」

「・・・脆い」

「は？」

壊れた、出した瞬間に壊れた

「作ったばかりのものは、脆いんだよ」

「はははっ、ギブ、ギブアップだ」

「よし、まあ、強かったとは思っよ、相手が悪かったね」

「自分にどれだけの自信持つてるんだよ」

「まあ、大体の敵には負けないね」

「頼もしい限りだな」

「君を守ったりすることはないけどね・・・」

「ハイハイ、左様ですか」

「殺してあげようか？」

「それは無理」

「お疲れ」

「お疲れ様です」

二人の声が聞こえた

「おう、どうだった？俺の実力は」

「まだまだだね」

「そんなことないですよ、結構頑張っていました」

「でも、闇夜は技を一回も使っていないんだよ？」

「そういえばそうだった」

「うっ、そ、それは・・・」

「まあ、俺がただに弱かったただけだろう？」

「そうだね」

「ここのタイミングで入ってくるのかお前は！！」

「本当のことさ、別の力の使い方を考えなよ」

「まあ技のバリエーションは多いほうがいいね」

「私もそう思います」

やめて、そんな一斉攻撃されたら俺はもう、立ち直れないよッ！

「まあ、そこいらも妖怪には負けなだろう、立ち直ってサッサと僕の肩を揉んでくれよ」

「そんな約束したっけか？」

「勝者の言うことが聞けないのかい？」

「・・・返す言葉がないのが腹立つ」

「さあ、僕がもういいと言うまで宜しく頼んだよ」

「永遠に終わりが来ないような気が・・・」

「じゃあ、そうしてあげようか？」

「ご遠慮いたします」

「フフフッ」

結局あのあと俺は1時間程肩揉みをさせられた、手が、言うことを聞かないッ！・・・

第20話 闇夜VS彩音（後書き）

とうとう20話まで来ました！

文章が短いので、あわせたらめっちゃくちゃ、話数減りますけど・・・

第21話　しばらくの別れ

「なあ」

「なんだい？」

「おれがお前と出会ってから、どのくらいの月日が立ったんだろうな？」

「ん、どのくらいだろうね？たしか10日ほどだった気がするけど」

「そうか、そんなに時間は過ぎているのか・・・」

「どうしたんだい？急に」

「いや、別に・・・」

「変な人だね・・・」

「なあ、俺はお前と出会った時より強くなっているのかな？」

「ああ、強くなっているさ、確信を持って言えるよ」

「そうか、おまえが確信を持って言うなら間違いないな」

「まったく、本当にどうしたんだい？熱でもあるのかい？」

「どうだか」

「なんなんだい、本当に、一回殺したら治るかな？」

「やめてくれ」

「冗談だよ」

「・・・なあ俺そろそろここを出ようかな・・・」

「どうしてだい？」

闇夜は冷静な声で言った

「俺はここに妹紅と修業に来たんだなのに、こんなだらけていたら何のために来たのか分からないだろう？」

「まあ、そうだね」

「・・・気まづくなっただな」

「お茶、いるか？」

綾見が話しかけてくる

「いただく、いやと言ってもいただく」

「いただくよ」

「そ、そうかい、わかったよ」

そう言っでどこかに行った、お茶っでどこで作るんだ？

「声震えていたね」

「ああ」

「話を聞かれたみたいだね」

「・・・やっぱり、ここに長居しすぎたな」

「・・・何処に行くのかは決まっているのかい？」

「空の上、この世の果て、天国」

「ロマンチックだね」

「空の上はロマンチックだが、この世の果てと天国は違うと思うぞ？」

「フフフツ」

「俺さ、死ぬんだよ、たぶん」

「不老不死でも死ぬんは当り前さ、ただ再生するだけ・・・」

「そういう意味じゃなくて」

「どういう意味だい？」

「八雲紫は知っているか？」

「ああ、スキマ妖怪だろう？」

「そう、そいつに言われたんだよ、いい方は違っただけ、たぶんこんな意味だろうなって自分で解釈したんだよ」

「なんて言われたんだい」

「俺が死ねば俺も死ぬ」

「・・・興味深いね」

「そうか？まあ俺は考えたんだ、俺はここじゃないところから来たんだよ」

「・・・意味が分からないね」

「まあ違うことから来たんだよ、で不老不死になった」

「意味はわからないが続きを聞こう」

「俺は二人いるんだよ、基の世界の俺とここの俺、基の世界の俺は風邪をひいたんだ、それで、眠りに就いた、死んだとかじゃないぜ？ただ眠っただけだ、で気がついたら、俺はここにいて、それで、今に至ると」

「・・・？」

「ばかみたいな顔してやがる、おもしれえ」

「で、いくらただの風邪でも、何もせずに、食事もせずにいたら、悪化する、そいうすれば、いずれは死ぬだろうよ」

「そうだね、そのとうりだ」

「そいうことさ」

「・・・、有限の命を持つ不老不死ね、すごいことだ」

「だろ？最高の褒め言葉だ」

笑って見せた、・・・うまく笑えているかな？

「まあ、俺は結構前にここに来たから、最後の時は、近いと思うんだよ、だから、ここの色々なところを見て回りたい」

「そうかい、なら見ておいでよ、僕は、待っていてあげるよ、ずっと」

「・・・ありがと、な」

涙が零れた、こいつの前では絶対に泣きなくなかったのに・・・

「ああ、だから、帰ってくるんだよ？」

闇夜は顔を伏せた、泣いてんのか？こいつも

「彩音さん、話は聞かせてもらいました」

「妹紅」

「私は付いていきます、いやと言ってもついていきます」

「なら、もし俺が最期を迎えても、見送ってくれる人、ということ
で」

「そんなことにはさせませんよ、私はけっして見送らない、死なせ
ませんよ」

「・・・そうか、頑固だな・・・」

「じゃあ、そういう訳だ、お茶用意してもらったのに、悪いな、綾見」

「・・・。」

「お茶用意して待っててくれよ、戻ってくる」

「約束ですよ？」

「ああ」

「なら僕とはこんな約束をしてくれないかな？帰ってきたら肩揉みをしてくれ」

「了解！」

「じゃあな」

「今までありがとうございました、必ず彩音さんと戻ってきますね」

俺たちは旅に出た

第21話　しばらくの別れ　（後書き）

修行編終了

次からは・・・考えてないです！

第22話 死神

「・・・」

「やっぱり、さみしいか？」

「いえ、彩音さんと一緒なら大丈夫です」

「無理すんなよ、今泣いとかなないと泣きたいときに泣けなくなるぞ？」

「いえ、いいです、みつともないところは見られたくないですから
「みつともないことはないだろ？ 一種の感情だよ、誰にでもあるんだ」

「それでもいいですよ」

「そうか、やっぱり頑固だな・・・」

「頑固でも泣きません」

「やっぱり何日間とはいえ友に過ごした人と別れるのはつらいだろう」

「で？ なにしているんですか？」

「あら？ わかつちゃったかしら」

「スキマからでてきたのは、もうおなじみ？ の八雲紫だった」

「なめないでください」

「おいしくなさそうね」

「・・・」

「あ、なんか、地雷踏んじやったかしら？」

「で、なんのようですか？」

「あなたのこと」

「・・・」

「あなた、夢を見たかしら？ 横になっているあなたと、もう一人いる何者かがいる夢を」

「なんで知っているんですか？」

「これは誰にも言っていないはずだが」

「私が見せたのよ、向こうのあなたの状況をね」

「あれが？」

たしか、横になっている俺、そして、ダレカ

「もう一人は誰ですか？」

「・・・自分で考えなさいよ」

「もう考えるのには疲れたんですよ」

「そう、ならいいわ、特別よ？あれは死神よ、あなたが死ぬのをただひたすらと待っている」

「しに、がみつ?!」

死神と言え、あの三途の川の小町みたいなものか？

「そう、死神、あれとは、夢の中で接触したわね？」

「ええ」

「あれで、あなたの寿命が削られた　って言ったら？」

「本当ですか？」

「嘘よ、ただ、接触できたということはあなたはそれだけ、死に近づいているのよ」

「・・・あれとどうなったら、俺は死ぬんですか？」

「・・・一体化したらね。今は触れる、ただそのうち貫通していくわよ、そして1つになった時・・・覚悟はもうできているわよね？」

「ええ、もう、思い残すことは・・・」

妹紅、闇夜、綾見が頭を過る

「有るわね、あなた」

「ああ、やっぱまだ死にたくないですわ」

「そう、やっぱり、人間ね、それじゃあ、御機嫌よう」

消えた、スキマってのはやっぱり便利だな

「・・・行こうか」

「・・・ハイ」

泣きそうな声で妹紅が答えた

第22話 死神（後書き）

これからどうしよう・・・
なんにも浮かんでこない

第23話 彩音&妹紅

「妹紅、俺やつぱり死ぬのが怖いらしい」

「たぶん、私も怖いですよ」

「．．でも運命なんだよな」

「運命なんて、運命なんて二人で壊しちゃいましょう!!」

妹紅は作り笑いを俺に見せてくれた

「妹紅、無理しなくていいぞ？」

「む、無理なんてしてないですよ」

「俺テンション上げるから、明るくいこうぜ」

「．．すみません、なんか私らしくないですね」

「だな」

「否定して下さい!!」

「嫌だ!!」

「酷い!!」

「そうか？」

これでいい、これがいんだ、俺達は

「どこ行くんですか？」

「天国でも逝つてやろうかな？」

「縁起でもない」

「ハハハッ」

「笑えないですよおっ」

「いいんだよ、笑わなくて」

「は、反応に困りますっ」

「かわいいな妹紅は」

「からかわないで下さい、彩音さん!!」

「からかってねえよ」

「あ、ううっ」

「その反応は駄目だろ冗談なのに」

「歯、食いしばりやがれ彩音」

「怖っ!!」

「覚悟はいいよな？」

「すみませんでしたあっ!!」

俺の音が響いた・・・

第24話 ただの人間

「うつうつ、冗談なのに・・・ひどい」

「どっちが冗談なんですか？かわいいんですか？かわいくないんですか？」

「かつ、可愛いに決まってるだろう？」

「・・・信じられません」

「まあ、自業自得だもん・・・」

「何で開き直ってるんですか？もう1回ぼこぼこにしますよ？」

「え？フルモッコにしてやんよ？」

「彩音さん、もう、旅やめましょうか」

「笑顔で変なこと言うなよ！」

「いいじゃないですか」

「旅だけは絶対にやめてたまるか」

そう言っただけは、やってしまった、妹紅を、真っ赤に染め上げてしまった

「……………ろす」

「え？」

「殺してやる」

「洒落になってないですよ？」

「殺してやるよおッ！！！！」

冗談じゃない

「うるせえんだよおッ！」

何か来たよ

「誰だよッ！！！」

第3者が入ってくんなよ！

「誰って、相変わらずねあなた」

「輝夜！永琳もか！」

「お久しぶりです」

「・・・」

妹紅は相変わらずしゃべらないと・・・

「輝夜あ」

あ、しゃべった

「私と殺しあおうぜ」

「「は？」」

やべえ、間抜けな声が出た、

「な、何言ってるのよいきなり」

「復讐だ、私をこんな体にした」

「こんな体って、あなたが勝手に、不老不死になっただんでしょ？私には関係ないわよ」

「じゃあ、なんで屋敷に薬を置いていったのよ」

「それは・・・育ててもらったお礼に」

「直接渡せばいいじゃないッ！」

妹紅が暴走してる・・・止めなきゃいけないのか？

「オイ、妹紅、やつあたりもその辺に」

「うるさいッ！彩音さんにはわからないんだ！永遠に生きなきゃいけない悲しみが、みんなが死んでいく悲しみが、わからないんだ！」

「・・・俺だって不老不死だぞ？」

「彩音さんは、不老不死でも、もうすぐ死ぬんでしょ？そんなの不老不死じゃない！そんなの、ただの人間だ！！ただの人間に何がわかるんだあ」

「・・・」

言い返す言葉がない、俺は人間だ自分の能力で不老不死になろうと、それで死ぬなら、人間だ、妹紅は死なない、輝夜も永琳も死なない、俺だけ死ぬ・・・

「ハハハッ、そう、だよな、俺は、死ぬんだもんな、お前らは、永遠に生き続けるのに・・・」

「あっ・・・」

「そう、だよな・・・ただの人間に不老不死の気持ちなんてわから

ないよな、俺は、俺は」

「・・・」

輝夜たちは何も言わない・・・おれがただの人間ってわかってしゃべる気も失せたか・・・

これでも、頑張ってきたんだ、必死に・・・ああ、なんで俺はただの人間なんだろうな、なんでこんな所に来ちまったんだろうな・・・なんで、「・・・生きて、いるんだろうな」

「ああっ、ああああ、ごめ、ごめんなさい・・・そんなつもりじゃ」

「いや、いいさ、誰がなんて言おうと俺は人間だ、決して変わることはない真実さ、死ぬるんだよ、いいだろう？死にたくなったら死ぬるんだよ・・・俺は、俺はもう・・・」

不老不死じゃないんだよ

この言葉が言えなかった、言ってしまったたらすべてが壊れてしまうような気がして・・・

もう壊れてしまったかもしれない・・・手遅れなのかもしれない・・・それでも、これだけは言いたくなかった

「・・・死んでやるよ、妹紅が望むのなら今ここで死んでやるよ、全部終わらせてやるよこんな人生もう、終わらせてやるよおッ！！！！！！」

バチンッ

とても大きく、乾いた音だった

音が鳴ってから頬に鈍い痛みが来た

叩かれた、おもいつきり、例えるなら、恋愛ドラマのふられること
ろみたいな感じかな

『痛い』この感情が俺を基の世界に戻してくれた

「・・・」

静寂、今声をだせば、どんな小さな声でも全部聞き取れるんじゃないか？つてくらい静か

「あなたが言ったのよ？」

輝夜がしゃべった、俺の予想どおり、小さな声だったけど聞き取れた、
全然うれしくないが

「あなたが私に言ったのよ？生き続けろって、それを何？死んでやるよ？ふざけているの？あなたは私にあんな言葉をかけておいて自分は死んでやるって？なめるんじゃないわよッ」

「姫・・・」

ああ、そういえばそんなこと言ったのに俺は、死んでやるって・・・
恥ずかしいな、惨めだな、俺は
どうしようもない馬鹿だなあ

「すまなかった、一寸頭がおかしくなってた、一寸頭冷やしてくる

わ、しばらく、俺に近づかないでくれ・・・」

「彩音さん・・・」

「・・・」

「・・・」

妹紅は申し訳なさそうな、輝夜は怒った、永琳は無表情で俺を見ていた・・・

第24話 ただの人間（後書き）

前回短かったので今回は一寸長め？です

第25話 代償

「妹紅、追いかけていいのかしら？」

「・・・私が彩音さんを傷つけたんだ追いかけても、拒否される・・・」

「そんなの行ってみなきゃ分からないじゃない」

「でも・・・」

「一寸永琳見てないで助けなさいよ」

「姫、そこは姫がどうにかするべきだと思いますが」

「わかってるわよ、でもどうすればいいのか分からないのよ」

「ハア、わかりました、では助言を」

「流石永琳！頼りになる！！」

「妹紅でよかったかしら？」

「うん」

「あなたが彩音さんを傷つけたのだから、謝りまなさいな、そして連れてきなさい、たっぷり説教してあげますから、3人とも」

「私もっ?!」

「当たり前じゃないですか、姫」

「その年で『』は無いわよ永琳」

「姫覚悟して下さいね」

「ああ、逆鱗に触れてしまったわ、殺される、犯されるう」

「姫だけは死よりも辛いお仕置きにしましょうか・・・フッ」

「ちょ、たすけてえ」

「・・・」

「・・・何やってんだろうな、俺は・・・」

自分が、死ぬってわかってからは、わかってたんだよ、ただの能力を持った人間になったことくらい・・・

それでも、俺は一時的にだけ不老不死だった、妹紅たちを理解しているつもりだった・・・

「くそっ、俺は、俺はあっ・・・」

「一寸、泣くのは勝手だけれど、私がいるのに泣くのはやめてもらえるかしら？」

「ゆ、紫か・・・悪い待ってくれよ・・・」

「・・・まあしょうがないわよ、これがあなたがここに来てしまった代償よ」

「代償ね・・・好きでこんなところ来たわけじゃないのに・・・」

「受け入れなさい、それが貴方の生きる道なのだから・・・」

「いいこと言うんだな、胡散臭いの」

「残念ながら今は喧嘩を買ってあげる時間はないのよ」

「なら、何でここに？」

「慰めつてところかしらね」

「慰めか・・・ありがとう、元気出たよ」

「・・・お礼を言うくらいなら早くここから立ち去りなさい」

「何でだよ」

「私、そんなに気は長くないのよ？」

「・・・どういう意味かはわからんが、じゃあな」

「ええ」

「・・・もう、長くはないのね・・・」

「彩音さん！！！！」

息を切らしながら何か来たよ

タツクル？！タツクルなのか？

「グハアッ」

「はあはあ、彩音さん、すみません」

「な、何がだあ・・・」

「私のせいで、気分を害してしまつて」

「・・・そんなこと気にしてないから大丈夫だよ」

「で、でも」

「いいよ、早く戻ろう」

「はい・・・」

歩きだす・・・1歩踏みしめるごとに、自分が死に向かおうと・・・

第25話 代償（後書き）

1行ごとに間を開けてみました

第26話 キオクとお仕置き

「人ってさ、いつまでも同じ姿を留めておくことはできないんだ、『老い』って言うのがあるんだ」

「知ってるよ、だからぼくたちはおっきくなるんでしょ？」

「そう、ただね『不老不死』って言って、体は大きくならないで、心の器だけが成長する人がいるんだ」

「ふろーふし？」

「そう、不老不死、ただ人間は残念ながら不老不死じゃない」

「どうして？」

「神様が決めたんだよ、僕たちがいつまでもこの世界にいたら、世界のバランスが壊れてしまうんだ」

「へー、かみさまかぁ、なってみたいなぁ」

「ハハハッ、夢があっていいね」

「じゃあ、もしもぼくがかみさまになったら、きみをふろーふしにいてあげるよ」

「ッ・・・ありがとう」

「どうしてないてるの？」

「悲しいからだよ、感情があふれ出して止まらないんだ」

「だいじょうぶ？」

「大丈夫、大丈夫だよ」

「ほんとに？」

「うん、本当に」

「ならいいや」

「・・・君は今までに『死』を経験したことはあるかい？」

「し？ぼくはしんでないからそんなのけいけんしてないよ？」

「そうかい、でも、君の家族とか死んだりしていないのかい？」

「みんなげんきだよ！」

「そう、よかったね」

「うん」

「その幸せをいつまでも覚えているんだよ、君が1人になっても悲しむようなことがないように・・・」

「ん？よくわかんないけど、わかった！！」

「うんそれでいいよ」

友達・・・名前は知らない、聞いてない、でも俺はその人とこんなことを話したんだ

そして、その次の日、俺の母さんが死んだ

意味が分からなかった、母さんがいきなり冷たくなって、名前を呼んでも起きない、俺の横で父さんは泣いている

何だよこれ？

母さんに何が起きているんだ？

俺は父さんに聞いてみた

「母さんは・・・死んだんだ」

死・・・名も知らない友達が俺に教えてくれた・・・

え？意味がわからない

そうだ昨日の場所、友達と会ったところに行つて聞けばわかる、行こう

俺は家を飛び出した・・・そして昨日の場所に行つた

友達は・・・いた

「ねえ、おしえてよ、おかあさんがつめたくなって、うごかないんだ、おとうさんもぼくのよこですっとないているんだ、なにがあったの？」

「死んだんだよ・・・」

友達の顔色は悪かった

「どうして？どうしてしんだよ？」

「神様のせいさ、君がなりたいて言っただ神様のせい」

「どうして？かみさまはいいひとなんでしょ？」

「いい人なわけないだろお！！」

友達に叫んだ、その瞳には涙が浮かんでいた

「神様はなあ、僕のすべてを奪っていったんだ、お父さんも、お母さんも、すべて、すべて！！！！」

「え？」

意味が分からなかった、何を言ってるの？

「それでいいのかい？君はそれでいいのかい？神様に何かを奪われたままでいいのかい？僕はいやだよ・・・僕の大切なものを奪った神様からすべてを奪ってやりたい・・・僕と同じ目にあわせてやりたい・・・でもできないんだよ、僕には、人間には、無力なんだ

「僕と一緒に神様に復讐しよう、神様からすべて、ゼーんぶ奪ってやろう、神様を不幸にしてやろう」

その人はそういった

なにをいつているのか、わからなかった、ただただ、逃げた、怖かったから逃げた

その人は、僕を哀れな眼で見ていた

・・・俺の遠い日の記憶だ・・・

「どうしたんですか？難しい顔して」

妹紅が不思議そうな顔で尋ねる

「いやあ、なんかねえ、妹紅も成長したなって思ってたさ」

不意打ちだったので、適当に返事をする

「そんなことないですよ。私はもう、体なんて成長しませんから」

「いや、心は成長するだろう？すべてを受け入れることのできる、大きな大きな器に」

「そんな難しいこと言うのは彩音さんじゃない・・・正体を現せ・・・このゲス野郎め」

・・・ああ、そうか、俺は小難しいことを言うてはいけないのか

「・・・ごめん妹紅・・・もう俺立ち直れないわ・・・」

「あつ、すみません」

「あら？案外早かったわね、もう戻ってこなくてよかったのよ？」

「何でだよ、心配してくれたんじゃないかねえのか？」

「いや、あなたが戻ってきたら、私が・・・私があ・・・何で戻ってきたのよおッ」

「怒られてもねえ」

「よく戻ってきてくださいました、彩音さん、これで姫にお仕置きができますっ」

「永琳その年で『』はないと思う」

「「デジャヴユ?！」」

「彩音さん追加ですね・・・フッ」

「え?何が?」

「今までありがとうございました、彩音さんこれからもお元気で」

「え?」

「彩音、一緒に耐え切りましょうか」

「え?」

「覚悟!姫、彩音さん!!」

「ええっ?」

「「ぎゃああああああああああああああ」

何をされたかは思い出すだけで、本気で吐き気がするのをご想像にお任せしようか・・・

第26話 キオクとお仕置き (後書き)

長いかな? いや、短い、文字カウントで2151字、うん少ないw

番外編（第27話） ハッピーハロウィン！！ （前書き）

今日はハロウィンなので、ハロウィンパーティ？のお話です

番外編（第27話） ハッピーハロウィン！！

「食いもんよこさなきゃ飢え死にするぞ」

「何を馬鹿げたことをやってるんだい？」

「おお、闇夜さん！今日はハロウィンじゃあないですかあ」

「それがどうしたんだい？」

「とりあえず、何か食べ物を恵んでくれよ、イタズラしちゃうぞ？」

「君、何歳だよ、君にあげるものなんてないよ、そんなものがあるなら人里に行って子供たちに分け与えるよ」

「じゃあ、俺も子供ってことで」

「無理がある、こんな子供はいやだ、気持ち悪い、消え失せろ」

「ひどいな・・・（おもにキャラ崩壊が）」

「で、どうして今日は君だけなんだい？」

「ああ、修行だってよ」

「君もこんなことに熱心にならないで修業をしなよ」

「え、嫌だ疲れるじゃん」

「甘えるなよ」

「まあ、修行つてのは冗談だぜ、別のことしてるぞ」

「何処に居るんだい？」

「殺されたいのか？」

「???」

「まあ、夜になればわかる、用事があるんなら、それまで待つんだな」

「ハイ？僕に分かるように説明してくれないかい？」

「ごめん、俺ネタバレ嫌いなんだよね、お楽しみってやつさ、じゃあ、また夜に会おうぜ」

「説明しろよ・・・」

「よお準備はできたか？」

「おう、彩音が、びっくりさせるなよ、闇夜だと思ったじゃないか」

「ワリィ、それで妹紅は？」

「ああ妹紅は今、着替えてるよ」

「のぞきに行くか」

「そんなことしようとしてごらん？今ここで地獄見るよ」

「俺の方が綾見よりは強いと思うのだが」

「女の本気をなめるんじゃないよ」

「ハイハイわかりましたよ」と

「じゃあ、また夜に」

「ああ」

「あ、彩音さん」

「おお、妹紅」

「どうですか？この服」

今妹紅は魔女の格好をしている、帽子は魔理沙みたいなものを

あとは・・・皆さんの想像力にお任せしよう

「ああ、似合っているよ、たださ、見えてる」

そう言って俺はスカート指さした

「え？」

間抜けな声を出してスカートを確認した

「「・・・」」

「きゃあああああああああああああああああああ
あつつつつ」

「うわっ」

「み、見ないでください、変態！！近寄らないでえ」

「・・・注意してあげたのに・・・」

「関係ないです、見たことに変わりはないです！もう、何処かにっ
てくださあいよぉ」

泣きそうだよ・・・っか泣いてるよ・・・
・・・まあしょうがないかな

「おや？輝夜と永琳じゃないか！なにしてんだよ？」

「何ってあんたに呼ばれてきたんだけど・・・」

「・・・記憶にない」

「永琳、殺っていいわよ」

「了解です、姫」

「それじゃあ、さ・よ・う・な・r」一寸待った思い出した、ボケてみたんだよ、「冗談だよ冗談」・・・嘘おっしやい」

「ほんとだよ、まさか来てくれるとは思わなかったから」

「まあ、来たからには何か楽しいことがあるんでしょうね？」

「当たり前、なかったら呼ばないから」

「・・・楽しみにしているわよ」

「ご期待にお応えしてみるよ」

「Trick or Treat!!」

「いたずらされるか、おもてなしするか、どっちがいい？」

「うわっこいつ、冷静に意味いいやがったよ、つまんねえ」

「一寸いいかしら？」

「なんだよ」

「こんなことのために私たち呼んだの？」

「当たり前じゃないか」

「永琳帰るわよ」

「え？姫飲まないんですか？」

「なに、飲んでんのよ!!」

「いや、お茶の代わりに出したら飲んだよ？普通に？」

「いや、何やってんのよアンタ」

「おーい彩音早く飲もうぜ」

「OK綾見わかったから引っ張るな」

「彩音さん今度はすぐつぶれないでくださいね」

「ガンバルヨオ・・・」

「君は向こうで食べ物に食らいつくほうがお似合いだよ」

「よしてめえ表でろよ」

「後でにしよう、とりあえず飲み比べでもしようか？」

「いや、つーか飲み比べってハロウィンと違うんだが？」

「ハロウィンパーティだろ？パーティと言えば宴会じゃないか！」

「ちげえよ」

「違うないね」

「オイ妹紅こいつを止めろ」

「宴会で会ってますよ！」

「参加するなよ」

「僕も宴会でいいと思うな、どうせ、和菓子なんて用意してないんだろう？」

「グッ、いいじゃねえか別に」

「輝夜と永琳はどう思っんだ！！！」

「私も宴会でいいと思うわよ、意味違っけど」

「私は姫の意見で」

「ちょい待て5対1は卑怯だ」

「ならこっち側に来るかい？」

「・・・わかった俺の負けだ」

「じゃあ今日は飲みまろうか！！！！」

結局、このハロウィンパーティ・・・宴会は約4日ほど続いたとさ
めでたしめでたし

「いや、めでたくねえよ」

「黙れ」

「ひでえっ」

番外編（第27話） ハッピーハロウィン！！ （後書き）

初SPが若干残念・・・
まあしょうがないか・・・？

第28話 彩音と死神

「父さん、俺さ決めたんだ」

「何をだ？」

「俺は1人暮らしする」

「・・・そうか、頑張れよ、辛くなったらいつでも電話していいから、俺は待ってるぞ？」

「ああ、ありがとう」

「で？高校の寮に住むのか？」

「ああ、他に行くとこなんてないからな」

「お前がいなくなったら、寂しくなるな・・・もう、母さんもいないし」

「・・・大丈夫だ一生の別れじゃない、また会えるさ、俺はちゃんと父さんのもとに帰ってくるから・・・父さんを一人にはしないから」

「じゃあ、その時は一緒に酒でも飲もうか」

「気が速い、俺はまだ未成年だ」

「未成年でも飲むやついるぞ？」

「俺はそれには分類されないんだよ」

「そうか、残念だな・・・まあいつでも来いよ、死ぬまで待ってやるよ」

「ありがとな」

「親として当然だ」

「そうか、じゃあな・・・」

・・・俺の父さんとの最後の記憶だ・・・

「はあ、疲れた、普通に死ぬかと思った」

これが俺のされたお仕置きの感想、本当に死んだほうがよかった・・・

「死んでないですけどね」

妹紅が突っ込みを入れる

「死んだ方がましだった、あれは、もう二度と食らいたくない」

「私は、あれをする人がすぐ側にいるのよ？」

輝夜が声のトーンを下げて愚痴をつぶやく

「don't mind」

励ましの言葉を送る

「・・・あなたにあげましょうか？」

輝夜が永琳に目を向けながら言う、永琳はニコニコと微笑んでいる

「・・・だつてよ妹紅」

妹紅に視線を向ける

「私はいらないです」

「俺も自分の分の食いもん集めるのでいっぱいいっぱいだからいいわ」

「貴方は食べ物の問題で拒否するのね・・・」

実際にそうなのだからしょうがない

「私は姫に『出てけ』と言われましても、ずっと永遠に一緒にいますよ」

「永琳・・・」

「姫・・・」

ガシッ！

効果音つけるならこんなのだろうな、すげえ強く抱き合ってる、絶対臓器の一つや二つ出てくるぞ

「それじゃあ、私たちは帰るわね」

「何処にだよ」

あえて突っ込みを入れる

「前も言ったと思うけど、教えるつもりはないわよ、お姫様の住居に不法侵入されたらたまったもんじゃない」

「少しは俺を信用しろよ」

「それは無理ね（ですね）」

妹紅と輝夜の声がハモる

「妹紅・・・俺ら長い間に一緒に旅したじゃねえか・・・」

傷ついた、とても傷ついた

「でも、信用はできませんよ、彩音さんは女の敵ですから」

女の敵って、俺ってそんな変態なのか？

「・・・ひどい言われようだな、傷つくわ」

なぜか無視して話を進める、え？話聞いてなかったの？

「じゃあ、またいつか会いましょうね、不老不死の御二人さん♪」

輝夜が此方に笑顔を向ける、俺も微笑み返しこう言った

「ああ、いずれまた会おう」

「今度こそ殺しい合いを・・・絶対殺す・・・」

妹紅が笑顔ではなく殺意を向ける

「オイ、怖いぞ妹紅」

怖い、普通に年頃の女の子が出していいものではないと思う

「怖い位が女はちょうどいいんですよ、分かってないんですね、本当に」

ため息をつかれた、え？俺が悪いの？そして立ち直り速くない？

「胡散臭い奴はどうなるんだよ・・・」

「そんなことより、さっさと旅を再開しましょうよ」

そんなことよりって・・・！！

「そうだな」

アレ？俺も立ち直り速いかな？

そう思いながら右足を前に出した瞬間

ドクンッ

心臓が強く脈を打った

「ぐッ、くぁっ、ぁぁっ、はぁ、はぁ」

「どうしました？彩音さん？」

・・・しゃべれないッ！、うまく言葉を発することができない

死ぬ・・・？嫌だ、死にたくないッ！！、まだ生きたい、生きていたい・・・

「っはぁ、はぁ」

「一寸！彩音さん？！しっかりして下さい！何処かが痛いんですか？しゃべってくれなきゃ分からないですよぉ・・・」

ああ、だめだ、俺の意識が、深い海に、沈んでいく・・・

また・・・夢だ

俺と俺と死神だ

俺は死神に触れてみた

俺の右半身を死神の左半身が合わさった

「・・・ッ!!」

「モウスグダネ・・・」

死神は無邪気に笑った

とても楽しそうに・・・

「ッあ!」

「彩音さん!!よかったあ」

「俺は、一体俺に何があつたんだ?」

状況を尋ねる

「倒れたんですよ、いきなり」

妹紅が説明をする

「倒れただと？」

「調子が悪いなら先に言ってくださいよ、もう少し休んでいたのに・・・」

「・・・わりい」

「どうしますか？このまま進みますか？それとも、もう少し休みますか？」

「先を急ごう」

いそがなくきや、何も、何もできないまま終わるのは・・・

「わかりました、じゃあ、急ぎましょう」

妹紅も快く了承してくれる

・・・俺は、あいつらのもとに帰れるのだろうか？

・・・帰るんだ、意地でも、絶対に

・・・生きて、また酒を飲もう、父さんとは飲めなかったけど、ここです・・・

俺はまだ、死ぬわけにはいかない、まだやりたいことが、やり残した事したことがいっぱいあるんだ・・・

第29話 最後の旅

俺はもうそんなに長く生きられない

自分の体だからわかる、もう半年も生きられない

それでも生きていく、朽ち果てるまでは

「彩音さん、もう、旅なんてやめましょうよ」

妹紅が今まで何度か冗談で言っていた言葉だが、今回は本気らしい

「頑固拒否する」

「旅なんて、体を蝕むだけですよ、行き先すらも決まっていなくてしょう？ だったら・・・」

「此处で旅を止めてしまったら、なにかも終わりなんだよ、俺はまだ見たいものがいっぱいあるんだよ・・・」

「見たいものって、どんなものですか・・・？」

「綺麗に染まった紅葉、此处で降る雪、満開の桜、俺はここでは四季は夏しか見ていないんだよ」

「そんなものために命を捨てるんですか？！」

「そう、妹紅に対しては『そんなもの』でも、俺にとっちゃ大切なものだよ」

「・・・私にはわかりません・・・」

「いずれわかるだろうよ」

「・・・そうですね？」

「ああ」

「それでも、死に近づいていることは確かなんですよ。」

「そうだな、じゃああいつらのところに帰るか」

「え？さつき旅はやめないって」

「あいつらのところに帰るまでが俺の最後の旅だ」

「・・・彩音さん意地悪です・・・」

「最後の時はあいつらと一緒にいたいんだ・・・」

「わかりました行きましょう、帰りましょう一緒に・・・」

「お供、よろしくな、妹紅」

「了解です」

俺は帰るよ、待っていてくれ、闇夜、綾見・・・

第30話 ただいま

「帰ってきたあ~~~~」

疲れた、普通に歩いて帰ってきただけに疲れた・・・

鬼とか、獣さんとか、スキマ妖怪とかめちゃくちゃだったよ、道中

「特にあのスキマ妖怪はきつい」

声に出たよ、しょうがないか、あれはきつかった、具体的に言うと

「持ち物全部ここに置いていきなさい」

これだ、具体的じゃないって言うツツコミありがとうございます

まあおかげで、俺の持ち物全部なくなっただけだな・・・

「まあ、あのスキマ妖怪は本当にしつこかったです」

「正直に言っちゃうと、あいつのせいで帰ってくるの遅れたせいが・
・・・」

「それはもう忘れましょうか・・・」

「・・・そうだな」

「まあそんなことより、闇夜〴〵何処だ！出て来いよ！！」

「・・・綾見、じゃないね、誰だい？僕のことを調べてくるって」とは、ここを乗っ取る気かい？」

「いや、違うよ、用心深すぎる・・・」

「！！彩音かい？どうしたんだい、旅は」

「帰ってきました」

「・・・そうかい、なら言うことはただ一つだね」

「ああ、そうだな言ってもらえたら帰ってきたって、実感が沸くな」

「おかえり、彩音」

「ただいま、闇夜」

「おかえり、妹紅」

「ただいまです、闇夜さん」

「さて、それじゃあ、綾見でも呼んで飲もうか」

「おう、今回は飲み比べ勝ってやるよ」

「できるかな？」

俺と妹紅は帰ってきた、無事・・・とは言えないが、帰ってきたんだ

そして俺の、残りの命は、あとわずかになった・・・

第31話 酒の飲みすぎは・・・

「・・・頭痛いんだけど」

「まだ倒れるには早いッ!」

頭痛がひどい、やっぱり人間は鬼には勝てない・・・

「何のために旅してたんだい？酒に強くなるためだろう？」

「いや、違えよ・・・」

誰がそんなことのために旅するんだよ

「まあ、もっと飲みなよ、こんな程度じゃ終わらないよ？」

「いや、もう妹紅寝てるんだけど」

「あんたのためのパーティだよ、主役が倒れちゃ終わっちゃうだろうっ？」

「おれ的にはもう終わらせたい・・・」

綾見は俺がいいって言うてるのに、酒を注いでくる、口に

「ふが、こぼこぼ、しにゅ、ぐほっ」

「飲め飲めえ」

未成年が鬼に大量の酒を飲まされている、すごい光景だなこれは

あゝヤヴァイ、意識が朦朧としますぜ、どうします？鬼さん、主役これ、死にますぜ

「やめときなよ、綾見、酒だつて一気飲みすれば死に至ることだつてあるんだよ？」

「いや、こいつ不老不死」

「なら許可を出そう」

「ごぼやヴを」

ちなみに今の俺の言葉は訳するとこのやろつになる、わかったかな？みんな

「さて、許可も取ったし、死ぬまで飲めよ？」

「ゴボアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

彩音、酒の一気飲みにより死亡（未成年）

もうこれに驚くことはない

夢だ死神の出てくる

俺は手っ取り早く済ませたいので死神に触れた

「前は右半身と左半身だったな」

「ツギハドウドロウネ」

・・・無視だな、これは

ズズズッ、音はならないがあらわすならこの音が正しいと思う

俺と死神の今の状況は

・・・完璧に重なり合った

「もう、オワリダヨ」

次で最後

俺の人生最後の日が始まる

第32話 last day(前)

「・・・もう、最後なのかよッ」

俺は呟いた

「何がだい？」

誰かが答えた、独り言のつもりだったのに

「おれの人生」

「面白くないね」

無表情で闇夜は答える

「だろ？俺の全然面白くねえよ」

「泣きなよ、なに、恥じることはないさ、最後の日は悲しいだろうから」

「・・・もう、泣いてるよ」

「早いね」

「だろ？」

答えながら俺は鼻をすする

「なあ」

「なんだい？」

「今だから使える、人生最後のお願いだ」

「・・・いいなよ、答えられることなら答えてあげるよ」

「最後は笑顔で送り出してくれ」

「わかった、お安い御用さ」

「頼んだ」

「何処に行くんだい？」

「腹減ったから、飯探しに行く」

「・・・昼までには戻ってきなよ、妹紅と綾見には伝えておくさ」

「ありがとう」

俺は森の中にいる、一人で、切り株に座り、声を殺し泣いている

誰にも見られたくないから、ここにいる

・・・寂しい、孤独に支配されそうだ

能力使おうか、最後かも知れない

「周りを虹色に」

俺がここに来る前に見た虹を似せてみた

「綺麗、だな」

その虹は俺を支配した、孤独に支配されてた俺を支配してくれた

「ありがとう」

「みんな今までありがとう」

「本当にッ、あり、がどおう」

泣いた、今度は声を殺すことはできなかった、恥ずかしいけど泣いた

今ここで一生分の涙を使ってしまうと・・・

第33話 last day(後)

昼は過ぎてしまっていた、闇夜に昼過ぎは帰ってこいと言われたのに

「帰ろう・・・」

俺は立ち上がろうとした

ドクンッ

ドクンッ

ドクンッ

心臓が飛び跳ねた

後ろに何かいる

誰だ？紫か？

違うこの感じ、命を取られてしまいそうな感じ

「しに、がみつ・・・」

「ハジメマシテ、コロシニキタヨ」

動けない、恐怖だ、逃げなきゃ、逃げなきゃ、殺される

「ヨルニナルマデイツショニイテアゲルヨ」

プレッシャーが消えた

「っはっ、はっ」

夜になるまで一緒にいるだと？

ふざけるな死神を連れて歩けっのか？

「くそっ、くそっ」

「こんなところにいたか、早く来なよ、もうパーティは始まっているんだ、最後まで笑いあおう」

「あ、綾見……」

「後ろにいるのが死神でいいのかい？」

「見えるのか？」

「ああ、ずいぶんと気持ちの悪いオーラを放っているんだね」

「……俺はもうすぐ」言わなくていいよ、悲しくなるだろう？」
綾見」

「最後まで笑顔って言ったろ？笑ってパーティに行こうよ」

「ああ、ありがとう」

「遅いよ、最後までぼくたちと一緒にいようとは思わないのかい？」

「思ったよ、でも、泣いてたら動けなかった」

「そうかい、じゃあさっさと飲み明かそうか」

「途中で逝かせてもらうぜ俺は」

「そうかい、じゃあ、飲もうか」

俺たちはずっと飲んで話してだった

俺が初めて獣と戦った時のこと

俺と妹紅が初めて会った時のこと

俺が前は頭が悪いダメ男だったこと

色々話した

闇夜と綾見は能力を教えてくれた

闇夜は、ありとあらゆるものを変形させる程度の能力

綾見は、物体のスピードを操る程度の能力

だそうだが、もっと早く教えるよってな

そして、あたりは真っ暗になった

そして、死神が一言

「ジカングレダヨ」

俺は体が重くなるのを感じた

みんなが何かを叫んでいる

「おい、おま、え、らあ さいご、まで、えがお、って、い
った だ ろ う？」

俺はこの言葉を言いきった、何とか言えた

そして、死んだ

第34話 r e s t a r t

目を覚ましたらそこは見慣れたベットだった

「ねみい」

目をこすりながら呟いた

変な夢を見たからだろうか？気分が落ち着かない

夢ってのはどんなものかって？

俺が東方の世界に入って妹紅、後は知らないキャラだな、夢の中で登場したオリキャラと死ぬまで過ごしてた夢だ

「学校行かなくちゃな」

俺は一応高校生だ、学校には行かなくてはいけない、まあ1時限目で帰るが・・・

「飯はどうすっかな」

・・・考えた、作るのはめんどくさい、と、なれば

「買っていくか」

これが一番いい

「起立」

「礼」

「着席」

授業終了の号令がかかる

無視したが

「オイ彩音え！貴様だけだぞお号令してないのは！！もう一度一人でやれえっ！！」

無視、オール無視だ

「貴様あ後で職員室に来ることだな、痛いめ合わせてやるぞお」

「教師が生徒に暴力振るっていいのかよ」

「黙れえっ！いいからこい！」

「せんせー腹痛いんで帰ります」

「ちょ、一寸待てええええええっ」

「じゃ、乙！」

俺は教室から飛び出した

うるせえやつが後ろから追ってきたが、もう一人のうるせえやつが

蹴り飛ばした

「よお、彩音、一緒に帰ろうぜ」

「『TOTO』お前もさぼんのか」

「おう、めんどくさいからな」

ああ、そうだ一つ言っておくがこの『TOTO』はどっかの会社？とかバンドとかとは関係ないからな

「じゃあ、ゲーセン行かねえか？」

「おつ、いいね、今度こそはUFOキャッチャーでいいもん取ってやるよ」

「じゃ、取ったらネット・・・ヤフオクで売りさばるか」

「おれのもんなのに?!」

「お前のもんは俺のもん、俺のもんは俺のもん」

「どっかのガキ大将みたいなこと言つなよ!」

「よし、じゃあ行くか」

「おれの話を聞け!」

「いやー、もう3000円超えてるぞ！やったな3000円で取ったのに」

「俺が取ったのに」

「うるせえなあー1000円くらいはやるから安心しろよ」

「逆だろっがッ」

「へいへい、さいですか、と適当に返事をしていると」

「ニュッ」

「俺の足元に見たことのあるもの」

「スキマが開いた」

「え？」

「そのまま重力に従い下へ落下」

「自由落下運動で逢ってるんだっけ？これ？」

「今までありがとう『TOTO』3000円はお前のもんだよ・・・」

「

そう言い残し俺は落ちる、ちなみに『TOTO』はまだ気づいてない
鈍いなやっぱりあいつ・・・

で、周着地点ですねここが、場所は

「魔法の森・・・？」

「正解おめでとう」

「紫・・・」

「久しぶりね、この前会ったのが幻想郷のできる前だから・・・」

「何年ぶりでしょうね？」

「覚えてないのかよ」

って、待った、前に会ったってことは

今までののは夢じゃない？

「オイ、紫、俺は死んだよな？」

「ええ、死んだわよ」

「じゃあ、何でここにいるんだよ」

「死神がいなくなったからでしょう?」

「わかるように説明」

「まあ、簡単に言うと、死神に連れて行かれる時能力使って死神殺しちゃったのよ、で、反動で一時的に元の世界に戻っていたのだけだ」

「一度間をおいてから・・・」

「戻してきちゃった?」

「・・・、夢だなこれは」

「まあ、これから、異変解決に励んでもらうからその気でいてね」

「異変解決だと?一寸待つてどういう意味だそれ」

「御機嫌よう」

「オイッ!!紫!!!!」

「何なんだよ一体」

「それは僕のセリフだ、何なんだ?一体君は」

「あ、闇夜クンじゃないか」

「・・・彩音?」

第34話 r e s t a r t (後書き)

いっぺんに投下しました

テスト1日前なのに何やってんだあゝ!! 俺えッ

第35話 battle

「そうして君がここにいるんだッ！どうして生きているんだッ！！」

「生きてて悪いのかよ・・・？」

「そんなことはない、けど、生きていたなら何でもっと早く姿を現さなかった！！」

「いやね、紫に聞いた話だと、俺は死神を殺しちゃったらしくてさ、んで、その反動で元の世界に戻ってたんだと」

「・・・そうかい、なら僕たちの前に出てこなくて当然か・・・」

「で、妹紅と綾見は？」

「二人とももういない・・・」

「？！どういう意味だ？死んだのか？オイッ！！」

「妹紅は君のことを忘れられないらしくて、君と一緒に行った場所を旅しているよ」

「綾見は？」

「綾見は、人里に酒を買いに行つて以来戻ってこない・・・」

「生きているのか？」

「わからない、そんなことわからないよ・・・」

「・・・そうか、悪い変なこと聞いちゃって」

「いいよ、それより」

「久しぶりに殺りあおうか」

そうして、2人の、戦闘開始に火ぶたが切って落とされたとき・・・

ナムナム・・・

第35話 battle (後書き)

- 今のことり4連続でサブタイトル英語ですが、そのうち変わります。
- ・

第36話 新しい技、大黒柱

「前回までのあらすじ」

妹紅は旅に、綾見はどこかに、闇夜はヲタクになっていた！！

「だれがヲタクだって？」

「え？違つか？」

「ルールは前と同じ、技は3回まで、ギブって言ったやつをぶっ殺す権利を得ると」

「先生僕はそんなルールで戦った覚えはありません」

「あれ？そうだったかい？」

「老化が進んでますね先生、一回ぶっ殺してあげるので来て下さい」

「・・・じゃ、遠慮なく」

「君から半径100メートルの地面を底なし沼に変形」

「なっ、せけえ」

「正々堂々なんてもう、古い！」

飛んで回避・・・と行きたいが俺はまだ飛べない、なので、技を使
って回避

「あつ、でもそんな技ナイワ・・・」

「じゃあ、ここで終わりだね」

弾幕かぁ〜昔綾見の腕を一本持って言ったやつだ、これは俺顔面吹き飛ばすマジで

「ヴァイヴァイ」

「ヴァイヴァイってなんだよ」

迫りくる弾幕、ここで俺はこれを発動しよう

「色盾、闇色黒色ッ！」

俺の前に黒い盾が現れる

その盾は闇夜の弾幕をすべて――飲み込んだ

「なんだいそのチート能力の盾は？」

「おれの能力ですね、すべてを飲み込む漆黒の盾、どんな技であろうと、決して越えることはできない！！」

「矛盾って言葉を知っているかい？」

「知ってるよ、でもこれはすべてを飲み込む、だから越えることはできない」

「でも形を変形させれば・・・」

「お前の技の残り使用回数が1になる」

「それがどうしたんだい？」

「やめといた方がいいぞ、無駄だから」

「・・・彩音の盾のカタチを変形、黒い球体に」

「で、そのあとに？」

「この黒い球体の性質を変形、僕の弾幕のみを受け付ける」

「お前も十分チートだよ」

「どうもありがとう」

そう言つて闇夜は弾幕を作る、俺はまだ沼にはまってる

「ハッ」

闇夜が弾幕を発射した

見事黒い玉に命中！

そしてその黒い玉は、俺に向かって飛んできて

「まじですか・・・」

俺を飲み込もうとする・・・

ドオオオオオン

「どれだけ威力高いのを作ってるんだい君は・・・」

「こんだけだろう?」

「?!」

「油断してんじゃないやねえよ、死ぬぞ?」

「どうやって抜け出したんだい?」

「これだよ、俺の周りにあるもの、轟音のb a r r i e rだ」

「轟音でバリアか、考えたね」

「名づけて、守りの轟音だ」

「ダサイ」

「何だつてえ」

「じゃあ、続けようか」

「無視すんのやめてよ傷つく」

「行くよッ」

「おれの話を聞けッ!」

「最後の技にして僕の究極の技」

「周りの物体すべてを黒龍に」

「え？チートじゃん本物の」

「a l l d r a g o n」

「そしてチュウニって」

「死ねえ」

「大黒柱」

俺の前には、いっぱいD R A G O Nが

え？おまえ今なんか言っただろって？

ああ大黒柱のことね

これは神奈子オンバシラが真っ黒になったみたいなもんだよ

まあ要は黒い柱それが数千本あるだけさ

「なんだいこれは？」

「大黒柱、大きな黒い柱だ」

「何でこんなにあるんだい？」

「おれに攻撃が当たらないようにする為」

「・・・負けだ、僕の負けだ」

「これからが大黒柱の面白いところなのに・・・」

何はともあれ

俺闇夜に初勝利ッ！！

第37話 初めての異変

「まったくいつの間にそんな修行したんだい？」

敗者の闇夜が勝者の俺に尋ねる

「いや、別に修行なんてしてねえよ、気づいたら使えたって言う」

「それは頭の良さを自慢しているのかい？」

「前に言っただろう？俺めちやくちゃ頭悪いんだよ・・・」

自分で言っただけで悲しくなる・・・

「ああ、そういえばそうだったね、何年も前の話だから忘れていたよ」

「なあ、ひとつ聞いていいか？」

「君は話の流れを変えるのが好きだね・・・」

「えーとこのあたりが『紅い妖霧』で覆われたことってあった？」

「いや、そんなことはなかったけど、いったいどうしたんだい？」

「ん、と、今季節って何？」

「夏だよ」

「ってことは、もしかすると、もしかしちゃうのか？」

「何を一人でブツブツと、気持ち悪い、死ね」

「ひどいなお前」

「でに起こるんだい？」

「異変」

「は？」

「このあたりが『紅い妖霧』に覆われる」

「・・・」

「人里がそれに覆われたら30分ほどで、Bad Endだ」

「・・・それは、大変だね・・・」

「え？信じるのか？」

「いや、たまには信用してあげないとね」

「闇夜・・・」

「さて、どうやら来たらしいねそれ『紅い妖霧』とやらが」

「え？まじで？」

「マジデだよ」

「で？これはどうすればいいんだい？」

「博麗霊夢が動くのを待ちます」

「それだけかい？」

「うん、修行でもしようか」

満面の笑みで言ってる

闇夜は呆れた顔をしながら

「しょうがないね」

俺たちの戦いはまだまだ続く・・・

「注意、まだ終わらないぜ、異変解決しないといけないから」

「もう、endingなのにそんなこといつのかい？次回予告で言うものだよそれは」

「いいじゃないか・・・」

第38話 普通の魔法使い、霧雨魔理沙

「なあ、闇夜ひとつ聞いていいか？」

「なんだい？」

「お前のスリーさいぞ「死にたいみたいだね」「冗談だよ」

「要件を言え、30字以内で」

「あれ？怒ってる？」

「8文字」

「あのね、博麗霊夢はいつになったら動くんだよ？」

「よし30字以内だ、答えてあげよう」

「アブネ」

「僕にも分らないが、もう人里は『紅い妖霧』に覆われているはずだよ？」

「じゃあ、今日あたりか？」

「そう思っね」

「へー、あ、闇夜お茶」

「自分で行って僕の方も持ってこい」

「デメエが行けよ」

「彩音、一回かったからって調子に乗ると痛い目見るよ?」

「そうだが、油断大敵だぜ」

「そう、その通りだ」

「先生!第3者が加わってます」

「ああ、気にするな、害は与えないぜ」

現れたのは、白黒の魔法使い『霧雨魔理沙』だ

博麗霊夢と一緒に異変解決をしている魔法使いだ

いやゝ原作知識って役に立つねやっぱり

「すみません、名前を教えてください」

「ああ、私は普通の魔法使いの霧雨魔理沙きりさめまりさだよしくだぜ」

「俺は彩る音と書いて彩音だよしく」

「僕は闇夜、よろしく」

「ところで何を話していたんだ?」

「ああ、今人里が『紅い妖霧』で覆われているだろ？それについてだ」

「そのことなら、もうすぐ、霊夢が動くと思うから、霊夢と一緒に異変を解決に博麗神社に行こうとしてたんだが、一緒に行くか？」

「もちろん」

「行かせてもらおうよ」

「即答だな、そういう奴は好きだぜ」

好き・・・まさか、恋愛かんじ」友達としてだがな」

満面の笑みでそんなこと言われちゃ・・・立ち直れない

「じゃあ、行こうぜ」

初めての異変解決は、血の味がすると思う・・・Z E

第38話 普通の魔法使い、霧雨魔理沙（後書き）

昨日更新できませんでした、すみません・・・

第39話 楽園の素敵な巫女（笑）博麗霊夢

「よぉ〜霊夢！！異変解決しに行こうぜ！！！」

「っさいわね〜今日の営業は終了いたしましたッ！はい出てって、出てって」

「そんなこと言っちなよ霊夢、お客さんが来てるぜ？ていつか、おまえの神社営業してたのか・・・」

「本当に?!」

「ああ、うそはついてないぜ」

「ど、どうも・・・彩音です」

「闇夜だよ」

「私は博麗^{はくれいれいむ}霊夢素敵な巫女よ」

「は、はぁどうも」

「で、お賽銭は？」

「は？」

「参拝客でしょ？お賽銭」

「（おい、魔理沙、こんなの聞いてないぞ）」

「（言っていないから当たり前だぜ）」

「お、お賽銭は闇夜が払います」

「おい？何で僕に振った？」

「そう、なら早くチョーダイ？」

「ッゝわかったよ、払えばいいんだろう？」

闇夜は財布？から金を取り出し、賽銭箱に入れた

勿体ねえ、人里で酒買えばいいのに・・・

「まいどあり〜じゃ」

「「「オイッ！！！」」」

「なによ？異変解決冗談じゃないわよ、何でそんなめんどくさいことしなくちゃいけないのよ」

「うわ、こいつ巫女として最悪だな」

「報酬」

「はい？」

「報酬くれたら行ってあげないこともないわ」

「おい、霊夢、さすがにそれはないと思うぜ・・・」

「わかった、なら、ほんとの俺と勝負だ」

「いやよ、めんどくさい」

「おれを倒せたら、おまえの賽銭箱に有り金全部入れてやるよ」

「その話、乗った!」

「こいつ、本当に巫女か?」

「うつさわね、早く行くわよ」

霊夢は『紅い妖霧』の発生場所が分かっていたのかすぐ飛んで行った・・・

「よくあの霊夢を言いまとめたな、あんなことできるのは私だけだと思ったぜ」

「まあ、頑張ったからな、それに、有り金って言うっても、払うの闇夜だし・・・」

「調子に乗ると、痛い目見るよ?

「よし、行こうぜ、霧雨魔理沙!」

「魔理沙でいいぜ」

「了解した、行こうか!」

「こうして、俺の異変解決が始まった！！」

「何処まで行っただよ、霊夢」

「早すぎじゃないか？あそこで話していたの3分程度だぞ？」

「・・・流石巫女、とでも言っておこうか」

「おっ、誰がいるぜ」

「あれは・・・」

金髪少女ルーミアじゃないかつ！

「うー、また敵なのかー？」

「なんだ？霊夢にばっこぼこにされたのか？」

「霊夢？あの紅白巫女のことかー？」

「そうだぜ」

「お前たちもあいつの仲間かー倒してやるぞー」

「だってよ、闇夜」

「僕がやるのかい?!」

「お前が相手かー」

「いや、待てここわ、私がやるぜ」

そう言つて魔理沙はスペルカードを取り出し

「恋符『マスタースパーク』」

不意打ちつてやつですねわかります

「……」

「何か言ってくれよ、おまえら……」

「いや、不意打ちだし」

「鬼畜だし」

「ルーミアどつか飛んでったし」

「1面のボスに使っていいものではないと思う」

「そんなに言われるのか、威力は抑えたんだぜ?」

「それで吹き飛ばせるって……」

「そ、それより霊夢を追いかけてよつぜ」

「「ごまかしたし・・・」」

何はともあれ、1面クリア!!

第40話 妖精

「彩音の能力を教えてほしいんだぜ」

「断る」

「もったいぶることないぜ、いずれわかるんだから」

「ならその、いずれを待つんだな」

「意地悪だぜ・・・」

「闇夜の能力を聞けよ」

「じゃあ、闇夜能力を教えてほしいんだぜ」

「じゃあつてなんなんだい？」

「さつさと教えるんだぜ、マスパ喰らわせるぜ？」

「オイ、君たち、次の敵が見えてきたよ？」

「あ、2面中ボスか」

「たしか、何だっけ？」

「羽根、緑色、リボン・・・」

「ああ、大妖精か」

「・・・中ボスか、めんどくせえ」

「よし、彩音、おまえの実力を見せてほしいんだぜ」

「OK了解した」

あ、こっち向いた気づいたみたいだな

「音を集めてゝ轟音に変換ゝかゝらの、発射!!」

お、命中した

あ、墜落した

おや？ものすごいスピードで？がきた

「お前ゝ大ちゃんに何するんだ!!!!」

「サンマタヴエダイ?!」

ちなみに訳すると 秋刀魚食べたい になるぜ、余談だが何で秋刀魚って書くか知っているか？秋に捕れる刀に似た魚だから秋刀魚って書くらしいぜ、ググったら出てきたぜ

まあ、そんなことは置いておいて？が俺に思いつきり tackle を・・・死ぬ、死ぬってこれ

「オイ、彩音大丈夫か（笑）」

「お前ぶつ殺すぞ？グハッ もうっばい、あとは闇夜が全部片付ける、しりぬぐいはお前の仕事・・・グフッ」

KY？は俺らの話をほぼ無視して、つか全部無視して

「これが、大ちゃんの分、そして、これがあたいの分だッ！」

なんてバカなことをほざきやがる、俺無傷だからな？実際夏の氷精の攻撃なんて聞かないからな・・・？

「俺、お前になんかしたっけ？！」

確認しないとね、俺えらいから、自分で言つと悲しいな・・・

？インフォメーション！

意味不明なことを言いながら、彩音にスペルカード、『パーフェクトフリーズ』を繰り出そうとしている！！

「凍符『パーフェクト』やれ、俺を助けるんだ！闇夜！！俺はこんな雑魚には殺されたくない、殺られるなら冬がいい」

「わかった、君のプライドくらいは守ろう、あの妖精の周りの雲すべてを鋸に」

「うわ鋸とか、こいつ残酷」

「フリーズぎゃああああああつ！！」

「やったね、次は3面だ居眠り門番だよ！！」

「結構強いじゃないか、まあそんなこと関係ないからさっさと行くぜ」

「魔理沙ひどい、助けるよ・・・」

「いや、一応、実力を測っておかないとな、足手まといになるくらいならここにおいていくつもりだったぜ」

「まじっすか、俺たち老いて枯れたら、ここでなにすればいいんですか」

「それよりも、弱くなったかい？彩音」

「KY＋失礼だなお前ッ！」

次は、紅、メイ、いや違う・・・中国戦だ！！

第41話 中国、図書館、お持ち帰りだぜ

「ここが、紅魔館・・・紅いにもほどがあるぜ・・・」

「いやー俺の能力で真っ黒に染め上げたいわ」

「そんなことしたら、君、ここの主事人のお食事にされるよ」

「お食事って、お前そんなキャラだったのか・・・お前新しくキャラ作ってたら、無色にするからな？」

「なあ、それより霊夢はもう中に入って言ってるのか？」

「らしいな、さてサッサと門番を倒して入りますか」

「なんで、ここが紅魔館って知っているんですか？」

「あ」

中国出ました「『気を使う程度の能力』の中国です！

「おっし、お邪魔します」

「一寸待って下さい、ここに堂々と門番が立っているのに入ろうとするんですか？」

焦りながら俺に話しかけてくる中国

「いや、ね、弱そうだから、俺平和主義なんだ」

後ろで笑い声が聞こえる、絶対、魔理沙と闇夜だよ

「そういうことなら、私を倒してから行け!!」

「轟音の剣」

中国の胸に狙いを定めて・・・

「フッ!」

直前で停止

「これでいいよな?入らせてもらっぜ」

「いやゝ見事な不意打ちだったぜ、最悪だな、おまえ」

「うるさい、あ、闇夜お前は絶対しゃべるな」

「なぜに?!」

そうしてみんな仲良く紅魔館に入って行ったとさ

「・・・一ついいか?」

「なんだ?」

「真っ正面からはいったら、敵の思いつばじゃないか?」

「ああ」

「だからさ」

魔理沙は横の壁に移動して

「マスタースパーク」

「……」

壁をぶちぬいた、つながっている先は勿論

「ここは、図書館か？本がいっぱいだけ、あとでお持ち帰りだな」

「……魔理沙さん、司書的なもの踏んできます」

「関係ないぜ」

4面中ぼすを倒した！！！！

第41話 中国、図書館、お持ち帰りだぜ (後書き)

短い、しょうがない・・・

最近投稿してなかったのは寝てたからです・・・。

もうすぐ、PVが10000突破

やったね、こんな駄作でも10000いけるんだね

SPも目前だね

第42話 不老不死VS悪魔の妹

「一寸、あなたたち、何してくれるのよ」

「お前は誰だ？」

「こっちのセリフよ!!」

紫色の髪をした、貧弱そうなモリ・・・魔法使いがこちらをジト目で睨んでいる、怖くない、むしろ可愛い、お持ち帰りしたい・・・

「お前はここの主人か？何かか？」

魔理沙が問う

「違うわよッ！私は、この図書館の主人よ!!あと、その壁ちゃんと治してよねッ！」

そうだ！ちゃんと治してよね、俺は関係ないんだからね

「闇夜君変形だ、俺らに矛先が向かぬように、早く壁を直すんだ」

「え？ああ、わかった」

そう言い、闇夜は壁を変形させる

「むきゅー一体何しに来たのよ・・・」

「この『紅い妖霧』を止めに来た」

「・・・なら、レミィに会わせるわけにはいかないわね」

「なら、おまえを倒せば？」

「会えるんじゃないかしら？」

「なら、やるしかないな」

「できるのなら」

あれ？パチュリーで喘息持ちじゃ・・・

「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ」

「私はパチュリー・ノーレッジ、魔法使いよ」

「私が勝ったら、ここの本をもらっ+その、レミィとやらに会わせてもらうぜ」

「勝てたら、ね」

「めんどくさいんで、先進んでますね」

向こうで何か話しているが気にしない、まだ霊夢見つけてないんだし、レミリア見つけなきゃいけないし

「フアーアツ、行くかあ」

「欠伸しながら言ったら緊張感が全くない男になるよ？」

「実際ないですもん」

彩音たちは図書館から脱出した

3歩ほど進んだ

・・・メイドが待ち受けていた

さっきまでいなかったのにね、流石咲夜さん！いよ、PAD長！！

「ようこそ、紅魔館へ不法侵入の皆さま」

良い笑顔だ！それが営業スマイルか、俺も練習しよう・・・

「2人で皆様か？」

「3人でしよう？」

「遅いわよ、何してるのよ、私ひとりでこの異変解決しちゃうところだったじゃない」

怒ってる、先に一人で言ったくせに怒ってるよ

「それが一番望ましい」

「うるさいわね、じゃあ、行くわよ」

「私は無視かしら？」

「君の相手は僕がしよう、空氣的に僕だからね」

わかるようになってきたな、おまえも、いいこだ

「しょうがないわね、早く終わらせて、追いつかなくちゃ・・・」

「さてと」

「いきむふかあゝ」

「欠伸してんじゃないわよ、緊張感に欠けるわね」

「さっきも言われたから、もうそのネタはいい」

「此処みたいね」

「そうだな、あからさまにオーラが違う」

「さて、お邪魔するわよ」

霊夢はドアを蹴り飛ばした

年頃の女の子がしていいことじゃない、恥じらいを持ちなさい

「あら？早かったわね」

あふれ出す、カリスマこれぞ、紅魔館の主、

「はじめまして、レミリア・スカーレットよ」

「ここは、私に任せなさい、まだ他にも敵はいるわよ」

「厄介なのを俺に回したいだけだろう？」

「こつちも十分厄介よ」

「そうか、なら任せた」

「フフフツ、あなたの未来が見えるわ、あなたはフランに・・・あら、面白いわねこれは」

「何がだよ・・・」

「いいわ行きなさい、フランの遊び相手として、ね」

「ホラ早く行きなさい、さっさと終わらせて縁側で寝るのよ私は」

「呑気な巫女め、働け」

俺は地下室に向かって走り出した、フランドール・スカーレットを倒しに

「・・・フランって倒さなくても、異変解決できるじゃん意味ないじゃん!」

あ、今の聞かなかったことで

「はあっはあっ」

めっちゃ疲れた、地下室遠い！

魔理沙とパチュリーの戦いに巻き込まれそうになるとか、マジこれ
悲劇

「すーっ、はーっ」

深呼吸をして、地下室のドアを開ける

「お邪魔します」

「・・・誰？」

「俺彩音！」

「私はフランドール・スカーレット」

「よろしくな」

「・・・あなたはすぐ壊れる？」

「どうだろっねえ？」

「遊んでくれる？」

「遊んであげるよ」

「壊れないでね」

真つ暗で表情はわからないが7色の羽根が横にユラユラと揺れているのできつと喜んでいるのだろう

「じゃあ、行くよ？」

「一寸待ってくれ、スペルカード、何枚?!何枚なの?!」

「んゝ3枚」

「了解!」

さてここで皆さんに現状を説明しよう

無理だこれ

最初にはなってきた弾幕で死ぬよ?

十分だよもう、帰っていいですか?
じゅんの

「ちょお、っと、も、うかえって、いいでしゅ、かあ？」

「だめに決まってるじゃない」

「くそっこうなったら」

「スペルカード？」

「正解だ！！」

俺の最初のスペル、発動しようとするだけでこの無数の弾幕にあたりかけるってね

「色盾『闇色黒色』」

「なにそれ？チュウニ？」

「っさいっ！気にしてるんだから言っな」

このスペルカードは前の闇夜戦で使用した、すべてを飲み込む盾、別名は『矛盾の盾』

「さて、このスペルはいつまでもつかない」

「じゃあ、私も使うね」

「いや、いいよ、スペカ使ったらこれ即座に壊れんじゃん・・・」

「禁忌『クランベリートラップ』」

俺の周りを囲むように弾幕が現れ、その中に閉じ込められてしまった

「・・・おれはペットか何かか？」

「ウフフフツまだ、壊れないでね」

「?!」

大きな弾幕が、籠の中の俺めがけて迫ってくる

「まじかよ・・・色盾で防げるのは前だけだぞ？」

被弾しろって意味か・・・

「不老不死の力見せてやらあっ！」

俺は、被弾した

壊れなきゃいいんだ、誰も当たるな、とは言っていない、へ理屈だが俺が勝つためにはこれしかない

「あゝあ、また壊れちゃった、お姉さまに新しい人形もらおう・・・」

「ツ、そんな、悲しげな声出すんじゃないよ、まだ、終わっていないッ!」

「・・・どうやって耐えたの？」

「おれの負けだ、もう家に帰してくれ」

不老不死だとばれたら、大変なことになる、気がする・・・

「氣力で耐えた」

「・・・つまんない」

「じゃあかえっ「また遊ぼうね」ハイ・・・」

彩音VSフランはフランの勝利にて終わった・・・

第43話 全速力

「ハア・・・」

地下室でフランとの戦いを終えた俺はとりあえず、魔理沙と共に霊夢のところへ行こうと歩を進めていた

ちなみに魔理沙VSパチュリーは、魔理沙の勝利で終わった

「なあ、闇夜はどこで戦っているのか教えてほしいんだぜ」

「知らないぜ」

「パクリはよくないぜ・・・」

「さいですか、すみません」

「闇夜は誰と戦っているんだ？」

「PADちょ「死ねッ」ウヴアアッ!!」

俺の真横から殺意こき盛った声と殺意のこもったナイフが飛んできた

「ぐっ、お前、何しやがる、血が、あふれ出て、止まらないぞ?!」

「知らないわよ、自業自得でしょ？」

「そう思っね」

「なぜにッ?!」

「なあ、涙目で訴えても可愛くないぜ?」

「・・・もういやだ、死のう・・・」

「ところで、貴方は妹様と戦ってみたいだけど勝敗はどうなったのかしら?」

「なぜ知ってるし」

「私の能力で見たのよ」

ああ、そういえば、咲夜は『時を操る程度の能力』を持っているんだっけな・・・便利だなあ畜生ッ!

「どこを見てたんだよ?」

「『俺の負けだ、もう家に帰してくれ』って涙目で訴えているところね」

「・・・え?そこみれば勝敗わかるんじゃない?」

「勝負の最中にそんな余裕はないわよ」

それでも、そこ見れるんなら、大分すごいぜ・・・

さて、再びやってまいりましたオーラの部屋

ここわ先ほど、博麗霊夢氏がドアを蹴り飛ばしたのでドアなしとな
っております

中をのぞくと・・・

霊夢がレミリアに説教しているじゃありませんか！

「どついう風の吹きまわしだ？」

と魔理沙が一言

「ああ、お嬢様、お嬢様あゝッ」

逃げ出すメイド、現実逃避は無意味と言っておこつ

「・・・はあ、帰ろつ」

闇夜が一言

そして俺は・・・

「お疲れ様でしたッ！！！！！！」

今出せる最大の声を出して別れを告げる

そつ、面倒事に巻き込まれたくはないから

「行くぞ闇夜」

「よし、じゃあ、帰ったらも飲もうか」

そう言い残し全速力で玄関へ走る、たぶん、天狗と同じくらいのス
ピードだ

門番を一撃ノックアウトさせ

？を頭突きで蹴散らし

丸い黒い球体に木の枝をぶつけ、走る

そして、到着したら

「闇夜がいねえ・・・」

厄介事は、まだ終わらなかった・・・

第43話 全速力（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！

紅魔郷編終了です、闇夜は何処へ・・・

第44話 四季のフラワーマスター

前回までのあらすじ!!

闇夜クンが迷子に、大変だあゝ

「・・・迷子か・・・」

たしか、？までは一緒にいて

ルーミアは・・・どうだったかな？

そういえば？とルーミアまでの間にフラワーマスターがいたのよう
な・・・

え？いたか？いや見間違いだろう？闇夜がフラワーマスターに拉致
られたのも気のせいだろう？

「ヤヴァイ・・・めちゃくちゃヤヴァイ・・・」

・・・とりあえず、魔理沙と霊夢を呼ぼう・・・あいつらならきつ
と協力してくれる・・・はず

「大変だ！闇夜が、幽香に拉致された」

「ドンマイ」

「自分たちでどうにかするもんだぜ、危機を乗り越えてこそ強くなるんだ」

「名言ありがとうございます・・・つーかあいつ一応戦友だぞ？」

「私は一緒に戦ってないわ」

「私も雑魚を蹴散らしたくらいしか記憶がないぜ」

「・・・レミリアさん？」

「私は関係ないでしょ？敵だったし、あなたたちで何とかしなさい」

「メイドさん？」

「あの人は強かった、時間止めても襲いかかってくるだけよ、ただそれだけ」

「みんな、薄情者ッ」

「まあ、がんばりなさい、頑張れば倒せるわよ、たぶん」

「不安になるからやめろよ、つーかほんと、助けるよ、俺じゃあ勝てる気がしねえ」

「お賽銭くれるなら行ってあげてもいいわ」

「キノコ採取を手伝ってくれるなら」

「わかった、入れるし、手伝うだから一緒に行こう」

「じゃ、そういうわけで、神社への不法侵入はやめてちょうだいね」

「検討しておくわ、きっと行くと思うけど」

「そんなことしたら、この館、崩壊するわよ？」

「直すのは私じゃないから別にいいわ」

「・・・ハア、わかったわ、来てもいいけど絶対に荒しちゃダメよ」

「で？何処にいるのよ、そいつは」

「どこからどう見てもあそこだろう」

俺が指さした方向には、黒いドラゴンとマスタースパークがぶつかり合っている様子があった

究極の技だと言ってからから相当やばいんだろうな

「めんどくさいわね、あいつ、花踏むだけで、すぐ文句言うから」

「踏む方が悪いと思うぜそれは」

「あなあ、そんなことより、急ぐつぜ？早くしないと闇夜朽ち果てるぞ？」

「「りょーかい」」

「闇夜！！！」

「彩音かい、悪いけど、呑気に話す余裕はないよ」

「おさい銭のために来たわよ」

「助けに来たぜ！キノコのために」

「というわけだ、行くぞ、おまえら」

「仕切ってんじゃないわよ」

「・・・」

「また弱者が集まって、群れをなす、果たしてだれが一番強いのかしら」

そうして俺たちの戦いは始まった

第44話 四季のフラワーマスター（後書き）

テストの点数と順位が大変なことに・・・

夜にまた更新すると思います、よかったら見てください

第45話 スペルVSスペルVSスペル〓死？

「はい、皆さんこんにちは、この作品の主人公、彩音です」

「闇夜です・・・」

「今、霊夢と魔理沙が幽香さんと戦っているのですが」

「そうですね」

「闇夜、キャラ変わってる」

「ごめん・・・」

「えーとですね、めちゃくちゃ強いですが、皆さん、俺が行ってもまったく勝てる気がしません」

「同じく、勝てる気がしません」

「と、いうわけで、今回は皆さんの戦いを見物させていただきたいと思います」

「あ、その前に戦いに入るまでの回想に入ります」

〈回想〉

「あんたねえっ、花を踏んだだけで怒るんじゃないわよ、どんだけ短期なのよ」

「霊夢、花を大切にしてる奴の前でそれを言うのはどうかと思うぜ・・・」

「そう、その、白黒魔法使いの言うとうり、私の前でそれを言われても、やめることはできないわ」

「そう、なら、あなたの畑の花をすべて・・・消す」

「そんなことしてみなさい？あなたの神社、消えるわよ？」

「そんなことしたら、幻想郷がなくなるわよ？」

「そんなこと知ったこっちゃないわよ」

「私をスルーしないでほしいんだぜ・・・」

ええ、何か物騒なこと言ってますね、それにスルーはやめてと、さみしがり屋でしょうか？かわいいですね

「・・・あなたとは話しても埒があかないわ」

「最初から話し合いですまそうとしてる時点でアウトだぜ」

「・・・魔理沙もう神社来なくていいわよ?」

「ごめんなんだぜ」

「ごはんもださないわよ?」

「ほんとーにごめんなんだぜ」

「・・・こんな茶番劇につきあうつもりはないのだけれど?」

「私もよ」

「同じくだぜ」

「・・・なら、手加減はなしで行くわよ?」

「最初っからそのつもりでしょ?」

「フフフッ」

「回想終了」

「ほんとにさとくたばりなさいよ」

「そうだぜ、くたばった方が身のためだぜ？」

「何で私が負けなくちゃいけないのよ？負けるのはそっちでしょ？貧乏巫女にキノコ魔法使い」

ピシッ・・・

「どうも、彩音です、回想はいかがだったでしょうか？それでは、今回はここまでにしたいと思います・・・それではまた次回」

「終われると思っているのかい？」

「なぜ、ここでなぜ突っ込みを入れるんだ！！何かが切れる音がしただろう？俺達死ぬぞ？俺不老不死だけど」

「それでも、ここで、終わったら、作者が続きをめんどくさがって書かないじゃないか」

「んなもん知るか、諸事情入れてんじゃねーよ、何がテストで学年62位だ別にいいじゃねーか！！俺なんて学年90代キープだぞ？！」

「君も十分諸事情じゃないかい！死にたくないって」

「・・・わかった、俺が焦りすぎてた、冷静になろう」

「でも・・・」

「「この戦場で冷静でいられるか？」」

「霊符『夢想封印!!』」

「恋符『マスタースパークッ!』」

「元祖『マスタースパーク』」

「どうだろう?みんな、死ぬぜ?これは」

ヒューーッ

「ほら、こんなに大きな岩が飛んできた・・・」

「15mはある岩が・・・ね」

ドゴンッ

それから先は覚えていない・・・

ただ間違いなく岩にぶつかった以外にも死んだ

第45話 スペルVSスペルVSスペル〓死？（後書き）

昨日更新するとか言ってできませんでした・・・すみません・・・
あと、幽香さんのマスパって元祖でいいんですたっけ・・・？

第46話 『TOTO』救世主？（前書き）

夢を見た、『TOTO』と初めて会った時の夢を、俺が、あいつに助けられた時のことを・・・

第46話 『TOTO』 救世主？

「よお、彩音つてのはお前か？」

「誰ですか？あなたは」

「彩音でいいのかって聞いてんだよっ」

「・・・そうすけどなにか？」

「そうか、ならちよっと付き合えよ」

なんか、めんどくさいのに絡まれたな・・・

「あの、すみません何の用なんですか？僕、早く帰って、連ドラの再放送見たいんですけど・・・」

「黙ってついてこいよ、今すぐ痛い目見たいのか？あぁっ？！」

・・・今すぐって、痛い目見るのは決定してるのかよ・・・

しょうがないので、ついて行ったら、なんかやたら、でかい男が1人堂々と構えていた、仁王立ちってやつだ

「連れてきましたぜ、ぶ、あっ、間違えたボス！」

「ぶって、絶対ブスって言おうとしたらう・・・プフッ」

「おい、何笑ってるんだよ？これから、痛い目にあわされるのが楽しみなのか？」

と、ぶ・・・ボス？が一言

「何言ってるんだか、馬鹿か？お前らがこれから俺にばこされんのを想像して笑ってるんだよ」

「ほう、いうな、このくそ餓鬼が」

「みんなまとめてかかってこいよ、どうせ何処かに隠れてるんだろっ？」

「・・・よくわかったな」

ありふれたセリフ吐きながら100人位の、バットを持っていたいかにも不良ってやつらが出てきた

「はあ、この数はめんどくさい・・・」

「ビビってんのか？震えてるぞ？」

「冗談、武者震いってやつだ、さあかかってこいよッ！！」

「行くぜおめえらアッ！！！！！！」

「オオオオオオオオオオオ！！！！！！」

さてと、大体回し蹴りで2〜30人は倒せるだろう、どうせ四方八方からかかってくるんだから

「はあああああつ!!」

「そのセリフありふれすぎ、何で自分から場所教えてんの？馬鹿なの？」

回し蹴りはやめて、思いっきり蹴りを腹に

もちろん利き足の右足をな

バキッ

「?!」

「へへへッ鉄板だ、俺らみーんな、腹に鉄板仕込んでんのさ」

「せけえな、おまえら、正々堂々がモットーだろう？普通」

「やっちまえッ〜!!!!」

・・・右足はもう使えないと、逃げることもできない、戦ってもどうせ鉄板でやられる、俺にはバットなんて武器もない

「万事休すってやつか？」

「調子に乗るからワリイんだよっ」

「ああ、まだいたんだ、ブスさん」

満面の笑みを向けてやる、これが俺の最後の抵抗だ

目を閉じる、目を開けた時にはもう天国、いや地獄か・・・でも、もう死んでたらいいな

父さん今まで迷惑かけてごめんよ・・・なんてな、俺の柄じゃねえ

「・・・死んだら呪ってやるよ」

俺の頭上に不良共のバットが・・・

「オイ！お前ら、下級生いじめて楽しいのか？！」

何処からか声が

「誰だよ、ここからがいいところなのに・・・」

一人の不良が不機嫌そうに一言

「・・・救世主だ」

「・・・なんだ、テメエも下級生じゃねえか」

「やっちまいましようぜ、ぶさ、ボス！！」

こいつ、いよいよブスって

「オウ、やっちまえ」

そうか、こいつはブスって言われても触れないのか・・・って、そんなことより

「オイ、馬鹿野郎！！やめろ！そいつはなにも関係ないだろう？俺が目的なら俺だけを狙えよ」

「んなもん知らねえよ、俺らに牙をむいたやつはみーんなブチ殺すんだよ！！」

なんだよ、こいつら、これが不良なのか？ふざけんなよッ

「ああ、俺の心配ならいらない、クラスメイト守るために来たんだ、死ぬ覚悟くらいできてるさ・・・」

「死ぬって、なんだよ？！俺とおまえは今はじめてしゃべったんだろ？！そんなやつのために命かけるのかよ？！お前には絶対ハッピーエンドが待ってるよ、だからさっさとどこかに行けよ！！」

「俺にハッピーエンドなんて待っていないさ、それに、クラスメイトがばこられてんのに、身捨てたら、天国になて行けねーよ」

「・・・ふざっけんな、何で俺のためにお前が死ななきゃいけないんだよッ！！」

「うすせえな・・・いつまでもグダグダしゃべってんじゃねえヨッ！！！！」

「オイ！！逃げろ！！」

「ハア・・・こういう場所で空気が読めないやつに殺されるつもり

はない・・・」

ボキボキボキッ!!

「は?!」

嫌な音をたててバットが折れた

「バットが折れた?!」

「俺を殺したいなら、核爆弾でも持ってこいよ、そしたら死んでやる」

「ッザケンナアッ!!!」

ブスが狂ったように襲いかかってくる、まあ、バットがおられんの見たらそうなるわな・・・

「パンチッてけっこう痛いよね」

「ベゴッ!!!」

鈍い音が鳴りブスは空のお星様になった

「ひっ、ヒイヒイヒイッ」

周りのやつらはみんな逃げた

「なんだよ、おまえ」

「おれは遠山灯矢^{とやまとつや}みんなは『TOTO』って呼ぶ、よろしくな、彩音君」

「何で俺の名前を?!」

「いや、クラスメイトだから・・・」

「そうか、助けてくれてありがとう、灯矢」

「『TOTO』でたのむ」

「え?でも今知りあつたばかりじゃ」

「いいから、名前で呼ばれるの嫌いなんだよ」

「わかったよろしく『TOTO』」

「ああ、じゃ、ゲーセン行こうか!!!」

「ハイテンションが売りなのか?!」

「ああ、そうだ」

「・・・じゃ、奢りで」

「・・・ああ、わかった」

「うあっ!!、へんな夢見たあ」

「お早う、僕の膝枕の寝心地はどうだい？」

闇夜が話しかけてくる

「ああ、お早うって、はっ？膝枕？」

「そう、膝枕」

「・・・」

俺の頭が闇夜の膝に乗っかっている

「ああ、最悪だ、死のう・・・」

「そこまでかい?!」

「冗談だ、まあ、そんなことより」

なんで、いまさら『TOTO』と初めて会った時の夢なんか見たんだろうな・・・

つかあいつ。能力もちかよ・・・

第46話 『TOTO』救世主？（後書き）

昨日はちよつと試合がありまして、朝の7時から夜7時までゲームがあつて

帰ってきたら、ベットにGO!と、いう理由で更新できませんでした・・・

明日は、更新します、たぶん・・・

第47話 狂った友、懐かしき声・・・

浮かない顔してたら俺に呪われんぞお前？

「・・・なつかしいな、彩音、もうすぐ、もうすぐお前に会える、待ってるよ」

「あなたね？ここにー帯を荒らしているのは？」

「・・・文句があるのか？」

「あるわよ、文句がなきゃこんなところに来ないわよ」

「・・・俺は友達いや、親友、いや大親友に会ったよッ！」

「熱いわね、本当に熱いわ無駄に、ね」

「死にたくないならそこをどけ」

「いやよ」

「そこをどけえッ！！」

・・・そして二人がいた場所には、大きなクレータができたという・

「なあ、なんでお前の膝枕なの？」

おれの頭はまだ闇夜の膝にのっかっている、闇夜が離してくれないのだ

「なんでお前ってどういう意味だい？」

「いや、ここ、女子いっぱいいるじゃん、なんでお前なのかな」と思っ

「・・・いや、ちょっとわけありなんだ」

「ああ、なるほど、わかったぞ、お前、母性本能にめざめ「バイバイ」ぐぎやああああああっ」

「わけありってなんだよ、みんな見えないし、魔理沙ならキノコ持ってきてる頃だろう？」

「ここから、そう遠くない場所に、人間が出たんだ、その人間はここら一帯を荒らしまわっていた、だからそれをやめさせに、霊夢が出向いた、だけど、その霊夢がいつまでたっても帰ってこない、だ

から魔理沙が出向いた、という理由で誰もいないのさ」

「へーそーなのかー」

「聞く気がないなら聞くんじゃないよ」

「さて、なら俺らも向かうか・・・」

「そーいうと思ったよ」

「じゃあ、案内よろしくな闇夜君」

「ああ、せいぜい死なないようにね」

「お前も戦うんだぜ？」

「知ってるよ」

「ここだよ」

「ってここは紅魔館の近くの湖じゃねーか」

「まあ、落ち着いて、ホラ何か落ちているよ？」

そこには、大きなクレーターと、スペルカードが一枚落ちていた

「誰のスペルだよこれ？」

「・・・おそらく、霊夢のだよ」

「・・・これは、やばい状況だな・・・」

「とにかく探そう、これはとても大変なことになっていそうだからね・・・」

「ああ」

「あゝッ！おまえは！！」

「あ？誰だ？」

「このさいきょーのアタイを忘れたのかっ！！」

透き通った氷のような羽でフワフワと浮かぶ氷精チルノがいた

「お間の相手なんぞしてる時間はないぞ？」

「ハハハンわかったぞ、このさいきょーのアタイに恐れをなしたんだな」

「『恐れをなした』なんて知ってるんだな」

「アタイを馬鹿にするなあゝ！！」

「・・・ああ、そうだこのあたりで、巫女と魔法使いを見なかったか？」

「それならさっき、変なのと闘っているのを見たわ」

「ありがとう、最強の妖精さん」

「やっぱり、アタイってばさいきよーなのね」

「どこで戦っていたのか聞かないのかい？」

「聞いたところで無駄だろう・・・」

「じゃ、移動しようか」

「オイあれは人影じゃないか?!」

「そしてあの、紅白の巫女服、霊夢だね」

「おい霊・・・む？」

バタンツ

巫女が倒れた

「オイ?!どうした」

「にげ、なさい・・・アンタなんか、が勝てる相手じゃ、ないわよ」

「オイ?! どういうことだよ」

「・・・彩音、構えようか」

ゾワッ

この全身毛が逆立つような感じ、敵、しかも相当強いやつ

「・・・こいよ」

相手が姿を現す

俺の汗が地面に落ちる

恐怖、やられるなこれは、何回も

「・・・あぁっ、お前らも、邪魔をするのか、おれはただ会いたいだけなのに・・・」

また一粒俺の汗が地面に落ちる、そして、懐かしい声を聞き取り、俺の警戒心がほどける

「『TOTOTO』?」

「ああ、会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたいよおッ! 彩音えッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

鼓膜が破けそうになるまで強く叫ぶ、『TOTO』相当狂っている

「彩音、あいつとはお知り合いかい？」

「ああ、そのはずだが、絶対、話合いですむ状態じゃないぜあれは」

「本気で行ったほうがいいのかい？」

「ああ、あいつはたぶん能力もちだ」

「どんなだい？」

「一発人を殴っただけでお星さまにする程度の能力？」

「どんなだよ」

「冗談おれも知らない」

「・・・来るね」

「ああ」

「会いたいよっおおおおおおおおおお」

『TOTO』が殴りかかってくる

作っておいたスペルを発動する時間も与えないくらいに早く

「彩音!!」

瞬間、おれは宙を舞った

「カハッ」

肺の中の空気がすべて外に出ていく

着地は無理だな

「相変わらずのパンチで・・・」

木に激突する

ない肺の中の空気がまた出ていく

そして空気を吸い込むと同時に

「ハハハアッ！」

『TOTO』がおれの呼吸の邪魔をする

木を突き破り飛んでいく俺、このままでは死ぬ・・・

「色盾『闇色黒色！！』」

おれの前方に真っ黒な盾が現れる

「そして俺は死ぬと・・・」

後ろに『TOTO』が待ち構えていた

「前方しかガードできないって知っててか？」

俺の後頭部に強い衝撃が走った

そして、もう一つの懐かしい声が聞こえた

「それまでにしなよ？やめないなら次はあたしが相手だ」

片腕のない鬼が俺の視界に入り、俺のすべての機能が停止した

第47話 狂った友、懐かしき声・・・（後書き）

テストまで一週間！

というわけで、もしかするとテスト勉強のために更新できない日があるかもしれません・・・

ですが、テスト終わったら毎日更新目指しますのでご勘弁を・・・

第48話 鬼と宴会とふつかよい・・・ああ、はきそう・・・

「・・・ハア、また彩音は気絶か・・・」

「相変わらず弱いんだねえ」

「ほんとだよ、後で運ぶほうの身にもなってもらいたいな」

「それにしても、気を突き破ってることくらい助けてあげればよかったじゃないか、変形使って」

「彩音の知り合いだろう？僕が手出しする必要はないと思ってね」

「相変わらず、冷たいねえ」

「まあ、君も助けてあげればよかったじゃないか」

「姿見られたら戦いどころじゃなくなるだろう？」

「ハハッ、そうだね」

「「さて行こうか！」「」

（お前は弱いな、頭に衝撃がはしっただけで死ぬとは）

・・・普通の人間は死ぬもんだろう？つーか誰だお前

（答えるにはまだ早い、いずれわかるであろう、それにお前はただの人間ではなく、不老不死だろう？）

不老不死でも強度は人間と一緒にだ

（何のために修行をしていたのやら）

・・・関係ないやつに言われたくない・・・

（関係なくななどないわ、おや・・・？もう時間がまた会おう）

ちよ、せめて名前だけでも言ってから消えろ

（葵^{あおい}だ）

・・・女だったのか？

（口調は性別を特定されぬように変えていたのじゃ、次回会うときはもっと女っぽくしてやるわ、安心せい）

なんの安心だよ

(じゃあの、彩音)

・・・オウ、葵

(なれなれしいわッ！)

めんどくせえっ!!

「あゝどうなったんだこれ？」

とりあえず、復活でよさそうだな・・・

「まだドンパチやってんのか、おれも参戦しヨッ」

軽いノリで行く、こいつがおれのポリシーさ!!

「ハハハハアアアッ！！！」

「うるさいよ、本当、さっさとくたばってくれないかな？」

「オイオイ闇夜あゝそんな早く終わっちゃ詰まんないだろう？」

「戦いを楽しむ鬼だからそんなことを言えるんだ、僕的にはもう、無理……」

「そんな弱音吐くなんて闇夜らしくないよあゝ？」

……目を見開いてみた

そこにいるのは、狂った『TOTO』、闇夜、片腕のない鬼

「あや……み？」

「あつ、もう起きたのかッ」

「あらあゝばれちゃったねえ」

「ッ、何呑気なことを言っているんだい？逃げるよ！」

「勝手に逃げなよあゝ私はちょっと話させてもらっつよあゝ」

「……どうなっても僕のせいではないからね？」

「私はそんなことしないよあゝ」

……声が出ない、綾見は人里に酒を買いに行っからいなくなっ

たんじゃないのか？

「なんでつて顔してるねえこの戦いが終わったら説明してあげよあゝ」

「わかった、約束だぞ？」

「わかったよあゝ」

「絶対な」

綾見は頷きスペルを取り出した

「速符『落ち葉の舞』」

そう宣言した

「お前スペル持ってたのか」

「いつ、誰に襲われるか分かんないからねえ」

「で？効果は？」

「もうすぐだよあゝ」

「敵がおれに攻撃してくるのも？」

「もうすぐだよあゝ」

あ、やべ、これはあれか？俺が死んだあとに発動するのか？

風を切る音が聞こえる目の前までこぶしが迫ってきている

目を瞑る、ことはしない、今回は諦めない絶対に

「じゃ、発動だねえ」

綾見の周りを落ち葉が囲んでいた

「いけ、彩音を守るんだよ」

落ち葉は『TOTO』に向かって飛んで行く

「・・・これ、よく見たら弾幕じゃね？」

「正解だよ」

綾見の出した落ち葉の形をした弾幕は『TOTO』を直撃、そしてそのあとに第2波が・・・

「いつ2回目宣言した？」

「ん、この弾幕はねえ、速度がバラバラなのさだからねえ、避けにくいんだよ」

「で？直撃したら？」

「片腕は吹っ飛ぶねえ」

「今までありがとう『TOTO』お前のことは忘れない」

・・・すでに直撃してたから、片足はもうない、んで、顔、手、胴体の順に吹っ飛んで行く

「じゃ、帰ろうかあ」

「ああ、にしても、お前、強すぎじゃないか？」

「そんなことないよ」

雑談をしながらその場を後にした、『TOTO』は放置した、どうせ正気に戻ったら俺に

ゲーセン行こうぜツ！

みたいなことを言ってくるから・・・

「・・・会いたかったよ、彩音、ずっと、ずっと」

「・・・口調変わってないか？」

綾見のマイホームって言っても木の上だが・・・に案内され、ついた早々にこんなことを言われた

「もう、会えないと思ってた、しんだ時が最後なんだと思ってた、

でもまた会えた、こうして抱き締めることができた・・・こんな幸せはもうないよ・・・」

この言葉からわかるように俺は抱きしめられている、柔らかいものが二つ背中に当たっているが、気にしたら負けだ、絶対に気にしない・・・

「そうだな、どういうわけか知らんけど、また会えた、こうして話し合えた、よかったよ、お前に会えて」

「・・・もう、死なないでね？私の前からいなくならないでね？またあんなことになったら私はもう、もう・・・」

綾見はおれの背中で泣き出してしまった、おれも泣きそうなのだが、耐える、もう、こいつを心配させたくない・・・

「大丈夫だ、俺はもう、いなくならない、それより、ばれたらやばい理由ってなんだったんだ？教えてくれよ」

「それは・・・」

「それは？」

「私が人里に行って帰ってこないって聞かされてるんだよね？」

「そうだ」

「・・・まあ普通に言っちゃえばそのとおりなんだけど、私がいなくなっただのはいつごろか知ってる？」

「さあ？」

「彩音がいなくなつてからすぐだよ、気を紛らわすために酒を飲もうと買いに行つたんだ、そしたら」

「そしたら？」

「花を踏んじやつて・・・」

花、だと？！

「近くにいた、フラワーマスターに拉致されて・・・」

「・・・」

「『フフフツあなたは名を踏むとは言い度胸してるじゃない、その角もぎ取つて、花の肥料にしてやろうかしら？！』って言われて、逃げて、逃げて、逃げ続けて3千里」

・・・え？母をたずねて3千里？え？まさかのギャグ？

「・・・・・・・・・・で今に至るつてわけさ」

・・・あああああつやべえ、聞いてなかった

「ああ、そりゃあ、大変だったな」

「わかつてくれたのかい？！さすが彩音だ！よし今夜は飲み明かそう！ー！」

「ヤヴエ、地雷踏んだ」

「なんか言ったかい？」

「いやあ、別に」

結局飲まれた・・・次の日一日酔いでreverseしたのは内緒の話・・・

第48話 鬼と宴会とふつかよい・・・ああ、はきそう・・・（後書き）

やったね、勉強しないで更新だ！ww

まあ、どういうわけか、綾見復活です

最後に妹紅ですが・・・

おそらく永夜抄で登場ですね、まだ妖々夢も終わってないので先です・・・

第49話 平和が1番

前回のあらすじ、綾見に抱きしめられてときめいた

現在の状況、闇夜とおしゃべり中!!

「突然ですが闇夜君、虹って何色が知ってるかい？」

「七色が一般的じゃないかい？」

・・・くだらないって目をしてます、こいつ、いつからおれより態度上になっただんだ？

ああ、最初からか・・・

「・・・チツ、正解ですよ・・・」

「オイ！待て、今舌打ちしただろう？」

「ハア？何のことやら」

喧嘩を売ってみる、ちなみに勝敗は五分五分まで持ち込めるようになった

「まあ、とりあえず次行くぜ、虹色は何色が、何色が入っているか、七色すべて一度もかまずに言い切れ」

「赤、橙、黄、緑、青、藍、紫」

言い切った、普通詰まるところを、スラスラと?!

「お前、つまらないわ・・・」

「・・・君は僕に何を求めているんだい?」

「・・・俺がさ、再びこの世界に来てから、夏を経験して、今は秋、虹つてのは、雨が降った後にかかるものだろう? だけど、このままいったら、雪が降る・・・虹が見れないんだよッ!」

「・・・それと僕にしてきた質問には何の関係性が? あと求めているものについて」

「さーてと、今日は誰とじゃれ合おうかな」

「ああ、特に関係性はないと、あと求めているものについて」

「求めているものは『愛』ただそれだけ」

無言で弾幕を作っています、これは死亡フラグたってますね

「それじゃ、じゃれ合ってくるから!!」

その場を急ぎ足で立ち去る

途中後ろから木が何本かなぎ倒される音が聞こえたが、俺は関係ない、俺は断じて関係ない

「どこに行こうか・・・」

勢いで飛びだしたから、行くあてもない

「・・・そうだ！神社に行こう！！お賽銭を持って！！！！お茶くらいは出るはずだ」

決断したら速攻でやる、これが人生を損しない一番の方法

- - - 博麗神社 - - -

「到着つと」

見渡す限りの落ち葉、箒を持ちながらイラついている巫女、煎餅片手に呑気に茶を飲む魔法使い、ありふれた光景だ

「よお！霊夢、魔理沙」

二人の名前を呼ぶ

巫女は聞こえているだろうが無視をし、魔理沙はこちらに手を振っている

俺は礼儀として魔理沙に手を振り返す

すると魔理沙はガッツポーズをしてくる、なぜにこのタイミングで

そして俺は無視した巫女に一言

「オイ！霊夢！客が来てやったのに無反応はないと思っぞ？」

「誰も来たなんて頼んだ覚えはないわよ」

・・・ムッつときたので賽銭箱に持ってきたお賽銭を入れる

するとあら不思議俺を無視した巫女が

「ようこそ、博麗神社へ」

満面の笑みで俺に告げる

「あい、お邪魔しますっ」と

縁側に勝手に座る、霊夢はお茶を取りにどこかへ消えた

フウと息をつきながら、微妙に枯れかかった葉を眺めていると魔理沙が

「毎回お寶銭を入れてたら金がなくなっちまうぜ？」

と、聞いてくる

その問いに俺は

「別に俺の金じゃないからいいんだよ」

魔理沙は首をかしげる

「俺の金は闇夜から奪った金だ、真剣勝負で勝つてな」

「ああ、なるほど、それなら納得いくぜ」

「何話してるのよ、ハイお茶」

霊夢がいつの間にかお茶を持ちながら俺の後ろ立っていた、そしてお茶を渡してくる

「ああ、ど、どうも」

若干動揺しながら受け取る

「あつっうつうつー!!」

受け取ったお茶がやけどしそうなくらい熱かった

「今の時期冷えるでしょ？やっぱり縁側で飲むお茶は熱いのがいいのよ」

と霊夢が一言

「お前、なんか年寄りみたいなこと言うんだな・・・」

「飲まないなら返してもらって結構よ？」

「いただきます」

即答で返す、もらったものは返さない絶対に

「そう、ならいいわ」

言いながら霊夢はもうひとつ、自分用のお茶をすすする

「それにしても平和ねえ」

「そうだな」

「平和だぜ」

俺と魔理沙が返す

霊夢はまたお茶をすすする

俺も頑張ってお茶をすすする

「ッア」

言葉に出ない・・・熱い、舌が・・・

「フウ・・・慣れれば大したことないわよ、こんなもの」

「そう、慣れだぜ」

「・・・慣れかぁ」

慣れねえゝそうか慣れかぁゝ

お茶をすする・・・

「なあ、霊夢今日はおれと魔理沙以外に客はいないのか？」

「んゝ今くるわよ、厄介な馬鹿が」

「馬鹿？」

「そう、馬鹿よ」

フーム・・・馬鹿か・・・

「ああ！なるほどチルによぁ？！」

何か俺の頭にぶつかった

「氷？」

「そつだ！アタイが蛙を凍らせて作ったんだ！すごいだろぉ！さい

きょーだろお！！」

「・・・排除していいのか？」

「ぜひ、お願いするわ」

「頼んだぜ」

そうして、俺VS？の戦いは始まった

そして、これが後の・・・につながるのであった

第49話 平和が1番（後書き）

昨日PCの調子が悪くて更新できませんでした

・・・しっかりしろよ相棒！！

第50話 そうして戦いは始まった

ぜんかいのあらすじ！

・・・どうして作者は急にあらすじを入れ始めたんだろうね？馬鹿だからかな？

「はいっーわけで、今日お前らを集めた理由はほかでもない、今季節は、秋だ！」

お前らとは、綾見と闇夜のことである

「そうだねえ」

「だからどうしたんだい？」

そして二人が当たり前のことに對し頷く

「そう！秋だ！！そして冬になれば、みんな楽しみゆきがっせ「子供か」グアッ」

闇夜に突っ込まれる、痛いところついてくるよこいつはほんと・・・

「おお！雪合戦かぁ〜いいねえ〜新鮮だねえ〜」

綾見が言う、どうせなら俺が、雪っていった時点で気づきその言葉を言っただけだった・・・

「そう、雪合戦だ、戦争だ!!」

説明しよう！雪合戦とはかの有名な軍人、彩音将軍が敵チームの戦車に雪玉をぶつけたことから始まったのだ!!

「嘘をつくな」

「なぜに心が読めるのだ!!お主やるな!!」

「ねえねえ！将軍ってのは無理があると思うよぉ？」

ああ、そういうええ見ればわかるが前々回綾見と二人きりで話したとき『ねえ！』の口調が外れていたが今は外れていない

「おれだけの特別か？」

「ハイ！気持ち悪い死ね」

うお！声に出たのかそして死ねって闇夜相変わらずひどいな

「まあ、雪合戦はいつやるんだい？」

「参加する気満々か」

「悪いかい？君を痛めつけることができると思つとぞくぞくするよ」

「ああ、ごめん俺と闇夜と綾見同じチームだから」

「おおーやったねえー共闘できるんだねえー」

・・・素直にうれしい暗夜がツンデレな分綾見が素直でやさしい、昔と性格違っけどそれもそれでまた良い

「えーと雪が降ってから3日後」

「・・・雪が降るのは今日だよ？」

「え？マジデ？」

「ていうかあーもう降ってるよねえー」

綾見の言葉に俺は空を見上げる

空から小さな雪が黙々と降っている

「よし！俺が知ってるやつはー」

霊夢、魔理沙、チルノ、大妖精、レミリアにー咲夜、パチュリーに
中国と

「よし、闇夜、紅魔館な」

「何をしに行くんだい？」

「雪合戦誘いに」

「わかった、どうせ断っても行かされるんだろっ？」

「物分かりがいいね、じゃ！いつてらっしゃい」

「はあゝめんどくさい」

闇夜は愚痴を言いながらも飛んでいく、口は悪いけど根はいい子

「さて俺らは神社行こうか」

「そうだねえゝ」

アレ？延びてる語尾が延びてるよ

「なあ、綾見語尾が伸びない時って何？」

「・・・彩音に甘えられる時だよ（？）」

「・・・（？）が気になる」

「まあ、のんびり行こうかゝ」

「そうだねえゝあつ、甘えさせてくれる？」

「ああ、そうだな、特別に」

おれたちの会話を静かに雪が静かに無に帰す

俺たちの長い戦いはこうしてはじまるのであった

第50話 そうして戦いは始まった (後書き)

本日に短めです

次の更新は遅ければ水曜日早ければ気まぐれで行きます

第51話　そうして戦いの準備は始まった

前回のあらすじ！

闇夜は紅魔館へ、彩音と綾見は博麗神社へ、以上！！

――博麗神社、道中――

「あのさあ、『TOTO』はどうなったのか知ってる？」

綾見に尋ねてみた

「ええ？誰それ？」

ああ、そういえば、名前知らないのか

「えーと、狂ってた、人間・・・わかる？」

「ああ、思い出したよ、あれだね？私が片足とか吹き飛ばしたやつだろ？」

「そうそう、ってあれ？」

そういえば、俺を助けてくれたとき、吹き飛ばしてたねえ」

「あいつ、能力もちだけど、たぶん、戻らないよね」

「ええ?! 戻ると思ってやったのに?!」

まさかの予想外! やばいね、あいつ、うまくいけば俺らのチームに引きずれ込めたのに

「まあ、気にしたら負けだよね」

「そうだね(?)」

「ねえ、待って(?) っているの?」

聞いてみなくちゃね、一応

「甘えてる証拠だろう?」

「闇夜にはやらないのか」

「やるわけないだろう? 特別じゃなくなっちゃっただろう?」

「そうですね・・・」

――博麗神社――

とりあえず、メンバー紹介

俺、綾見、霊夢、魔理沙、？↑なぜいるし

まあこんな感じで行きますぜ

「つーわけで雪合戦やらない？」

「断るわ」

霊夢さんが即答って、ひでえ

「私はやるぜ！面白そうだぜ！！」

魔理沙が一言、流石

「アタイの本気を見せてやるわ」

？も一言冬の氷精おそろしや・・・

「・・・じゃあ、3日後、ここ（博麗神社）で」

「ちょっと！何でここなのよ！！」

「ほかにやる場所がないからに決まってるだろっ？」

「・・・覚えてなさいよ」

殺意がこもりすぎた声で霊夢が・・・巫女の言っていることかそれ？

「じゃあ！ヨロシク」

「よろしくねえ」

そう言い残し博麗神社を後にする

・・・闇夜は無事かな？

- - - s i d e 闇夜、紅魔館 - - -

「と、いうわけで、雪合戦をやらないかい？」

「あなた！お嬢様がそんなことをすると思って？」

「まあ、まあ落ち着きなさい咲夜」

ハア・・・なんで僕がこんなことを、彩音が自分できて、言えはいものを

「で、闇夜だったかしら？」

「そうだよ」

「面白そうだから言ってあげるわ」

「お嬢様!」

「正氣かい？」

「私はいつだって正氣よ、で、日にちはいつかしら？」

「3日後だそうだ」

「そう、じゃ、帰っていいわよ」

「お茶も出してもらってないのかい？」

「図々しいわね、さっさと帰りなさい」

「じゃ、失礼するね」

「咲夜、見送ってきなさい」

「・・・わかりましたお嬢様」

見送りなんてものがあるんだね、ここにも

「行くわよ、ついてついてきなさい」

「言葉がきついよ、メイドさん」

「・・・ナイフ刺すわよ？」

「笑えないね」

そうして、僕は無事に帰ることができたとき・・・

・・・魔法の森・・・

「乙！そして、成仏しろ幽霊が！！」

「お疲れ」

「はあ、相変わらずひどいことを言うね君は、あと、ただいま」

「おれにもなんか言っとけよ」

「君が成仏しろ」

「ヒドイッ！」

と、言うわけで闇夜が帰ってきました

第51話 そうして戦いの準備は始まった (後書き)

次の更新は火曜or水曜です

第52話 そうして戦いの前の練習的なものは始まった (前書き)

初の4000字越え！

少なッ
ww
ww

第52話 そうして戦いの前の練習的なものは始まった

前回までのあらすじ！

（彩音）雪合戦やらない？

（闇、綾、魔、？、レ、咲）いーよ

（霊）いやよ

「どうだった？紅魔は？」

「そちらこそどうなったんだい？」

質問したら質問返し、これ、俺の嫌いなタイプだ、おれの前でこういうことをいう奴はなぜか皆お星さまになった

「まあ、俺らは一応成功だよな？綾見」

「うおっつ、いきなり私に振るのか！寝てたのに！半分寝てたのにッ！ー！」

寝るのはえゝよ、ていうか、ここで寝たら、死なない？！っていう突っ込みは心の中にとどめておこう

「こっちは、レミリアとメイド長が参加の意思を見せたよ」

「え？門番と魔法使いは？」

「あ、忘れてた」

こいつ、後でお仕置きだな

「とりあえずさあゝ雪合戦の練習しないのおゝ？」

「「殺ろつかゝ」」

「お前ら、こわいよおゝ？」

「死ねよ！闇夜」

「君こそ！死ね！」

言葉にすると同時に二人とも雪玉を投げる

「ぐあっ」

「にゃあ」

そして両方ともヒット

「お前えゝかわいい声出すんだなゝ」

「悪いけど、今は僕の声じゃないよ」

「じゃあ誰の？」

闇夜の横を見る、そこには蹲っている綾見が

「謝りなよ」

「ゴメンナサイ、ボクガワルカッタヨ、ユルシテネ」

「彩音えゝゆるさいないよおゝ」

ゴゴゴゴゴゴッ、って感じの効果音が似合いそうなオーラを発する綾見

腹を抱えて笑う闇夜

冷汗が止まらない俺

大爆笑

・・・なんか危険を感じたので後ろを向いてみると

首があり得ない方向に曲がってる闇夜の姿が

「あひゃひゃひゃひゃっ」

吹いた

すると

ギギギギギッ

ゆっくり、とてもゆっくり闇夜の首が前に向いてくる

「ひゃひゃひゃ、ひゃっ？」

俺に襲い掛かってくる、綾見はなぜかスペルカードを持って構えている

「変形、彩音の周りの雲を鋸に」

前に？に使った技だ

「ウワアオオオオオオオッオオ」

彩音が逃げる、走る走る

闇夜が追いかける、追いかける

綾見が笑う、笑う

「ちくしょおおお」

刺さった、そういえば、作者もこの前、左手の人差し指に鋸刺さってたなあ

あゝ意識持って行かれそう

（・・・また来るのか？もう、勘弁してほしいんだけど？）

誰だ！姿を現せ

（オイオイもう忘れたのか？この間会ったばかりだろう？）

・・・え？誰？

（私だ、葵だ）

葵かぁ〜口調変わったから全然わからなかった

（今度会つときは口調を変えるって言っておいたはずだが？）

忘れてた

（もう、でてけ、出てったら、目が覚めるから）

オウ！じゃあな葵

（気安く呼ぶなアツ！！！！）

やっぱりめんどくせえ！！

「おやおやぁ今回は起きるのが早いんだね、フッフッ」

闇夜がユラユラと揺れながら話しかけてくる

「オーイ綾見、こいつ止めてくれ」

とりあえずヘルプを呼ぶ

「ぎゃ、くに、こつちが、止めて、もらいたいよぉ」

傷だらけの綾見がいた

「オイオイ！闇夜ぁ！俺を傷つけるのはまだしも、女の子（綾見）を傷つけるのはどうかと思っぜ？」

「君も、もうすぐあなるから安心しなよ」

「人の話を無視してんじゃねえよ」

普段温厚な俺でも、仲間が傷つけられたら怒る、まあ、あたりまえだが

「行くぜこのやろおおッ」

「一寸待てよ、彩音！俺と闘いたくはないか？久しぶりに」

懐かしい声がした、その声に反応し

「誰だ？」

そこには、片足を吹き飛ばされて、無残に綾見に敗北したはずの『TOTO』がいた

「お前、どうして、ここに」

「雪合戦とか面白そうなことをやるならマズ俺を混ぜろ」

「いや、だからどうしてここに」

「わかったか？」

「いや、どうしてここ「わかったか？」はい……」

何こいつ、こんなプレッシャー持ってたんだ……

「一寸待ちなよ、2対1かい？それじゃあ、僕が不利だろう？」

そんなことを言いながら、闇夜は何かを取り出した

「テレテッテター『スペル、木の魔人、ウッドモンスター』」

手が気になる、手の先が丸くなって、手首の下青いつてコレ

「ドラエモ（殴）」

「お前、ここで、それ言っているのか？アウトだろ！判断くらい、できるようになれよお前馬鹿か？死ねよ」

『TOTO』の突っ込みがひどい

「綾見助けて」

「うっ、うっ」

泣いてるよ、なぜに

「闇夜あゝなんかそんな変なもの片づけて、私と一緒に戦おうよお」

「よし！『TOTO』、マジで敗北って物を味あわせてやるつか」

「えゝ、めんどくせえゝ」

さっきの気力はどうなった！おまえ！！

「くそお！かかってこい！お前ら！！」

吹っ切れた、なんかもう吹っ切れた、俺一人でも行けるような気がする

（オイオイ無謀すぎるぜ、彩音）

え？なぜに？おれ気絶してないよね？死んでないよね？

（いや、しょうがないから、加勢しに来てあげたんだよ感謝しな、私は強いよ）

よし、ならたのむ

（じゃ、今から行くよ）

フアアアアア

神秘的な光がその場を包む

光がやむと、そこには、蒼い着物をまとい、蒼い刀を持ち、蒼く長い髪を靡かせた、スタイル抜群の女性が立っていた

「誰だい？彩音、スペルカードかなにかかい？」

「私は彩音だあ！くうー久しぶりの外だあー！！気持ちいい！！」

伸び伸びと体を伸ばしながらずっと閉じ込められていたみたいな、
言い方をする

って・・・何やら、誤解を招くような言い方をしているぞこいつは

「オイ！どういうことだお前！、お前が彩音だと？彩音は俺だ！」

「フム、焦った表情、笑えるな」

ハハハハッと葵は笑い声をあげる

「まあ、どうでもいいさ、とりあえず、死のうか？」

闇夜が弾幕を放ってくる

「フム、遅いな、こんなもの、赤子でもよけるぞ？」

ハイ、葵が避けましたね、ああ、俺に向かってくるよ

ドオオオオオオオン

右腕吹き飛んだよ？！

「今のに当たるとは、お前は赤子以下か？！」

葵がおれにきつい一言

「いやいや、無理に決まってるだろう、お前がいきなり避けるからだろう?！」

「まあまあ、仲間同士でけんかなんてみぐるしいよぉ」

「仲間同士って、仲間に見えるか?！」

「強化『電光石火』」

綾見が葵に向ってもものすごいスピードで迫ってくる

「遅いな、赤子でもかわせるわ」

そついい、身軽な動きでかわす

「またかぁっっ!!！」

もろに突進を喰らう

「オイオイ、またか、先も言ったように赤子でもかわせるぞ?お前は赤子以下か」

「うつさい、もう、お前かわすなよ、お前がかわすと俺に当たるんだよッ!!！」

「うるさいなあ、いいだろう、かわす位」

「よくないんだよぉ!！」

「口げんかしてる暇があったら攻撃したらどうだい？」

「フム、なら行こうか」

葵は刀を抜いた

「って一寸待て、刀で攻撃するつもりか？！」

「いや、すべるカード、とやらを使っただろう？」

なんだこいつもわかってるのか・・・

「さて、それでは遠慮なく」

「あ、でもすべるカード、もってないや」

「「なら死ぬといいさ」」

なんか2人して弾幕放ってきてる

「よし、私は刀を使うぞ」

「ちょ、無闇に人を傷つけるもんじゃない」

まあ、人じゃないが

「まあまあ、こうやって、殺そうとしてくるんだから、別に傷つけたっていいんじゃない？」

「『TOTO』まだいたのか」

「ひでえな！オイいゝ」

「いや、気付かなかったもんはしょうがない」

「しょうがなくねえよ！！」

『TOTO』に突っ込みを入れられるという、懐かしい状況、この世界に来てからは、こんなこと2度ないと思っていたのに・・・

「オイ！お前ら！いつまでそうして話しているのだ！もう終わったぞ！！」

葵がおれたちに話しかける

「終わったって何が？」

「戦いに決まっているだろう？圧勝だったぞ」

・・・え？闇夜と綾見に対し圧勝って、なに？チート？

「まあ、最初に行ったであろう、『私は強い』とな」

豊満な胸を張って一言、『TOTO』が鼻血を噴き出しているのは・・・後で殴ろう

「ハア・・・あれに勝てるのはいないと思うよ、最強ってやつだよ」

闇夜が弱音を

「私をもつ、勝てる気がしないよぉ、鬼としてのプライドがぁ」
綾見まで弱音を

「一寸いいか葵？」

「なんだ？私のスリーサイズでも聞きたいのか？」

「違えよ」

『TOTO』がぜひ！ぜひッ！！とほざいていたが、気にしない、
後で5〜6発殴るだけだ

「お前、どんな裏ワザ使ったんだよ、あの二人の相手して勝つって」

「フ、私の戦いをよく見て、技のレパートリーを増やせばいいの
に・・・」

なんか悔しい、俺が負けたみたいだよ

「さてと、僕は罰ゲームとして、雪合戦に紅魔館の門番と魔法使い
でも誘ってくるかな」

「・・・いや、司書とフランも誘って来いよ」

なんか、仲間外れを使ってるぞ、こいつ

「綾見はどうすんだ？」

「ん、私は寝るよぉ、彩音も来るかい？」

『TOTO』がおれが行く俺が行くってうるさいから逝かせてやった

「ムゝどうすつか、俺も、いこつかな」

「おつけえゝ！じゃあ、行こうかあゝ！」

「ああ、葵と『TOTO』はどうすんだ？」

「一応聞いとく」

「私は彩音の中に戻るよ、ここにいすぎて、力失うのも嫌だからね」

「そうか、でも、俺の中戻っても、俺には何の得もないんだろう？」

「あたりまえじゃないか」

「・・・なんか、平仮名で返された、うぜえ」

「『TOTO』は・・・OKそこで死んでるんだな？」

「・・・」

返事がないただのシカヴァネようだ

「よし、じゃあ行こうか」

「ああ、そうだな、ゆっくり寝させてくれよ？」

「私はけだものじゃないよゝ鬼だけど」

まあ、そうだな、と話しながら雪道を進む、雪はおれたちを静かに包み込む、虫たちや紫は眠り、花は咲き誇るのをただひたすらと待つ、この静かなるこの空間に、俺たちの笑い声、鳴き声、そしてとなり声が聞こえる日は、もう少し先だ

・・・雪合戦まであと3日・・・

第52話 そうして戦いの前の練習的なものは始まった（後書き）

初めての予約掲載になります、何の意味もないけれど

まあ、今回は結果的には、無意味な戦いとなります、雪合戦の練習もしてないし・・・

第53話 そうして彩音VS綾見戦は始まった

前回のあらすじ！

綾見のマイホームでお休み中zzzz・・・

チュンチュンと小鳥が囀り、心地のいい朝日に照らされ、俺は眼を覚ます

「んっ、ふああゝゝっ」

大きな欠伸を一つ、次に意識を覚醒させるべく、思いっきり体を伸ばす、ポキポキと骨が鳴りいい感じに意識が覚醒していく

「・・・おはよう、ございます」

やはり意識が覚醒していないのか意味不明な独り言を口にする、まあ隣に綾見がいるだろうと思い横を見る

「・・・え？」

居ない、誰もいない、確かに俺も綾見一緒に布団に入ったはずだが・・・

「おお、お早う！よく寝れたかい？」

元気な声が朝の空に響く、その声に反応し、声のする方角を向くとエプロン姿の綾見がいた

そして、純粋な高校男子の俺は色々なことを考える、もしかして裸エプロン？、なんか夫婦みたいだな、このまま抱きつかれたり・・・

「ねえ、変なこと考えてない？」

暗い声で、俺に話しかける、見抜かれてる、『流石』と言ったところか？・・・誰にでもわかるか？などと思っていると

「まあ、朝ごはんできてるから一緒に食べようよ、あ、酒とかは出ないから安心してね」

などとさつきとは取って代わり明るい声で話しかけてくる、綾見が、こっちだよーなどと誘導しているので、重い体を起こし綾見についていく

・・・歩くこと約3分・・・

「さあ！これが今日の朝ごはんさ」

机の上にある、朝ごはんに目を向ける

「食パンの上に目玉焼き、一般的だ」

そう、一般的すぎるのだ、こんなものを鬼が食べるのか？などと疑問に思うほど

「まあね、私も朝は重たいもの食べるほど元気じゃないからね」

俺が今まで見てきた中で一番元気なのだが・・・

「まあ、食べようよ、冷めたらおいしくなくなっちゃうよ？」

「そうだな」

俺は食パンを口に運ぶ、そして感想を一言

「・・・うまい、普通にうまい、なんか苛立つ」

「そう、それはよかったよ・・・って、え？苛立つって何？！」

焦りながら綾見は返す、そんな楽しい楽しい朝食は食べ終わるのに綾見は2〜3分、俺は5〜6分という、何とも言えない結果になった、鬼って食べるのはやいつてことを知った

「さて、じゃ、食後の運動だね」

「・・・そういえば今日は（？）はないんだな」

危険な予感がしたので話を逸らす

「うん、だって、甘えられる日じゃないもん」

そうして、雪合戦の練習は始まった・・・

「そおれっ!」

綾見が思いつきり雪玉を投げる

最初は人間の大人が投げる程度のスピードだったが綾見の能力により、とてつもないスピードになる

「うわああああい!」

半分投げやりになりながらもかわす

ズドオオオンと音をたて、俺の後ろにあつた木が次々となぎ倒される

「うん、じゃ、今日のルールは相手に先に雪玉を3回あてたほうの勝ちね」

ならばさっさと終わらせてしまおう、と俺はあらかじめ作って置い

た雪玉、大体30個を狂ったように投げつける

「うーん、逃げ場をなくすっていう作戦はいいけどスピードが問題だね」

適当に投げたから作戦も何もないのだが・・・

「じゃ、次は私の番ね」

来てほしくもない綾見の番が来る、とりあえず逃げよう、そう思い、全速力でまわれ右&ダッシュをする

「逃げられると思ったあ？」

綾見がいた雪玉を3構えて

バシッ、バシン、ドゴオオオオオオオオン

「よし私の勝ちだね」

綾見はそう高らかに宣言する

「くそ、やろっ、めえ・・・」

俺は綾見の最後の一発、（あからさまに音が違ったあれ）に吹き飛ばされ、木に突き刺さる

そうして、彩音と綾見の今日の練習は終了した

第53話 そうして彩音VS綾見戦は始まった（後書き）

今回はいろいろと試行錯誤をしてみましたが残念なことにPCの調子が・・・

なんか中途半端になってますが、堪忍のお・・・

第54話 VS 妖怪の群れ（前）

前回までのあらすじ

彩音君敗北？

・・・何処だ、ここ・・・

体が・・・重い

声は何重にも聞こえる・・・

あれ？声出てるのか？・・・

なんでこんなに体が痛いんだ？・・・

どうして手足の感覚がないんだ？・・・

どうして自分の無力さを呪っているんだ？・・・

どうして、どうしてこんなに

悲しいんだ？

「ッア！！」

・・・体が木に突き刺さっている、なんでだ？

ああ、思い出した、綾見に思いっきり雪玉ぶつけられたんだ

・・・なんだろうな、なんか、涙が溢れてきた・・・

なぜだろう、今、この瞬間に動かないと後悔する気がする、なんでだろうな？

どこに動けばいいんだろう、誰に会えばいいんだろう、何をしても
らえばいいんだろう

なんで後悔するんだろう

「・・・考えるのは後か・・・」

俺はとりあえず人里に向け歩みを進める

- - - 人里 - - -

「あれ？俺何しに来たんだよ」

気が動転してたと言いつつない・・・

「・・・にしても、賑わってるなここは」

人の数が尋常じゃない、今にも押し倒されそう・・・

「いだあ?!」

押し倒された

「なんなんだよ、くそお・・・」

押し倒した奴に一発蹴りいれてやる、と思いながらあたりを見回すと

「何かから逃げてる?」

皆、我先に、といった感じで安全地帯を確保しようとしている

「・・・これは、霊夢や魔理沙が来るのを待ったほうがいいのか？
それとも」

俺がやるべきか・・・

どれだけ強い相手でも、不老不死の俺なら価値に持ち越せる、最も
おれがダウンしなければだが・・・

「なあ、葵出てきてくれないか？」

助けを呼んでみる

「俺一人じゃもしものがあつたら、まあ、守護者がいるのだろ
うが、もし来ていなかったら、俺だけじゃ、時間稼ぎにすらならな
いかもしれない、だから、来てくれよ、葵！！」

（時間稼ぎにもならない？1秒でも稼げたらそれで十分だろう、私
はお前が死んだらでるよ、私に頼っていては、経験が積めない、ま
あ、頑張るんだな）

「・・・そうか、わかった、なら闇夜と綾見に助けを・・・」

（そんな時間があるのか？見る、人間が襲われているぞ）

どこを指差しているのか、指をさしていないかもしれないが、人が
全くいないほうを見てみる、そこにいたのは、妖怪といまにも食べ
られそうになっている、人間の姿が

「くっそおっ！！！」

俺は全速力で走る、救える命を救うために

「間に合え、間に合えッ！！」

叫ぶ、もう、人が死ぬのは見たくないから

「焦ったところで、何も始まらない、まずは、武器を出すことから

始めようか、彩音君」

誰かの声がした、そして、妖怪の腕が一本すっ飛んだ

「『TOTO』?!」

「まあまあ、救援に俺を呼ぶのを忘れてたのは怒らないから落ち着いて、妖怪を倒そうぜ」

妖怪に目を向けると仲間を呼び、完璧な戦闘態勢をとっていた

「さて、それでは、俺達初の共闘、行きますかあゝ!!」

そう言つて、『TOTO』は妖怪の群れに突っ込んでいった

俺も『TOTO』に習い妖怪の群れに突っ込む

（フツ、まあ、頑張ることだな、死んだら私がかわりに出てやるから）

・・・葵はこうなることがわかっていたのかもしれない、そんなことを思いながら、俺達は妖怪を倒していく

・・・援軍が来ることを信じて・・・

第54話 VS妖怪の群れ（前） （後書き）

きりの悪い終わり方ですが続きは明日で

第55話 VS妖怪の群れ（後）

前回までのあらすじ

アレ？練習しないの？戦いなの？作者頭おかしいの？テストで全部平均点行っていないのが悲しいの？

「ったく、こいつら、何体いるんだよッ！！」

つい愚痴をこぼしてしまう

すると『TOTO』が

「まあまあ、守護者もそのうち来るだろうから耐えようぜ」

励ましの言葉をくれる、『TOTO』のこういうところが好きだったりする・・・

「じゃ、もし死んだらお前のせいだからな」

「いいさ、別に、そんなときや、俺も死ぬから」

「そっか、あんがとな」

パチン！と頬を両手で叩き気合いを入れる

「よっさ！がんばりましょうか！」

「なんか今は言葉遣いがきれいだな、ずっとそのままでもいいこうぜ」

「わりい、それは体に悪い」

そう言いながら、弾幕を放つ、妖怪にヒットし何対か数が減る、様な気がする

「なあ、『TOTO』こいつら数増えてないか？」

「今更か、気づくの遅い、鈍い」

「いや、お前のほうが鈍い」

「まあ、守護者来たみたいだぜ、」

『TOTO』が指をさす方を見る

そこには結構なスピードでこちらに走ってくる女性の姿が見えた

あれは、たしか、慧音だったっけ？

「まあ、これでおれたたちの努力は報われるってことか？」

「よく頑張ったな彩音、俺が教えることはもう何もない」

「お前を師匠にした覚えはない」

なんて話していると、『TOTO』の後ろに妖怪の腕が

「『TOTO』！よけろおッ！！」

何を言っている？俺はこの距離で回避できる奴なんているか？無理だな、こんなの

俺が悲しかったのはこのせいなのか？

いや違う、体が痛くない

手足は誰の何だ？

どうして俺は・・・

（ボーッとするな！前を見るッ！）

葵の声を聞き現実に連れ戻され、指示どおり前を見ると

『TOTO』を襲おうとした妖怪の腕を持っている、人里の守護者と俺を喰らおうとしていた、妖怪を燃やしている、真紅色の翼をもった、赤いもんぺ姿の少女が

「も、妹紅?!」

「お久しぶりです、彩音さん」

妹紅がそこにいた・・・

「彩音さん、こいつらは、私達で倒すので、休んでいてください」

「あ、ああ・・・」

・・・動揺しているな俺、しっかりしろ、みんな生きてるんだ、幸せじゃないか

「よし慧音、さつさと終わらせて煎餅でも食べようぜ」

「倒してから言え」

「そうですかと」

慧音も妹紅も軽いステップで妖怪の攻撃をかわす

「結構な数だな、お前たちはどのくらい倒したんだ?」

慧音が攻撃をかわしながら聞いてくる

「20?」

「いや25だろ」

俺の答えにケチをつけるなんて、『TOTO』め・・・殴るぞ?

「ってことは、適当に燃やせば済む数かな?」

「民家を燃やすなよ?」

「そんなへましないよ」

そついい、妹紅は両手に炎を作り出し、妖怪にぶつける、炎をの燃えうつった妖怪は別の妖怪に接触し、次々ともえうつっていく、最終的には、妖怪の群れは塵になった

「フウ、じゃ、慧音煎餅を」

「持ち歩いているわけないだろう! まあ、頑張ったんだ、買ってくるから待ってる」

慧音は人里に方に走って行った

「・・・なあ、お前らどういう関係?」

『TOTO』が空気を読まない質問をする、普通は、おつかれー的な空気だろ

「どういう関係って、何が知りたいんだよおまえは、おれは何も言わないからな?」

「・・・ああ、OK恋人なのか」

「燃やすぞてめえ」

「すみませんでした」

「以上！妹紅と馬鹿（『TOTO』）のコントでした」

「彩音さん、燃やしますよ？」

「塵になれ、彩音！！」

「お前がなッ！『TOTO』！！」

「燃やすの私なんだけど・・・」

こうして、俺達の雑談は続いた

慧音が煎餅お買ってきたあと、俺達は慧音の家に招かれ、お泊りという感じになった

・・・雪合戦まであと2日・・・

第55話 VS妖怪の群れ（後） （後書き）

ニコニコ見ながら書いたらものすごく遅くなった・・・

と、いうわけで、妹紅&慧音でしたねww

第56話 もこたんと人里で

前回までのあらすじ

妹紅&慧音くそ強いな・・・あれ？でも戦ってたの妹紅だけだった
ような・・・

小鳥が囀り、トントントン、と包丁とまな板が合わさる音がする

その心地いい音で目を覚ますとそこは見知らぬ、天井、壁床、布団

「なにがあつた？」

昨日のことを思い出せずに一言、その声に反応した者が一人、俺に
挨拶を

「おはようございます、彩音さん」

「ああ、おはよう」

反射的に答える

「朝から声が間抜けですね、いつ敵に襲われるかわからないんです
から」

「ああ、思い出した」

目をこすりながら呟く

「なにがですか？」

「なんでもない、ついかさっきから料理してる音が聞こえてるんだけど何？」

「慧音が料理してるんですよ」

「なぐるへーそ」

「じゃ、食べに行きましょうか、朝ごはん」

「そうだな」

「おはよう！昨日はお疲れ様！！」

慧音が包丁を持ちながら挨拶をしてくる

「おはよう、慧音、手伝おうか？」

「いや、いいさ客人なんだからゆっくりしていてくれ」

「おはようございます」

「オイ！返事が小さいぞ彩音！！」

なんだ？なぜ怒られる？

「まったく、これだから最近の若者は・・・」

「あんたも見た目若いけどな」

「なっ／＼／」

「ちよつ、彩音さん」

・・・一寸からかったらこれだ、女の反応は楽しいな

「まあまあ、冗談だって、いや、でも見た目若いのは本当だぜ？」

あれ？これ、何が冗談なの？もろ矛盾してんじゃん

「はあ、もう、からかうなあゝッ！！」

顔を真っ赤に染めた慧音さん、あらまあ、かわいらしいのなんの

「ゴホン・・・さつさと朝ごはんにするぞ」

仕切り直しの咳ばらいをした慧音・・・顔はほんのりピンク色だな・
・

「で？朝ごはんて何なんだ？」

一寸気になったので聞いてみる

「ああ、まあ大したものではないがな・・・」

そついい、キッチンから、皿をもってきた

そこには・・・

「ホットケーキ・・・」

「そうだ、嫌いかな？」

「いや、好きだけど」

「ホットケーキって包丁使うかな？」

疑問をぶつける

「使うだろ」

・・・駄目だ、うまく丸め込まれてるよ・・・

「まあ、味は私が保証するからさ、食べましょうよ」

「なぜ、妹紅が保証するんだ」

疑問その２ですね

なぜに妹紅が保証する

「・・・食べないのなら私が食べるかな？」

「いや、何が何でもいただきます」

「そうか、ならいい」

慧音さん納得早い、理解力すごい！

「さて、慧音今日は寺子屋はいいのか？」

「ああ、もうちょっとしたら行くよ」

「寺子屋かあ、頑張れよ」

「ああ、そうだな・・・関係ないが、彩音は頭が悪いと聞いたのだが・・・？」

「いや、腹が痛い、御馳走様、帰るね」

やばい、とてつもなくやばい、なんか、寺子屋きちゃいなよ！
みたいなことになりそうな気がする・・・

「おい、腹が痛いなら休んでいけばどうだ？」

慧音さん、こういう状況の笑顔が一番怖いんですよ？

「いや、うん、大丈夫、うん、俺超頭いいからね」

「嘘ついてたら燃やしますからね？」

うん、妹紅の笑顔は殺意がこもってる、怖い

「ハイ、すみませんでした、頭悪い、で・す・が、寺子屋行くほどではないんでいいです」

「別に来てくれとは一言も言っていないんだがな」

「左様でございますか・・・」

そうして食事を終え、慧音は寺子屋に、俺と妹紅は人里をうろついていた

「なあ、『TOTO』は何処に行ったんだ？」

「ああ、その人なら彩音さんが寝た後に『夜逃げヒヤッホー……ーイ』って言って帰りましたよ？」

「あゝあいつ馬鹿だからなあゝ俺より成績上だけど」

・・・馬鹿が俺より成績上って自分で言っただけで悲しくなってきた・・・

「泣ける」

「なんでですか？彩音さんが『馬鹿』だからですか」

「ちよいと君、表でようか？本気出しちゃうよ？」

「上等！一回本気の彩音さんと戦ってみたかったですよ、フッフッ」

おお、いいプレッシャーをもつようになったな、妹紅も、師匠として素直にうれしいよ・・・

「ん、でもさ、人里で暴れたら、巫女とか呼ばれて、妖怪退治！！つてなるんじゃないか？」

「私たちは、退治されても復活するんで、あきらめてくれるんじゃないですかね？」

「いや、ねえ、あの巫女金払うって言われたら、意地でも殺しまくるだろうよ」

「じゃあ、逆に殺し返すっているのはどうですか？」

「うん、幻想郷が壊れる」

「そしたら私は適当な場所で暮らしますよ」

適当な場所って、何処？

「うん、まあ、そんなことより雪合戦しない？」

「そんなことよりって、何ですか？彩音さんが振った話題ですからね？」

「うん、知ってる、でもしょうがない」

うん、しょうがないと思うよ、色々と

「で、雪合戦って何ですか？子供ですか？」

「いや、そういつこと言つなよ」

本当にそういつこと言われると傷つく

「まあ、いいですよ、彩音さんのお願いなら」

「よし、じゃ、2日後に博麗神社で」

「え？ちよ、待ってください、何で走るんですか？何で逃げるんですか？」

その場を走って退散これがおれの生き方、生き方なのさ！！

そして、そのあと俺は闇夜に会いに行きましたあゝ

第56話 もこたんと人里で（後書き）

もこたん雪合戦にinしたお

つーわけで、日曜日に7時起きはつらいわけで、10時まで寝ていたいわけで・・・

ユニークまさかの3000人突破！双塔跡にならないと突破しない
と思ってたのにね、SPそのうちやりたいと思いますww

第57話 闇夜と綾見の一日

前回までのあらすじ

妹紅雪合戦参加！

「…ひとついいかな？」

「なんだい？」

「雪合戦なんて何で急に言い始めたんだろうね？」

「さあ？なんでだろうねえ」

ボリボリと彼女は煎餅を口にする

「まあ、馬鹿だからしょうがない」誰が馬鹿だと？」

「ぎゃあああああつー！」

鬼が悲鳴を上げた

・・・そうして僕たちの一日は始まった

「・・・大丈夫かい？綾見」

先ほど彩音にボコボコにされた鬼の名前を呼んでみる

「・・・助けてくれたっていいじゃないかぁ」

涙目でこちらに訴えかける、それを僕は無視し、煎餅を食べる

「まあまあ、落ち着きなよ、それに君が馬鹿なんていつから悪いんだろう？まあ、実際馬鹿だけど・・・」

「オイ？二の舞になりたいのか？」

「・・・それはちょっと、あれかな・・・」

「素直に謝れば、綾見みたいにはならないぞ？」

「君に謝ったら、僕のプライドが廃る」

「プライドなんてないだろう、お前」

「君よりはあるつもりだよ・・・？」

「上等！こいよ」

・・・そうして僕たちの戦いは始まった

「・・・疲れた」

「大丈夫かい？ 闇夜あゝ」

鬼が話しかけてくる

「大丈夫だよ・・・と、いうより、見てないで助けてくれればいいのに・・・」

「それ、私もさっきいったよあゝ？」

「関係ないね・・・」

「人のことなんて知らないってかい？」

「そういうことだね」

・・・そうして僕たちの雑談は終わった

第57話 闇夜と綾見の一日（後書き）

・・・今日はShifteキーが取れたので、短めに・・・
綾見のセリフとか、『』が多いのもう、やんなっちゃうよ!!

まあ、そういうわけなんで、しばらく更新止まるかもです・・・w

第58話 それぞれの一日（前書き）

まあ、前回とのつながりは・・・たぶんないと思う、うん

第58話 それぞれの一日

前回までのあらすじ

闇夜と綾見の彩音君に負ける残念な一日

「・・・彩音さん、私を雪合戦に誘ったためだけに人里に誘ったのかなあ・・・」

人里を一人呟きながら歩く少女がいる、赤いもんぺに長い白髪少女、藤原妹紅だ

「おい、妹紅！どうしたんだこんなところで」

走りながら、妹紅を呼ぶのは寺子屋の教師、上白沢慧音だ

「・・・慧音か、寺子屋はどうしたの？」

「今日は午前中で終了だ、子供たちが見つけてくれたから来たんだ」

「そっか・・・ねえ、慧音おなか減った・・・」

「そうだな、何か食べるか」

「じゃ、慧音も奢りでよろしくね」

「・・・またか、そろそろ私のサイフの中身が・・・」

「気にしないほうがいいよ？心の狭い女だと思われるよ？」

「・・・責めて気を使えよ・・・」

「じゃ、その飲食店に行こう」

「話を聞け・・・」

「熱い、死にそうだ・・・」

綾見宅に熱いと嘆く少年が一人、この暑さでやられたのだろうか？

「まあ、頑張りなよ、耐え抜いたら御褒美をあげるよ」

そして、この家の主人、綾見が厚いと嘆く少年に話しかける

「御褒美って、何だよ・・・かき氷？」

「冬にかき氷って、自殺行為じゃないか・・・」

そういい、綾見は空を見上げる、雲ひとつない青空に、燦々と輝く
太陽

冬なのに、とてつもなく暑い

「じゃ、あと5秒ね」

「うおおおおおっ」

力ない声で耐え抜く少年、名は彩音そして、その少年は、今火あぶり中である

暑いのが『熱い』であつたのはこのためである

「3、2、1、0」お疲れ様」

「はあ、はあ、もういやだ、おれ死ぬわ、もう死ぬわ、マジで死ぬ

わ、私もついやだ、もう2度こんなことしない」

「いや、自分で選んだんじゃないからね、私がやらせたんだからね、罰ゲームだからね？」

「過酷だ、罰ゲームじゃないよね、不老不死の罰ゲームだよ、凡人でも耐えられるものにしようとは思わないの？」

「いや、私も殺されかけたからね」

私も殺されかけた、については前回、第57話を見てもらいたい

「じゃ、御褒美のお……思いっきりパンチ!!!!!!」

「ああ、俺、もう、

生きるのに疲れた……」

少年はこう言い残し、この世を去った……

第58話 それぞれの一日（後書き）

お気に入りユーザ20に突破！

俺の風邪の状況悪化！！

Shiftキーの治る気配なし！！

・・・いいこと一つに悪いこと二つ、最悪だ・・・鬱だ・・・

SPは書き終わったら載せますぜ！

第59話 雪合戦の理由

前回までのあらすじ

まあ、みんな大変でしたね、うん d o n ・ t m i n d ！！

（なあ彩音、いきなりなんだが雪合戦には何かやる意味があるのか？）

「ホントにいきなりだな、まあ語ると長くなるけど？」

（別にいいさ、私は常にお前の中にいる、私は時間を気にすることはないのさ）

「・・・地味に便利だな、まあ、しょうがないから語ってやんよ、あれは、たしか・・・」

・・・回想、彩音宅・・・

——あの日には確か冬の猛吹雪で、家に引きこもっていた時のこと——

「俺は、愛は世界を救うと思う、たとえ違っていても、俺は愛が世界を救ってくれると信じてる」

「何を言っているんだお前は、病院にでも行くか？」

「・・・父親の言っているいいセリフなのか、傷つくぞ？親にそんなこと言われたら傷つくぞ？！」

「・・・病院行って治るんなら、行ってもいいよ、でもこの気持ちは止まらない、止めることはできない、止めさせはしない、たとえ誰でも、この俺でさえも」

「よぉーし、なら天国にでも送ってあげよう！安らかに眠れ、彩音」

刃物を持っておれに襲いかかろうとする、こいつ、一発殴りてえ・

「つとお・・・おいお前！実の子供に向って怖いこと言っんじゃないよ、この、くそじじい」

「父親に向かつてくそじじいだと？！許せん、でも、もう一回言ってくれても」

どMだと？！まさか、この変態にそんな属性があったんなんて

「・・・ハア、OK黙って死ね、駄目（人間として）変態（親父）」

「それでも、親父って言うてくれるところが可愛いよな、彩音は」

「・・・あらいやだ、本気で気持ち悪いわ、もう人間として見れないわ」

「・・・お父さんをなめるなよ？」

微かに殺気を出す変態（親父）

「全然怖くないわ」

「・・・もう、お父さん嫌だ、もう、辞表だすわ、今まで本当にありがとうございました」

心が折れた、早い、恐るべき速さ、こいつ、人間として大丈夫か？

「ハイ、今までお疲れ様でした、それでは、この家から出て行ってください」

「この猛吹雪の中を？！辞表出したらそんなひどいことされるのか？！仮にもお父さんだぞ」

「関係ないですよ、辞表出したんだから」

「・・・取りやめる」

え？辞表ってこんなに簡単に取りやめることできるの？

「え？無理、早く死ぬ準備してきてよ『お父さん？』」

精一杯の愛を向ける、絶対顔ひきつつてるわ俺

「怖い、主に顔が、俺はこんな子に育てた覚えはない！」

「俺さあ、お前に何かしてもらった覚えはない」

「動物園行こうか？」

「・・・この猛吹雪の中？」

「じゃ、オムライス食べるか？」

「それより、雪合戦しようぜ」

「・・・自殺行為、彩音、お父さん殺したいのか？」

「あ、ばれ・・・ゲフンゲフン」

「わかりやすいよッ！お父さん悲しい」

「それより、早く、早く」

「ハア、まだまだ子供だな、猛吹雪の中、雪合戦とか・・・かわいい」

「・・・以上、これが俺の第3の能力、回想を操る程度の能力でした
(嘘)・・・」

（・・・極めてどうでもいい、と、いうより、能力そんなのいらないだろう）

「意外と使うかもよ？」

（どういう状況だそれは）

「・・・さあ、頑張って待ってれば来るんじゃない？そういう状況」

（ハイハイ頑張れよ）

・・・雪合戦まであと1日・・・

第59話 雪合戦の理由（後書き）

はい、なんか更新ペースが2日に一回って感じになってますね
これからこれでいこう！出来る限り

と、いうわけで、更新ペースは2回に一回になります、うん、以上
です

第60話 作戦会議

前回までのあらすじ

雪合戦の超どうでもいい動機が発覚、葵さんが呆れてますよ？彩音さん

・・・ここは魔法の森のとある一角、ここには、彩音、闇夜、綾見、『TOTO』の4人が集まっている

彩音は、何処から用意したのか、学校の校長などがよく使いそうなあの、机的なものに『議長』と書いた紙を張り、偉そうに構えている

338

「どうも、議長の彩音だ、これより作戦会議を執り行う！！

・・・さて、突然だが明日が雪合戦本番になるが、みんな個人で練習はしたのかな？」

議長の彩音が一言

「議長！異議ありいゝ！！」

綾見が拳手

「はい、どうぞ綾見さん、あとこれは裁判じゃない」

議長がさりげなく突っ込みを入れる

「個人で練習つてどうやってやるんですかあ？私は超頭がいいのでわかりません」

「華麗にスルーするのか、あと、超頭いいって何だ？調子に乗るなよ？」

「・・・まあ個人練習は、壁に向かって雪玉を思いっきりブン投げればいいんじゃない？」

「せんせ・・・議長！それだと私の能力で壁が崩壊します」

「先生じゃないです、あと能力を使わないでください」

「私は鬼なので、元のスピードも力も凄いのですが」

「それは、もう傲慢なので、本当に人間に謝ってください、土下座まで3、2、1、どうぞ」

「誰がするか、さっさと進めろ」

闇夜が鶴の一声で場の空気を静める

その静寂を破り彩音が

「・・・議長を抑え込むとは、こいつできる・・・」

「もういい、さっさと作戦を考えよう」

呆れたように闇夜が一言

「なあ、俺さ帰って寝たいんだけど？早く寝ないと、明日遠足でワクワクして眠れない小学生みたいになるんだけど・・・」

「うん、じゃ、帰れ」

馬鹿（『TOTO』）に馬鹿（彩音）が冷たい一言

「うん、じゃ、お疲れ様、明日楽しみにしてるよ」

そう言い残し立ち去る『TOTO』

「じゃ、僕も帰ろうかな・・・」

「私もお」

次々と立ち去り、その場に残された彩音

「・・・この机みたいな運ぶの大変だったのに・・・」

そう言い残し、立ち去る

・・・余談だが、その後その机は、とある魔法使いの実験裁量にされたそう・・・

所変わって博麗神社、ここにも、先ほどと似たような影が2つ

「・・・さてと、今日ここに集まってもらったのはほかでもないぜ、今日は・・・」

明日の雪合戦に備えて、作戦会議を行っぜ」

白黒の魔法使いが一言

「帰れ、家で実験でもしてろ」

して、その一言に対し、紅白の巫女が一言

「いいじゃないか霊夢！作戦会議は重要だろう？」

「ええ、そうね、ただ私は雪合戦に参加した覚えはないし、参加する気もないから、家で実験をしていなさい」

「・・・霊夢、もし、もし私たちが雪合戦で優勝できたら、宴会でも開こうぜ？」

「せめて賽銭を入れろ！！」

巫女の悲しい叫びが神社全体に響き渡った・・・

第60話 作戦会議（後書き）

え？作戦会議してない・・・

まあ、これが彩音たちのペースですよ

え？巫女たちもしてないって？

あれはただやりたかっただけですww

第61話 諸注意

前回までのあらすじ

作戦会議ってさ何がしたかったの？

「・・・俺さ、リーダーに向いてないな」

さみしくなった、魔法の森の一角に独り言をつぶやく、少年が一人

（・・・ああ、私に言っていたのか、寝てたのに）

「・・・寝るなよ、おれは一生眠りについていたいのに」

（病んでる病んでる、一回病院行ってこい）

「・・・病院か、病院と言えば、永遠亭だな」

（・・・お前が思いふついていると、私の気分も下がるんだよ）

「・・・輝夜と永琳どうしてんのかなあ」

- - - 博麗神社 - - -

ここにも作戦会議が終わり、静けさを取り戻・・・さなかった人影が二つ

「・・・なあ霊夢うゝ雪合戦やろつぜ」

「いやよ、何でそんな子供の遊びしなくちゃいけないのよ」

「・・・お前、胸とかこどm「何かあったかしら？」なんでもないぜ」

ひどく冷たい視線を向けられる、魔理沙

「・・・で、何で帰らないのよ、さつさと実験しなさいよ」

「いや、一寸な、面白そうな人影が見えるもんでな」

そういい、魔理沙は博麗神社の長い永い階段を指差す

「一寸、ナレーター、永いつて何よ、ちゃんと終わりあるわよ」

「霊夢、ナレーターに突っ込みを入れるなよ」

・・・そう話しているうちに、人影はどんどん大きくなり

「霊夢、お茶」

そう、堂々と言い放った

「・・・」

「・・・」

そして、場の空気が凍る

「・・・オイ？どうした参拝客だぞ？お茶を出せ」

KYが場の空気をさらに凍らせる

「ハァー、悪いけど、初っ端から、お茶出せなんていう参拝客は見たことないから、お引き取り願うわ」

巫女さんが重たい口を開く

「……まあまあ、仲良くしようぜ、なっ？」

「……お前のせいでこんな空気になってるんだぜ？」

KYに続き魔理沙が口を開く

「……チツ、まあお茶はいいとして、雪合戦の注意を言いに来たんだよ」

「舌打ちすんな、で、注意って何よ？」

「まず、遠くに飛ばしすぎて、花をつぶしたりしないこと、フラワーマスターに殺されるから」

「……またあいつとの戦闘になるのはごめんだぜ」

「で、次に、意志を雪玉に入れないこと、当たったら死ぬ」

「……何で私を見るのよ、しないわよッそんなこと」

「で、最後にちゃんと始まる前にトイレに行くんだぞ？」

「「帰れ!!」」

巫女と魔法使いのセリフがかぶる、そして、KYは一目散に逃げしていく

「……いい迷惑だぜ、私たちを子供扱いしないでほしいんぜ」

「アンタもまだ胸、子供じゃな」マスタアーーーースパアアアアア
アク」

・・・その日は轟音が神社に響き渡った・・・

・・・雪合戦開始まであと・・・

第61話 諸注意（後書き）

うん、雪合戦楽しみだね w k t k w k t k

さて、雪合戦が終われば、妖々夢になりますね、はたして今年中に永夜抄にいけるかどうか・・・

第62話 開幕ッ！！

前回までのあらすじ

遠足に行く前にはちゃんとトイレに行っておくんだぞ？集団下校の時にトイレ行きたいと言って、先生困らせちゃだめだぞ？

――博麗神社――

青天の散歩日和の空の下、声高らかに、叫ぶ者が一人いた・・・

「えゝこれより、第一回かどうか知らんけど、おそらく第一回博麗神社、大雪合戦大会を行いますッ！！」

いえええい、と会場が盛り上がる

「静粛に、これより、チーム発表を行う」

いええええええええええい、と会場の盛り上がりが加速する

「まず、1チーム目、メンバーは、博麗霊夢、霧雨魔理沙」

うおおおおお、と会場が盛り上がる

そこに、抗議の声が一つ

「一寸！私は参加した覚えはないわよ！！」

しかしその講義を無視して、続ける

「続いて、2チーム目、メンバーは、大妖精、チルノ」

・・・会場が静けさを取り戻す

「アタイったらさいきょーね」

？が発言、またしても、それを無視し続ける

「次に3チーム目、メンバーは紅美鈴、小悪魔、パチュリー・ノーレッジ、十六夜咲夜、レミリア・スカーレット」

レミリアのカリスマに会場が、ざわめく、調子のんな！などの声はすべて、脳天にナイフが刺さり、続きの言葉が紡がれむことはない

「最後に、4チーム目、メンバーはあ、俺、闇夜、綾見、『TOTO』、妹紅でしー！！」

・・・噛んだ、絶対噛んだぞ、などと声上がる

「・・・噛んでない、仕様だよ、わかんないのか！！」

キレる、理不尽に

「まあ、いいさ、して、組み合わせだが、1チームVS4チーム、2チームVS3チームでいいよな」

いいともーと声上がる、何処で知ったそんな言葉と突っ込みが入る

「じゃ、初戦、1VS4スタートおおおおおっおおお!!!」

今ここに戦いの火蓋が切って落とされた・・・

・・・ルール説明!!!!

参加人数は最低2人、最高5人

能力の使用は3回までok

勝利条件は相手チームの大将に3回雪玉を当てればok

敗北条件は自分のチームの大将に3回雪玉が当てられたら、スペルカードの使用、フラワーマスターを呼び寄せたら負け

最初に30分の時間を与えるので、寝るでも、雪玉を作るでも、壁を作るでもok

それでは、健闘を祈る!!

- - - 1VS4開戦30分前（4チーム） - - -

「・・・じゃ、壁と雪玉作る係に分けようか」

4チームのリーダーが仕切る

「ああ、私雪玉作りたいよぉ」

「僕は壁で」

「俺は雪玉と壁を交互に」

「私はすべてを溶かします」

各々がやりたいことを言っていく

「よし、じゃ、最初から突っ込んでいこうか」

リーダーがまたしても仕切る

「まず、綾見、片腕で雪玉作れんの？壁作ろうよ」

鬼に対し一言

「次に闇夜、お前は埋まっとけ」

闇夜に対し一言

「後、『TOTO』お前は、なんかまともだな」

『TOTO』に対し一言

「んで妹紅、溶かすな、絶対に溶かすな」

妹紅に対し一言

「・・・さて残り25分だ各々仕事に取り掛かろう」

闇夜が仕切る

「え？俺は、俺大将なのに・・・」

- - - 1 VS 4 開戦 30 分前 (チーム 1) - - -

「・・・霊夢、私たちは寝ようぜ」

「そうねえ、めんどくさいから寝ましようか」

「体力は有り余ってるくらいがちょうどいいもんな」

「あんたの場合はそうね」

「じゃ、お休み」

「うん、お休み・・・」

-
-
- 開始まで残り30分
-
-

第62話 開幕ッ！！（後書き）

うん、短編がうまくまとまんないよ・・・
次回から開戦ですぜ

第63話 戦いと、敗北

前回までのあらすじ

前回を見よう！

「・・・さてと、そろそろ時間かなあ？」

少年がつぶやく、その手にはたくさんの雪玉がして、前方には、とてつもない高さの雪の壁が

「じゃ、そろそろ試合会場にでも行こうぜ」

そう言い残し、その場を立ち去る少年

そのあとに続くは、雪玉をめいっぱい雪玉を持った者たち
その者たちは何処へ・・・

「つーわけで、開戦したいんだけど、そっち雪玉全然もってないじゃん」

少年・・・彩音が雪玉を全く持っていない、敵チームに声をかける

「ふあゝあつ、まあずっと寝てたからねえ」

相手チームの巫女が眠たそうに答える

「いや、まあ、寝ていいとは言ったけど、本当に寝るか、お前」

彩音が巫女に突っ込みを入れる

「まあまあ、開戦したいんなら早く開戦してよ、素敵な巫女さんから貴重な睡眠時間を奪わないでよッ!!」

「自分で言っくなッ!」

理不尽に切れる巫女に対し、彩音も堪忍袋の緒が切れたのか、切れ返す、このようなやり取りが3分ほど続き・・・

「・・・じゃ、かゝいせん」

口喧嘩に疲れ果てた彩音が生気のこもってない声で、開戦の合図、右腕を天につきたてる瞬間、彩音の横を雪玉が神速で通過する

「えー・・・」

思わず微妙な声を上げる、投げた張本人は

「ん？もう開戦したんだろう？じゃ、投げてもいいじゃないか」

開き直る

「・・・ああ、いらつとした、よし、こっちも投げるわ」

そついい、後ろに下がる彩音

・・・そつして、やっと雪合戦は始まった

ヒュン、と風を切る音が聞こえる

サツ、と何かを避ける音がする

ヒュン、と風を切る音が聞こえる

サツ、と何かを避ける音がする

これを繰り返す、何度も、何度も

・・・これが雪合戦

・・・これが、馬鹿どもの意味もないであろう戦いだ・・・

「とりあえずあたれえええええッ!!」
誰かが雪玉を投げる

「当たったら終わりなんだよッ!!」

そついい、ターゲットは雪玉をかわす

「彩音エ、絶対許さん!!」

そついい、また誰かが雪玉を投げる

「ちよい!待ち!!この量はきつい」

そつ嘆きながらも、雪玉をかわす

・・・ただいまの状況6VS1・・・

「ちくしょおおおおおおおつ!!」

そつ言い、被弾する、1回、2回、3回、4回、5回...こちらが数えるのも嫌になるほどに

「じゃ、あんたの負けね、とりあえず、帰るならお賽銭を入れてから帰りなさい」

巫女が敗北者に向かって『とりあえず帰れ』というような視線を向ける

「・・・おk、もう帰る、賽銭は入れないがな・・・さらば!!」

そついい、永い階段を駆け降りる彩音

途中、人にぶつかりそつになったが、ぎりぎりですれを回避する

「・・・帰って何すっかなあ」

そう呟きながら

ただひたすらと永い永い階段を駆け下りていった・・・

第63話 戦いと、敗北（後書き）

お、遅れた理由？！

よ、予約時間間違えたただだよ・・・

嘘です、書いてたのにF5キー間違えて押したんです・・・
俺悪くない・・・

まあ、年末とかも更新速度落ちると思います

でも年内は2日に一度更新したいなあ・・・

第64話 怪しげな参拝客

前回までのあらすじ！

アレ？階段で参拝客にぶつかりそうに・・・いやありえない・・・

トン、トン、トンと規則的に階段を上る音がする

その音はしばらく続き、突如飛来した雪玉により静止された

しかし、そのものは飛来した雪玉を右手で握りつぶし、再び階段を昇り始める

そして階段を登り切るところで呟いた

「パーティの始まりだ」

その怪しい声は境内に響き渡った・・・

「うん、寝よう!」

雪合戦を終えて早々、彩音は寝ると発言した

「疲れたもんね」

柄にも合わない『』を使って独り言をつぶやく
事情を知っているように知っていないなろうが気持ち悪い様子だ

「さーとそれじゃおやすみなさ」

その言葉が最後まで紡がれることはなかった

・・・彩音が突如出現したスキマによって、落下していったのだ

「これはあなたの仕事よ」という言葉と共に

そう落下していったのだ・・・

「よっころっせつと」

親父臭い掛け声とともに、着地した場所は先ほどまで雪合戦を行っていた場所・・・博麗神社だった

あたりは先ほどまでと変わらない、雪玉の嵐・・・

戦っているのは、紅魔組と妖精組だった

先ほどまで敵だった、巫女は・・・先ほどぶつかりそうになった参拝客と話していた

・・・目を擦ってみた

・・・変わらずに参拝客と話している

・・・もう一度目を擦ってみた、変わらずに参拝客と話している

「・・・嘘だこんなの、こんなの・・・」

ハァーと息を吸い込み、次の言葉を発するための準備をする

「博麗神社じゃない!!」

そう言つて駆け出した、永い階段へ・・・紫が立ちふさがった

「退け!そこをどけるんだ紫!!そうすれば、スキマに落としたことは許してやるから」

神社から去るべく講義を開始する

「まあ、あなたに命令される理由はなくてよ?」

おどけたように返す紫

「いいから、退けるよ」

若干の殺意をこめて、そこをどけるように指示する彩音

「だから、あなたに命令される理由はないと言っているの」

一歩たりとも引かない紫

「なんで、俺をここに落とした、ちゃんとした理由があれば、ここに残ってやるよ」

紫をどけさせることを諦め理由を尋ねる彩音

「・・・参拝客が危なっかしい空気を放っているのよ、もしもの時のための保険よ」

「保険で呼ぶな、俺もそこまで暇じゃないんだよ」

「アラ？先ほどまで雪合戦やら、寝るなんて言っていたのかしら？」

「ハハッ、何の事かなあ」

必死にごまかす彩音、そこで、試合終了のサイレンが鳴る

「ああ、そういえば、雪合戦やってたんだっけな、忘れてた」

「自分でやるって言い始めたのに、のんきねえ・・・」

勝者！2チーム！！などと結果発表が行われる

続いて、最終戦、1チームVS3チーム!!

「・・・最終戦か、もう終わりかあ・・・」

彩音が寂しそうに呟く

しかし、紫がこんなことを言う

「・・・わかってないわね、まだ始りよ・・・」

「?!」

紫が発すると同時に、彩音は自分が立っていた場所がなくなる、という奇妙な現象に襲われた

「・・・なんだよ!始まりって」

「言ったでしょう、保険であなたを呼んだと、雪合戦の保険じゃないわよ、戦いのサブメンバーってところよ」

「・・・最初からそう言えよ」

わかってたら準備したのに、と付け足しながら、地面がないという、なれない状況の中、戦闘態勢をとり構える

「まあ、主力メンバーがいるから、予備よ、本当に出る幕なんてないわ」

「だといいんだけどな」

笑いながら答える、少しでも場の空気を和らげようと・・・

第64話 怪しげな参拝客（後書き）

・・・うまく終われなかった

そして12時更新できなかった・・・

なんか色々と忙しくなってますが、2日に一回は頑張りますので
暇つぶしにでも見ていってくださいな

あ、コレここでいうところじゃないww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5379x/>

東方虹炎

2011年12月15日21時53分発行